

土器と墓制から見た
北東北の縄縄文文化



令和4年3月19日（土）埋蔵文化財講座日程

- 12：30～13：00 開場・受付
13：00～13：10 開会 所長挨拶、講師紹介
13：10～14：00 講演I（50分）
「統繩文とは何か」
鈴木 信氏（北海道立埋蔵文化財センター常務理事兼第一調査部長）
14：00～14：40 講演II（40分）
「統繩文化の南下と古墳文化の北上」
木村 高氏（青森県埋蔵文化財調査センター総括主幹）
14：40～14：50 休憩・換気（10分）
14：50～15：30 講演III（40分）
「古墳時代中期のフロンティアラインー田向冷水遺跡ー」
小保内 裕之氏（八戸市博物館 館長）
15：30～16：10 講演IV（40分）
「秋田県の古墳文化と統繩文文化」
島田 祐悦氏（横手市教育委員会文化財保護課課長代理）
16：10～16：30 講演V（20分）
「岩手県における統繩文化の土器と墓制」
井上 雅孝（滝沢市埋蔵文化財センター総括主査）

会 場 滝沢ふるさと交流館（滝沢市土沢 265番地3）

資料目次

| | |
|--------------------------------|----|
| 統繩文とは何か 鈴木信 | 1 |
| 統繩文化の南下と古墳時代の北上 木村高 | 17 |
| 古墳時代中期のフロンティアラインー田向冷水遺跡ー 小保内裕之 | 29 |
| 秋田県の古墳文化と統繩文文化 島田祐悦 | 47 |
| 岩手県における統繩文化の土器と墓制 井上雅孝 | 67 |

表紙写真 湯舟沢Ⅲ遺跡 後北C2-D式土器

「続縄文」とは何か

鈴木 信(北海道埋蔵文化財センター)

I 続縄文研究の前提

1はじめに

北海道の時代区分では、縄文式以降の縄文が付く土器のある時期を「続縄文時代」、縄文のつかない(≒刷毛目・ミガキが付く)土器のある時期を「擦文時代」とする。土器製作技法・組成の変化は細かい時間の推移を表す。だが、これが時代や文化変化の仕組みと1:1対応の因果関係である保証ではなく、土器変化の仕組みは未解明でもある。土器型式も時代区分も新規属性によって区分されるものの、時代や文化は土器型式より高次の概念であり、時代は支配・秩序という政治史的色彩が濃い用語であり、時代と文化は別種である。

時代名称はその期間における主体的文化負荷者名との整合を指向する。いっぽう、考古学は、遺物・遺構の集合を考古学的文化としてその負荷者を仮想するので、文化負荷者の不特定を許容する。そのため考古学における文化負荷者は匿名的である。

以上より、土器型式を時代区分に用いることは不適であるが、土器型式は「文化」に包含されることから物質文化名を代表することは許容される。よって、続縄文時代を使わず、「考古学による物質文化名+期」という命名法をとり、「続縄文期」を使う。

時間区分：山内清男の「続縄紋式」(山内ほか1936)に円形・刺突文土器群IX～XI期を加えたものを「続縄文式」とし、「続縄文式期」「(型式名)式期・(土器群名)期」を使用する。文中において「○○式期・○○群期」の表記は「○○期」と略称することがある。そして、続縄文式期は、道南部・道中央・道東北部に固有の型式が並立する時期を「前葉」、三地域に顕著な属性交換がみられる時期を「中葉」、三地域に共通な型式がみられる時

表 I-1 時期区分と土器型式 鈴木 2009b 引用加筆

| 東北北部 | | 道南 | 道央 | 道東・道北 | 西暦(C) |
|------|---------|--------------------------------|--|--------------------------|--|
| 弥生 | 砂沢式 | 尾白内Ⅱ群 | H37丘株式 | Fシココタン 崩式 | 桑浦…二群 |
| | 二枚横式 | 青蓄株式 | H317式 | 興津式 | 元町2式 |
| | 宇鉄II式 | 青蓄内Ⅰ・下船山式 西桔梗B ₂ | H37安町(式群) アヨロ2B ₂ 式 H38安町(式群) | (續縄文を含む群) | (中ノ鳥居3群) |
| | 田舎館2・3 | 南川畠 | アヨロ2B ₂ 式 | FIII/茨I式 | 宇津内B ₂ A1式 宇津内B ₂ B1式 |
| | 糸魚川式 | 南川IV | アヨロ3B ₂ 式 | 江別太1式 | 前2c後半～前1c前半 |
| | 家ノ前式 | 南川IV/柴内KII群 | アヨロA式 | 下田ノ茨II式 | 前1c後半 |
| | (鳥居) | 柴内KII群 | 後北C ₁ 式 | 下田ノ茨II式 | (中ノ鳥居～中葉) |
| | 前穴式 | | | 後北C ₂ /D(古・中) | (中葉～後葉) |
| | 赤穴式/坂蓋式 | | | | 2c後葉～4c前葉 |
| | 坂蓋式 | | | | |
| 古墳 | 南小泉式 | 後北C ₂ /D(式群) | 円形・刺突文土器群I | オホーツク式(十和田式期) | 4c中葉～後葉 |
| | 引田式 | | 円形・刺突文土器群II～III | オホーツク式(十和田式期) | 5c中葉 |
| | 住社式 | | 円形・刺突文土器群IV～V | オホーツク式(十和田式期) | 5c中葉～後葉 |
| | 栗園式 | | 円形・刺突文土器群VI～VII | オホーツク式(刺突文期) | 6c前葉～後葉 |
| 飛鳥 | | | 円形・刺突文土器群IX～X | オホーツク式(沈縄文期) | 7c前葉～中葉 |
| | | | 円形・刺突文土器群XI | オホーツク式(沈縄文期) | 7c後葉 |

* 東北北部は青森県(2005)・石川日出志(2006)・斎野恭彦(2011)、道東北は熊本後創(2007)を、弥生～古墳初頭の西脇は若林邦彦(2018)を参考。

続縄文前葉～中葉の層年代と型式の並行関係はV章を参照してください。

期を「後葉」に分ける。なお、時間軸として「統繩文時代」を用いないので細分名を「統繩文期○○葉」と略称した。

なお、後北 C₂・D 式のあとに続く型式名は所謂「北大式」が通有であるが、北大 I・II・III 式は型式として成立しないので、円形刺突文が付く後北 C₂・D 式と「円形刺突文土器」と「刺突文土器」を合わせて「円形・刺突文土器群」と呼び、後北 C₂・D 式を除いて I～XI 期に区分する。I～XI 期の明示が必要ない場合の総称は「北大式」を使用する。

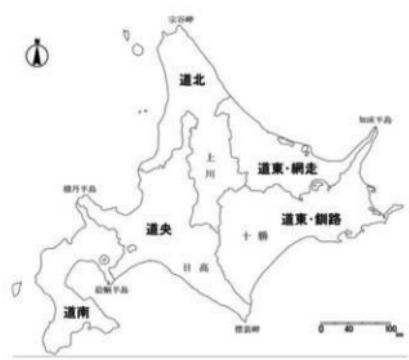


図 I-1 地域区分

空間区分：「北海道」は北海道本島と属島の総称で、「東北北部」は現在の青森・岩手・秋田県、「北日本」は東北 6 県と新潟県を指す。

北海道は千島列島を除き、渡島半島を主要部とする「道南」、石狩川中下流域を主要部とする「道央」、宗谷岬から石狩川上流域を主要部とする「道北」、日高山脈以東の太平洋側とオホーツク海側である「道東」に区分した。それらの下位区分には、「道南」が渡島・檜山・胆振西部・後志西部、「道央」が胆振東部・日高・石狩・空知・後志東部、「道東」は十勝・鉾路・根室と網走、「道北」は宗谷・留萌と上川がある。

文化負荷の主体者：文献史料における民族名は形質的・風俗的・地理的の差異に基づく過去の定義であり、自称・他称がある。例えば、東北北部以北の人々は「蝦夷」「渡島蝦夷」と呼ばれたが自称ではない。文化人類学においては現時点の風俗的の差異に基づく現時点での定義であり、自称が多い。考古学においては過去の物質文化の差異における現時点での定義である。形質人類学においては骨格形態・遺伝子的差異における現時点での定義であり、文化的帰属・主体者名に直接帰着しない。

自称の使用は是であるが、他称には検討が要されるものも含まれる。ただし、歴史用語として定着しているものもある。考古学資料の匿名性より行為の主体者も定まらない場合が殆どである。そこで本論においては、北海道の物質文化における主体者には「考古学による物質文化名+人」：例えば「統繩文文化人」を使用する。

2 統繩文研究の視点

「統繩紋」は、山内清男が 1925 年刊の V.Childe の『The Dawn of European Civilization』にある考古学的文化区分名 Epi-Paleolithic を援用して作った用語で、Jomon に epi-を接頭した合成語であった(大沼 1977・1999)。なお佐原真によれば、1932～33 年に山内が北欧圏に倣ってこれを設定したことである(佐原 1984)。時間の前後について「あと」を表す接頭辞には epi- と post- があり、epi- は接続を含意し、post- は断絶を含意する。epi- の選択は、山内が東北北部～北海道における「統繩紋」を繩文土器・繩文文化の後継と考えていた証左である。

「統繩紋式」という言葉の初出は 1936 年である(山内 1936)。その内容は「(前略)繩紋式の後にも、繩紋を持った土器型式が相当続いている。(中略)うちに二つ以上の細別を

認めうるようです」(山内ほか 1936)、である。伊東信雄は東北北部～北海道にある土器について、「統繩紋式」と了解しつつも「弥生式的なもの」と考えた(伊東 1950・1955)。

「統繩紋式文化」という言葉の初出は 1959 年『図解 考古学辞典』(水野・小林 1959)であるが、山内自身は「(前略)内地が弥生文化に変化する頃になると、全道は、わたくしが‘統繩紋式文化’とよんだ(後略)」と述べ、1937 年当時には既に「統繩紋式文化」という用語を使っていたと語っている(山内 1969)。それは「現在の原始民族の経済階級のうちの高級狩猟民」(山内 1937)、「(前略)生活状態は、繩紋式と同様、狩猟漁撈採集であった。」(山内 1964b)、後には「(前略)内地は稻が作られ農業が一般化しているのに、全道ではその痕跡がなく、高度の漁撈狩猟民としての生活がみられるのである。」とのべる(山内 1969)。

近年では、「統繩文文化」という考え方を受け身な考え方である。(後略)」(藤本 1988)、「統繩文文化の(筆者補)概念の空洞性・暫定性は今なお解消されていない。」(高瀬 2010)と言われる。繩文文化の一部・地域史であり、一時代史として扱われない現状の指摘である。その背景には山内の説があり、それは V.Childe が唱えた伝播論に基づく欧州新石器の成立との比較から導かれていた。

「統繩文」は、接頭辞の「統」と語根の「繩文」の合成語であるから、それらの再確認が端緒であり以下で検討する。

北海道の「-繩文」について: 北海道の「繩文」は、自然環境・食料生産において本州の「繩文」と相違がある。北海道全域で繩文文化の自然環境が整う時期が後氷期の温暖期(約 11,500～8,400caBP)以降であり、少なく見積もった場合でも本州に比べて 3,500～1,500 年遅れて繩文的環境が形成されたと考えられる。

石狩低地帯よりも南西側の渡島半島を中心とする地域ではトチノキ管理利用には遅滞はないものの、クリ栽培・イノシシ養育は遅れ出



現する。石狩低地帯ではクリ栽培・イノシシ養育はさらに遅れて出現する。日高山脈以東では、トチノキ管理利用・クリ栽培はなく、イノシシ養育は太平洋側の一部に石狩低地帯とほぼ同じころにみられる。いっぽうで海獣獵はほぼ全域で盛んである。

北海道の縄文文化は本州のそれとはまた異なって、生業において、本州の縄文要素の欠落があり、受容した場合にも遅滯がみられかつ少例となる。「統縄文」の語根となる「縄文」において、北海道のそれは本州の縄文と異質である。北海道の縄文文化は、石狩低地帯以西については「変則的縄文文化」、日高山脈以東については「逸脱的縄文文化」ということになる。

統縄文の「統一」について：統縄文の何が連続的なのか。資源利用・物資交換については以下と考える。「生業の特化：威信的漁撈→対価獲得獵」・「広域交換の生業基盤化：第二の道具（玉類）の交換→第一の道具（鉄器）の交換」、後葉以降の「道央の優位性」は地勢を利用した広域交換によりがもたらされた。くわえて縄文型の網羅的生業を維持し漁撈・交易に特化した経済である（鈴木 2009a, 2015）。いっぽう高瀬克範は、統縄文前～中葉に「資源構造の拡張的開発」がみられ、「道央の優位性」により統縄文期後葉に「高移動性集団による物資交換」がみられる、と考えた（高瀬 2014）。

生業変化が「生業の特化」あるいは「資源構造の拡張的開発」にあたるのか、「地勢」「資源構造の拡張的開発」により「道央の優位性」が生じたのか、検討が必要である。

加えられるべき観点：気候変動は生業にどのような影響を与えたのか。中川毅は、農地と自然状態の生態系を比較して前者が単相（人為的）、後者が複相（自然的）であることを示し、後氷期以後と晩氷期以前の環境がこれにあたることにも言及している。その上で、農耕と狩猟採集は生態系変動から受けける影響に対して全くことなる応答を見せることが示された（中川 2017）。

気候安定の場合：農耕は高い食料生産性（少種多量）により余剰が発生し、人口増・社会構造の複雑化・食料備蓄の増が進む。これにより1回の異常気象は備蓄・食糧交換により危機回避が可能である。狩猟採集は農耕よりも低い生産性（多種少量）により少ない人口が維持される。1回の異常気象では多様な資源を活用し危機回避できる。農耕・狩猟採集とも食料事情の逼迫はない。

気候不安定の場合1：連続する異常気象において、農耕は備蓄が払底し食糧交換の原資もなくなり、危機回避は不可能である。狩猟採集は

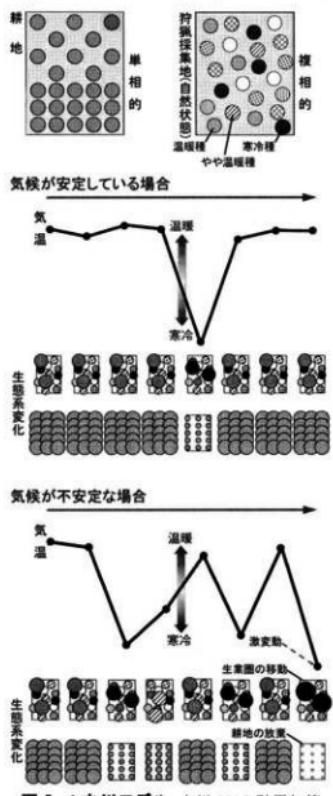


図 I-4 中川モデル 中川 2017 引用加筆

多様な資源を活用し危機回避できる。農耕は危機的状況になるが狩猟採集はそうならない。

気候が不安定な場合 2：激変動がある場合に双方とも危機回避はできない。

人口が少なく生態系が複相である狩猟採集は気候変動に対する危機回避力が高く、人口の増加・社会の複雑化に至る農耕は気候変動に対する危機回避力が低い。自然環境変動は気候変動に由来し、植生・地形に依拠する生業にも関連する。

II 文化変容の背景

1 気候変動と自然環境変動

ある種の円石藻は有機化合物アルケノンを生成する。アルケノン生成は円石藻の育成海水温により変化するので、その生成は海水温と高い正の相関がある。特に生息海域が内湾・近海の場合には夏季気温と海面温度とは高い相関がある(川幡 2016)。

図 II-1(内浦湾長万部町国縫沖採取サンプルの解析、東京大学大気海洋研究所 川幡穂高教授ご教示による)によると、弥生時代は、最高気温と最低気温の間に2回の下降(①・③)と2回の上昇(②・④)がある。古墳時代は、最低気温(⑤)は最低気温の直前の寒冷化のあとに90年間で最高気温とほぼ同じくらいになる急激な上昇(⑥)がある。奈良平安時代は、初頭にある温暖期(⑦)を差し引くと、249年間で-2.6°Cとなる寒冷傾向である(-1.04°C/yr)で、⑧は連続する寒冷であるがその中程に寒冷化が緩やかになる部分がある。変動が一定傾向的に継続していないことが読み取れる。

変動百年率については、森林帶の交替が起こった晩氷期～後氷期(変動百年率:1.3~1.4°C/yr、変動期間:26hyr)と比較すると、⑧の最高気温～最低気温:-1.52°C/yrのみが1.3~1.4°C/yrを下回る。いっぽう、変動期間は全てが26hyrを下回る。統縄文期は後氷期の寒冷傾向(縄文中期以降)に後続する時期であるが、晩氷期～後氷期の変動に較べると変動幅は激しいものの変動期間が短い。単一傾向が続いている期間の長さが森林帶交替を起こす十分条件といえるので図 II-2のような状況は生じない。

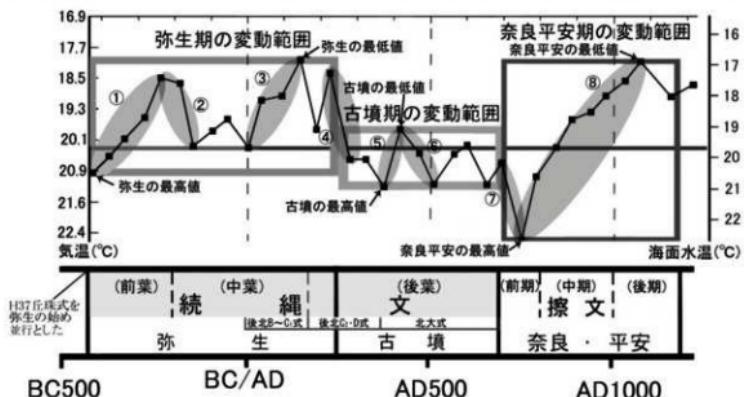


図 II-1 アルケノン気温・海面水温 川幡 2018 引用加筆

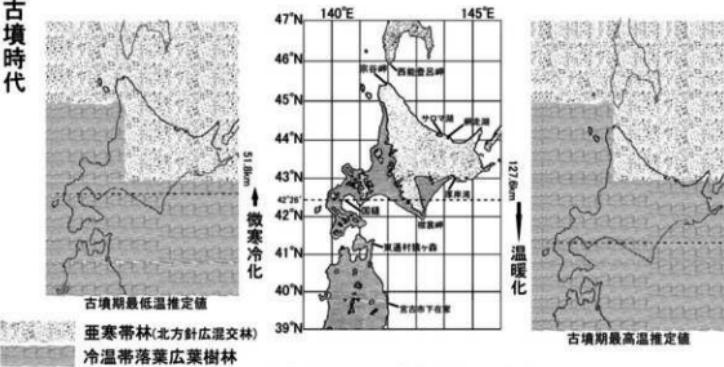


図 II-2 気候変動による森林帯移動の仮想図

2 気候変動と文化の拡大縮小

木村 高によって後北 C₂・D 式期(古墳時代併行期)における続縄文文化要素拡散の原因説がまとめられている(木村 2011)。原因説は以下の3件である。A説:気候の寒冷化、B説:樺太方面から南下した北方文化の影響、C説:鉄器など物資獲得のため。

北海道における気候変動の激変期は、弥生時代の②③、古墳時代の⑤⑥、奈良平安時代(擦文文化期)の⑦⑧、ほかに時代を挟んで縄文晩期～続縄文期前葉の急冷期①、続縄文期中葉～後葉の急激な回復期④がある。変動量の大小は、急冷期:⑧>③>①>⑤、急激な回復期:⑦>④>②>⑥の順である。

「続縄文の要素の拡散」といえる後北 B～C₁式期は急冷期③を含む。「続縄文文化の拡大」といえる後北 C₂・D 式～円形・刺突文土器群I～V期は、急冷期⑤、急激な回復期④⑥を含む。「続縄文土器・墓制が北日本に分布する」時期は、急冷期③→急激な回復期④→急冷期⑤→急激な回復期⑥を含む。いっぽう、急冷期①→急激な回復期②期であるH37 丘珠～H37 栄町式では東北北部の要素が北海道へ拡散するものの、北日本での「続縄文文化の拡大」「その要素の拡散」はみられない。気温の昇降③④の組合せ、⑤⑥の組合せ、と土器・墓制分布の拡大・収縮は相応せず、同じ気候変動のもとにある東北地方の墓制例数の増減は北海道のそれと連繋しない。A説はこれらを説明できない。

B説もA説では説明できない。北海道における鈴谷式の極少出土例、樺太・南千島における後北 C₂・D 式(鈴谷式並行期)の極少出土例、北日本における後北 C₂・D 式期の「続縄文文化の拡大」は急激な回復期④にあたるが、これら土器・墓制分布は、鈴谷式の南下、後北 C₂・D 式(古・中)の北上、後北 C₂・D 式期続縄文文化の南下であり、拡散方向・拡散量にばらつきがあり続く十和田式期には「オホーツク文化の拡大」と言えるほどで、遺跡・遺物の出土例が急増するものの、十和田式は急冷期⑤と急激な回復期⑥の両期に出土する。この状況は後述のC説により説明可能である。

A説が支持される背景には、気候変動の結果として生業変化・それに伴う人口増減を想定するからである。既述した「中川モデル」は、多様な自然環境とその変動に対する生業モデルと仮想実験であり、特に狩猟採集が環境変動に柔軟に応答する生業である

ことを示唆している。生業については次に言及するが、寒冷化・温暖化双方に生業の利点が生じており、旧石器時代→縄文時代を下回る縄文式期の気候変動においては「中川モデル」を支持する結果となっている。

のこる C 説は気候変動とほぼ関わらない「鉄器など物資獲得のため」である。この説は交易品の種類・量の評価によって否定肯定される。交易によって入手する物資は鉄製品・碧玉管玉・ガラス玉など希少性を有するもので、希少性は北日本との交易によってのみ入手できることに由来する。

鉄製品は石器の変化からみると、円形・刺突文土器群 I ~ III 期は鉄器が実用財となる時期、その前の後北 C₂・D 式期は鉄製品が象徴的財から実用財へ移り変わる過渡期である。そして、鉄器組成の変化は後北 B 式期が画期で、石器組成の変化は円形・刺突文土器群 I ~ III 期が画期である(表 II-1 参照)。これらの獲得は鉄製品に始まった訳ではなく石製象徴的財を求めたことに始まる。聖山 KII 群・後北 C₁ 式期は石製象徴的財と金属象徴的財を必要とした時期であり、後北 C₂・D 式期は石製象徴的財と金属製象徴的~実用財を必要とした時期であり、円形・刺突文土器群 I ~ III 期は石製象徴的財と金属製実用財を必要とした時期である。「縄文土器・墓制が北日本に分布する」は、単に鉄製品の需給で発生した現象ではなく、北海道側の受容変化:石製→金属製・象徴的財→象徴的~実用財→実用財と、北日本の石製・金属製品供給の変化の上に成立した現象である。

3 自然環境変動と生業

ヒトに内蔵されていた情報が再生されて遺物・遺構に具現する、その変化が文化変容である。その前段には、授け手・受け手(他者)を通じて、あるいは同一人(自身)の中でという社会的環境がますますあり、次いで人工物を具現させるための自然環境が必要となる。自然環境とは、人間が存在可能な時空間で、人間が先天的・後天的に獲得した手段を通じて精神的・肉体的糧を得るために消費する対象。社会的環境とは、信仰・生産・消費と分配(貯蔵)・階層など精神的・肉体的活動を行ううえで介在する関係である。

そして、地質相・植物相・動物相の一部である資源相に働きかける「採る・育てる・換える」が食料生産で、具体的には採集・狩猟・漁撈・農耕・交換などの行為である。資源は、環境条件により分布に種類・量の偏在があり、かつ季節的に増減がある。このことは、生業成果の変動が必然となるので交換も生業の重要な要素である。

I 章-2において縄文の「-縄文」や「-」を検討する際に「変則的縄文文化」・「逸脱的

表 II-1 石器・金属器の消長 鈴木 2003b 引用

| 時期(道央の土器型式で代表した) | 石槍 | 石鎌 | 鉄鎌 | 魚突き鉤 | ナ・石器・石器ブフ状 | 石斧 | 種器など | 楔形石器 | 刀子 | 錐・針 | 石斧 | 板状鍛斧 | 袋状鍛斧 | 鐵鍬 | 鍬先 | 大刀・横刀 | 搔子 | 紡錘車 | 器種不明 |
|------------------|----------------------|----|----|------|------------|----|------|------|----|-----|----|------|------|----|----|-------|----|-----|------|
| 縄文・前葉 | H37丘珠～H37栄町古 | ▲ | ▲ | | ▲ | ▲ | ▲ | ▲ | | | ▲ | | | | | | | | ● |
| 縄文・中葉 | H37栄町新～後北B式 | ▲ | ▲ | ● | ▲ | ▲ | ▲ | ▲ | ● | | ▲ | ● | | | | | | | ● |
| | 後北C ₁ 式 | ▲ | ▲ | ▲ | ▲ | ▲ | ▲ | ▲ | ▲ | ● | ▲ | ● | | | | | | | ● |
| | 後北C ₂ ・D式 | ▲ | ▲ | ▲ | ▲ | ▲ | ▲ | ▲ | ▲ | ● | ▲ | ● | | | | | | | ● |
| 縄文・後葉 | 円形刺突文土器群期 I ~ III | ● | | | | ▲ | ▲ | ▲ | ● | | | ● | ● | ● | ● | ● | ● | ● | ● |
| | 円形刺突文土器群期 IV ~ V | | ▲ | | | ▲ | ▲ | ▲ | ● | | | ● | ● | ● | ● | ● | ● | ● | ● |
| | 円形刺突文土器群期 VI ~ VII | | ● | | | ▲ | ▲ | ▲ | ● | | | ● | ● | ● | ● | ● | ● | ● | ● |
| | 円形刺突文土器群期 VIII ~ XI | | ● | | | ▲ | ▲ | ▲ | ● | | | ● | ● | ● | ● | ● | ● | ● | ● |
| 縄文・前期 | 8世紀代 | | ● | ▲ | ● | ● | ● | ● | ● | ● | ● | ● | ● | ● | ● | ● | ● | ● | ● |

●は鉄器、▲は石器。網掛けは存在が想われる事を示す。

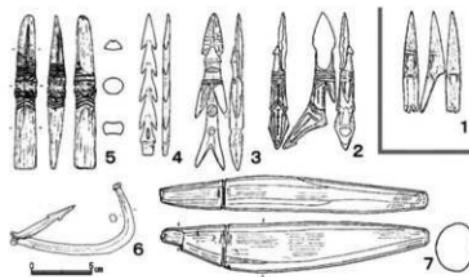


図 II-3 繩文文期の漁撈具

一索孔・有鎌の雄形鉛頭(図 II-3-4)、鮑起し?(図 II-3-5)、向合せ法の結合式釣針(図 II-3-6)、魚形石器(図 II-3-7)が消滅するものの、縄文時代晚期以来の開窓・雌型鉛頭(図 II-3-1)は用いられ続ける。いっぽう道東北では変化が起こらず、縄文時代晚期以来の開窓・雌型鉛頭(図 II-3-1)が用いられ続ける。

動物遺存体をみると、漁撈・狩猟・猪飼育は縄文時代晚期と同様の傾向を示すが、道東においては海獣が統縄文期初頭以降に多くなる。そして、魚介遺存体をみると、温暖期においても寒海性のサケ・マスはとり続けられるが、暖海性種は温暖期に限ってとされる(表 II-2)。植物の採集・栽培は従来の縄文系要素であり、栽培種が出現するのは掠文文化期に下ってからのことである(図 II-3)。

統縄文期初頭の道東における海獣獵への傾斜は新規性をおびるもの、従来の縄文系要素によってなされた。道東部の漁撈は「逸脱的縄文文化」の後継である。いっぽう、下添山式～南川IV群期(弥生中期中葉～末並行、図 II-1 の②～③の手前)の道南部・道央

表 II-2 暖海性種とサケマス類の共存例 高橋 1991 を引用加筆

| 遺跡名 | 時期 | 工具型式 図 II-1 参照 | 南洋水温 | | 沖縄 底水温 | | 生息 底水温 | | 沖縄周 底水温 | | 生存 底水温 | | 海上河 量過水温 | | 冬季排泄・千島の 底下 | | |
|-----|----------------------|-------------------|-------|-------|-----------|-------|-----------|-------|------------|------|-----------|------|-------------|----------|----------------|---|--|
| | | | 20～27 | 23～24 | 23～24 | 14～19 | 18～24 | 18～22 | 14～18 | 7～30 | 9～28 | 3～11 | チヌ・マス 類 | トロ セイ | アザ シ | | |
| 道東 | 大隅 | ハマグリ | + | | | | | | | | | | ○ | ● | | | |
| | 鹿嶼前集 | クネナシト カキ留 | + | ○ | | | + | + | ○ | | | | ○ | + | ○ | | |
| | 大隅C | | | | | | + | | | | | | ○ | ○ | + | + | |
| | 大隅B | | ● | | | | | | | | | | ○ | + | + | + | |
| | 佐渡モリ | (ホウジ) | + | + | + | | | | | | | | ○ | + | + | | |
| | 舟伏駒 | (ホウジ) | + | + | + | | | | | | | | ○ | + | + | | |
| | 日之御 | (ホウジ) | + | + | + | | | | | | | | ○ | ○ | ○ | ○ | |
| | 茂明 | (ホウジ) | + | + | + | | | | | | | | ○ | + | + | | |
| | 東山岸根(鹿屋) | (ホウジ) | + | | | | | | | | | | + | | | + | |
| | 足白内貝塚 | (ホウジ) | + | + | + | | | | | | | | ○ | + | | | |
| 道東北 | 有珠中野砂長 | (ホウジ) | + | + | + | | | | | | | | ○ | ○ | + | + | |
| | 東山貝塚 | (ホウジ) | + | + | + | | | | | | | | ○ | + | + | | |
| | 奈良原 | (ホウジ) | + | + | + | | | | | | | | ○ | + | + | + | |
| | 小糸貝塚B | (ホウジ) | + | + | + | | | | | | | | ○ | + | + | + | |
| | 伊内田別太 | (ホウジ) | + | | | | | | | | | | ○ | ● | | | |
| | フゴベ ¹ ・洞庭 | (ホウジ) | + | | | | | | | | | | | | | | |
| | (内島)サカツイN | (ホウジ) | + | | | | | | | | | | | | | | |
| | 新潟後集・柏文 | (ホウジ) | + | | | | | | | | | | | | | | |
| | 新潟 | 新潟 | + | + | + | | | | | | | | ○ | ○ | + | | |
| | 新潟 | 新潟 | + | + | + | | | | | | | | ○ | + | + | | |
| 道東 | 大字1 | 柏木 | + | + | + | | | | | | | | ○ | + | + | + | |
| | 夷津 | 夷津 | + | + | + | | | | | | | | ○ | + | + | | |
| | ミンク・ナガ2 | 夷津 | + | + | + | | | | | | | | ○ | + | + | | |
| | ミンク・ナガ3 | 夷津 | + | + | + | | | | | | | | ○ | + | + | | |
| | 二津浦 | 二津浦 | + | + | + | | | | | | | | ○ | + | ○ | | |
| 道東 | 下田ノ浜 | 下田ノ浜 | ● | | | | | | | | | | ○ | + | ○ | | |
| | 下田ノ浜 | 下田ノ浜 | ○ | | | | | | | | | | ○ | ○ | | | |

縄文文化」、「生業の特化」・「資源構造の拡張的開発」、中川モデルが視点となることを述べた。これらは食料生産・交換と密接に関わる。

食料生産:漁撈具をみると、道南・道央において南川IV群期以前と以後では大きな変化が認められ、聖山KII群・後北B式期に北海道型燕形鉛頭(図 II-3-2)、恵山式鉛頭(図 II-3-3)、

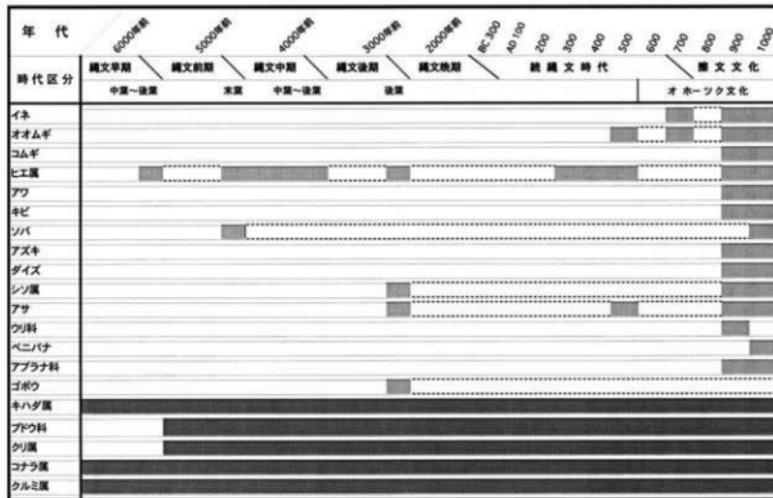


図 II-4 淀道選別資料にみる有用植物の消長 植坂 2013 引用加筆

部・道北部では本州以南の影響がみられるが、後北 B 式期(弥生後期前葉並行、図 II-1 の③の前半)以降にはなくなる。また、道南～道北の漁撈は鰯頭・鮑漁に新規性があるものの、この技術は水稻耕作の要素ではない。くわえて東北地方以南から陸獣・植物対象の生業技術は入っていない。

漁撈具・動植物遺存体からみると「資源構造の拡張的開発」ではなく「生業の特化」であり、「epi-」の基本要素であることから次が言える。道東部の生業は「逸脱的縄文文化」の生業特化を経ていることから、「統縄文逸脱継続型」生業と呼べる。道南～道北の生業は、特化を伴う統縄文の生業に至るもの、「変則的縄文文化」の生業に戻るので「統縄文変則回帰型」生業と呼べる。そして「統縄文逸脱継続型」生業と「統縄文変則回帰型」生業は急冷期・回復期・温暖期にあっても複相性を維持している。

交換：物資交換の形態は三つある。第一は「遭遇型交易 ≒ 沈黙交易」。これは接触を回避するための交換方法で、そのため交換の機会は不定期である。文化の共有ではなく、「もの」の交換に終始する表層的物資交換。第二は「域内交易」。これは“文化”的な基づいた交換で、「かかわり」と「もの」が強く結合する深層的物資交換である。この交換の基底には社会的距離が恒常に縮んだ関係=社会的距離を緊密にする必要のない関係(「ウチ」)があり、「かかわり」の結果として「もの」が動く。「域内交易」は儀礼的・贈与的交換が主目的である。自製・獲得容易な非現地性物資(域内交換財と呼ぶ)を求める。第三は「渡海交易」。これは“文化”が異なるあいだで行われる交換で、「かかわり」と「もの」に弱い結合(互いの背景・意図の秘匿も可能)がみられる中層の交換で、紛争・交換の断続も生じやすい。「もの」を恒常に動かすために「かかわり」が必要となる。この交換の基底には、物理的距離を社会的距離に置換し、社会的関係を緊密にして物

理的距離の短縮を代替する（「ソト」の「ウチ」化）があり、移住によって社会的関係を緊密にする「定住型交易」、一時的に滞留することによって社会的関係をある程度離てる「滞留型交易」がある。「渡海交易」は物質交換の交易が目的で、自製・獲得不可能な物資（広域交換財と呼ぶ）を求める。

この交易の維持には次の前提がある。生業維持の労働は二種類に大別され、ひとつは個人分散型（個人的技術の差で成果が変動する。成果は個人に還元）であり、狩猟と鉛による漁撈など仕留める方法の労働である。もうひとつは団体集約型（個人的技術差よりも技術の共有の規模で成果が変動する。成果は集団に帰属し集団内の個人に分配）であり、網による漁撈と採集と栽培がある。個人分散型は射撃性が高く、団体集約型は射撃性が低い。渡海交易の原資（広域交換財）を生む毛皮獲得獵は、「季節的広域移動：II章-4 参照」・少量獲捕・個人分散型・高射撃性という不安定要因を内包するので、集団の安定が前提となる生業で、原資獲得を下支えする生業（多量獲捕・「射撃性低」という性質で、域内交換財・自家消費財を生む）と表裏の関係にある。そして、地域・季節による生業成果の偏在が社会関係の一環である域内交易によって調節され、集団の安定が生じ、毛皮獵が維持され、渡海交易は継続された（鈴木 2007a・2009a・2009b・2011）。

渡海交易の変遷：北海道と東北地方における渡海交易は、東北地方に現れる北海道系土器・墓制と鉄関連遺跡の分布の状況より I ~ VII段階に変遷する。そのうち、続縄文期の交易は I ~ IV段階にあたる（鈴木 2003b・2007a）。

I段階（弥生後期前半以前）：後北B式と後北系土坑墓が道東・網走、道南に拡がるが、東北系土器がみられず、恵山式のなかに二枚橋～田舎館 2・3式の表出的・中間的属性の影響が確認できる（設楽 2003、高瀬 1998）。いっぽう、東北地方では、南川IV・後北B式とその表出的属性が転移した土器が津軽半島北半・陸奥湾周囲・下北半島・小川原湖周辺に極少数出土し（青森県埋蔵文化財調査センター木村 高氏のご教示による）、日本海側では宇津ノ台式が佐渡島・新潟県沿岸まで南西へ分布を拡げる（相沢 2002）。また、弥生時代後期前半の富山県高岡市下老子浜川遺跡からは帶縄文が付く天王山式が出土する。なお、北海道系墓制は認められない。

東北・北陸地方において極少数の北海道系土器が沿岸部に出土するが、北海道系墓制がないので北海道続縄文文化人は本格的に定住していない。日本海沿岸では後北A・恵山 ↔ 念仏間 ↔ 宇津ノ台 ↔ 小松式など、太平洋側では恵山 ↔ 田舎館 2・3 ↔ 龍門寺と各型式が連接して分布する。以上より、その交易は、原産地（=翡翠・碧玉製管玉などの採掘・加工）から日本海沿岸（島嶼部を含む）を滞留しながら中継ぎ式に運ばれる方法で、中継点は各型式分布の周縁域に散在すると考えられる。I段階は中継ぎ式の滞留型交易を行っている時期。

北海道からの移出財は石斧石材で（鈴木 2008）、道央日高の額平川流域に産する（合地ほか 2005）。この石材は弥生中期初頭の石川県小松市八日市地方遺跡が最西例で、弥生前～中期に青森県・秋田県北部に多く例がある（佐藤 2016、佐藤ほか 2018）。移入財（翡翠・幼猪・碧玉管玉・南海産貝装飾品）は象徴的財で縄文時代以来の種類である。

IIa段階（弥生後期後半）：天王山系土器が道央以西で認められ始め、福井県東部沿岸一関東北部まで分布を拡げる（相沢 2002）。そして、北海道系土器（聖山 KII群・後北C1式）と天王山系が混在して新潟県まで拡散するので、それぞれが直接に北陸弥生土器圏

(猫橋～月影式)と接触するようになり、滞留型交易から定住型交易への移行期となり中継方式はとられなくなったと推定される。ただし、この段階でも前段階の日本海側経路が踏襲されており、金属器・ガラス小玉は翡翠・碧玉管玉の流通経路に乗って移入されると考えられる。日本海側に偏り少数の北海道系土器が分布するものの、北海道系墓制がないので北海道縄文文化人の定住が本格化している可能性は低い。

北海道からの移出財は、東北では弥生後期末赤穴式期に農工具が鉄器化するので、石斧石材はまだその可能性がある。直接的な証拠はないものの、漁撈体系の変化(魚形石器の消滅・銛頭の変化)から陸獣・海獣毛皮が考えられる。北海道における移入財にはガラス小玉・金属器がある。ただし、鉄器の出土量は極めて少なく、石器組成に変化がないので鉄器は実用財と言い難い。移入財は実用財の機能を有する象徴的財(「第二の道具」)であり、移出財は象徴的財に変わる。この組合せは II b 段階へと引継がれる。

II b 段階(弥生後期末～古墳前期中葉)：東北地方では後北 C₂・D 式とその模倣が、日本海側は新潟県まで、新たに太平洋側に経路状分布を示して宮城県にも拡散する。出土が集中するのは馬淵川・新井田川下流、新井田川上流、零石川・中津川・北上川の合流点、江合川上流の大崎平野北部(図 II-5)。また、東北地方において II b 段階以降に方割礫・黒曜石製石器が少数出土し始める。それらは製作・使用する人々の移住を示すと考えられる。北海道では後北 C₂・D 式と後北系墓制が北海道全域にひろがり、極少量の赤穴式が道央以西に分布する。東北地方における北海道系墓制は極少数ではあるが、岩手県(4 遺跡)・秋田県(1 遺跡)にみられる。北海道と比較すると、東北は梢円形である(北海道は円形)、袋状土坑が長軸上である(北海道は長軸右)、袋状土坑の位置は様々(北海道は坑底と壁面の境がやや多い)、柱穴様土坑は「長軸両端 2 本」(北海道も同じ程度ある)である。

東北地方において、北海道系土器が経路状に分布し、北海道系墓制(内在的属性においては若干の変異があるが、表出的属性・中間的属性は共通する)が出現するので、少数の北海道縄文人が物資の結節点(北海道系土器の集中点:約 50 km 間隔)を結んだ経路に移住し、恒常的定住型交換を開始した。この段階は直結的関係がより強化された。鉄器は実用財の機能が増し、当該期以降、銅・鉄器・金属製品獲得の交易が他の生業活動の基盤となる。II b 段階は定住型交易の開始期。

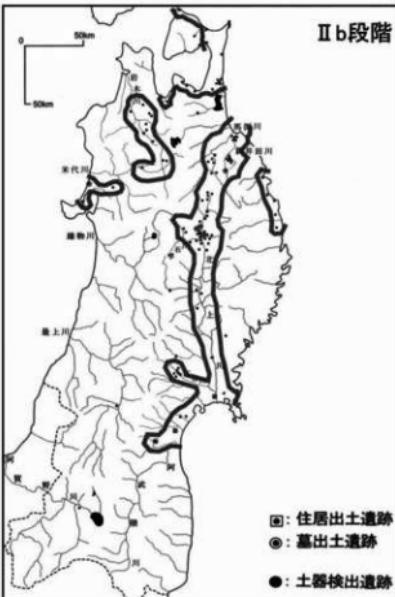


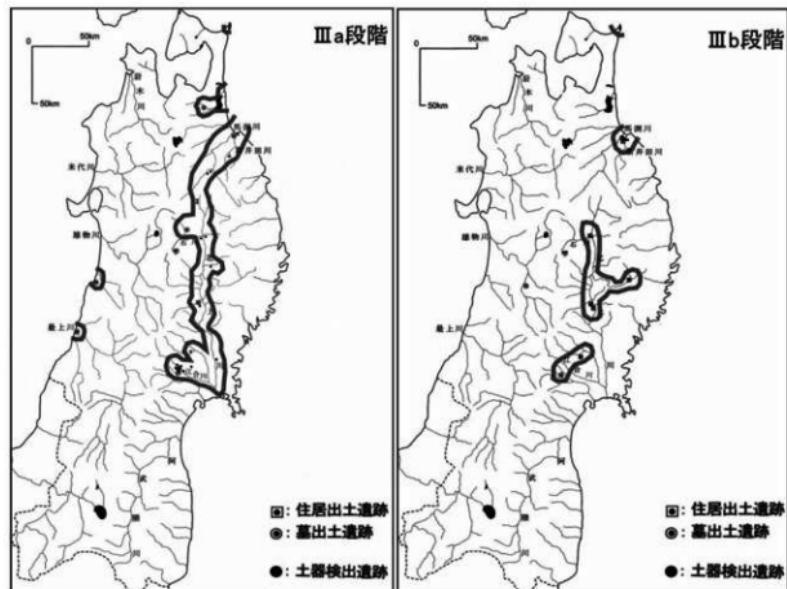
図 II-5 後北 C₂・D 式の分布 鈴木 2003b 引用加筆

北海道からの移出財は前代から引き続き陸獣毛皮・海獣毛皮が考えられる。移入財はガラス小玉(全道に分布し、当該期に急増)と刀子・鉈・板状鉄斧(出土例は増えて鉄器・石器組成に変化が見られ、実用財としての用途が増す)がある。

III段階(古墳前期後葉～飛鳥時代前半): 東北地方では円形・刺突文土器が日本海側は山形県まで、太平洋側は経路状分布を示し宮城県まで分布する。分布はIIIa段階ではIIb段階に較べ僅かに北退し、IIIb段階にはそれが顕著になる。出土が集中するのは馬淵川・新井田川下流、馬淵川・安比川の合流点、零石川・中津川・北上川の合流点、胆沢川・北上川の合流点、江合川上流の大崎平野北部で前段階よりやや分散する(図II-6・7)。

東北地方の北海道系墓制は極少数青森県(2遺跡)・岩手県(2遺跡)・秋田県(1遺跡)・宮城県(1遺跡)にみられる。円形・刺突文土器群I～V期において北海道墓制と比較すると、東北は楕円形が多い(北海道は円形)、袋状土坑が長軸右である(北海道も同じ)、袋状土坑の位置は壁面が多い(北海道も同じ)、柱穴様土坑「長軸両端2本」である(北海道は事例を欠く)。円形・刺突文土器群VI～IX期の北海道墓制と比較すると、東北は隅丸方形が多い(北海道は円形と隅丸方形ほぼ同数)、袋状土坑が長軸右(北海道は長軸上)、袋状土坑の位置は壁面が多い(北海道も同じ)、「四隅突出」墓坑がある(北海道も同じ)、長方形木棺に袋状土坑が備わる(北海道にない)。

東北地方では北海道系土器の経路状分布に短縮・寸断があり、北海道系墓制には在地墓制との融合がある。円形・刺突文土器群I～Vの分布(約50km間隔)は維持される。



図II-6 I～V期円形・刺突文土器の分布

鈴木 2003引用加筆

図II-7 VI～IX期円形・刺突文土器の分布

鈴木 2003引用加筆

円形・刺突文土器群VI～VII期は変異・融合(木棺+袋状土坑)があり土器分布約50km間隔は維持されない。北海道内では東北系土器の減少がある。北海道続縄文文化人と東北古墳文化人の混交が進み、関係は恒常的になり北海道墓制は変容し始める。

北海道では、IIIa段階は定住型交易の安定により鉄器の恒常的確保が可能となり、IIIb段階には鉄器の潤沢な供給により石器が殆んど廃用され、生活用具の鉄器化・準構造船の改良が進んだ。「かかわり」重視の方法(社会的距離を縮める方法)が「もの」の取引に偏った交換関係に変容し始める。III段階は定住型交易の完成期。

北海道からの移出財は前代から引き続き陸獣毛皮・海獣毛皮が考えられる。移入財はガラス小玉(量が多いのは円形・刺突文土器群III期まで)と鉄器(円形・刺突文土器群I期に石器は切る機能が喪失する(高橋2005)ので、鉄器は実用財となり、円形・刺突文土器群VI～VII期に出土例が増えるので安定的供給があった)がある。小樽市蘭島D遺跡の円形・刺突文土器群VII期の土坑墓からはコメが出土する。

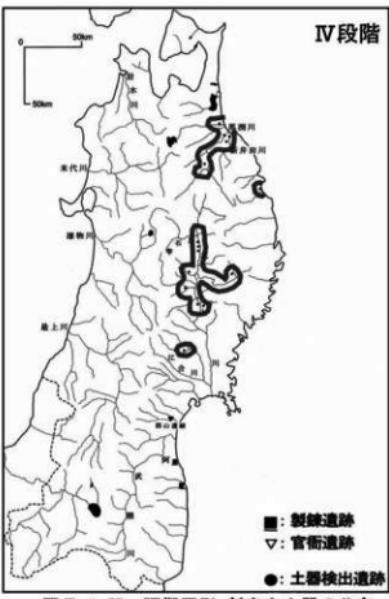
IV段階(飛鳥時代後半)：東北地方では北海道系土器の分布はさらに縮小する。出土が集中するのは馬淵川・新井田川下流、零石川・中津川・北上川の合流点、胆沢川・北上川の合流点、前段階よりも分散する(図II-8)。

東北地方では、北海道系土器の経路状分布・北海道系墓制が消失しつつある。前掲の『日本書紀』齊明条・持統条に拠れば倭王権と海路を通じて接し、貢納的交易を始めた。北海道続縄文人は蝦夷との社会的距離を縮める必要がなくなり、東北在住のかれらは交易仲介者としての役割を失い在地人化した。定期的に海路を通じて滞留して交易する。IV段階は定住型交易から滞留型交易への移行期。

北海道からの移出品は齊明4年是歳条には生熊と熊毛皮があり、律令期の史料から海獣毛皮も含まれる可能性がある。遺物に現れた移入品は、鉄鑓・刀子・鉄斧や鎗・鉄鎌。象徴的財の大刀・横刀・攝子・ガラス玉がある。布類は鉄製品を梱包した痕跡として遺存する。史料に載る移入品は、持統10年3月条では「錦袍袴」「紺綿縑」「鉄斧」、齊明6年3月条では「綵帛」「兵鉄(武器または素材)」がある(鈴木2003)。

4 続縄文の行動様式と空間規模

生業領域：「季節的狭域移動」とは、サケ・マス漁のようにヒトの生命維持ために行う秋季～初冬季の季節的漁撈、鮭脚海獣獵は冬季の季節的漁撈、クジラ類海獣獵夏季の季節的漁撈、暖流系大型回遊魚漁は威信獲得のために行う



図II-8 X～XI期円形・刺突文土器の分布

鈴木2003引用加筆

春夏季の季節的漁撈、それらを行うための移動。「季節的広域移動」とは、罫獵など交易の対価獲得獵のために行う冬季の季節的獵を行うための移動、狭域の広域交換財(琥珀・黒曜石・貝殻)と広域の域内交換財(動植物食料)を交換するための移動。「季節的超広域移動」とは、漁撈・狩猟を行う範囲を大きく超えるもので、渡海交易にあたり、広域交換財(幼猪・碧玉管玉・ガラス小玉・金属製品)を交換するための移動(鈴木 2015)。

“文化”のひろがり：文化を階層的に区分し、それに空間という属性を付したのは英國プロセス考古学者の David.Clarke が端緒である(Clarke.D1968)。少々古典的となるが次のように提唱した。文化(一定の地理的範囲内において、恒常に反復される特定的・包括的な人工物型式の複相的な組成群)の推定半径 32~322 km、文化群の推定半径 322~1208 km、技術複合体(文化群の集合で、環境・経済・技術における共通した要素が広く拡散しながら、相互に関連するものとして共有される)の推定半径 1208~4830 km。

遺物遺構の変容は、統繩文前～中葉では道南・道央・道東鉄道・道東網走・道北の各地域=面積からの換算半径 59~81 km = “文化”的小規模で起こる。それが統繩文期後葉では、北海道全域=面積からの換算半径 158 km = “文化”の中規模、北海道～新潟県西部県境(北海道全域 600 km + 北海道白神岬～新潟県西部県境海岸まで直線で 538 km)の範囲=この範囲は円に換算することが妥当ではないが、“技術複合体”的直径相当を往復しているとみなせる= “文化群”的最大値～ “技術複合体”的最少値。統繩文文化における属性変容の規模は、時期によって各地域→北海道全域→北海道～新潟県西部県境に当たる空間的広がりがある。統繩文文化は “文化”的小規模～ “技術複合体”的最少値を持つので、最上位の文化区分(繩文・弥生文化と同位)に匹敵する必要条件を持っている。

そして、「道央の優位性」は「資源構造の拡張的開発」によって生じたのではなく地勢の利用によって生じた。道央低地帯は日本海と太平洋に接し、それらは標高 25m 前後の低平な台地(台地最狭部は 0.9km しかない)により分けられ、そこには長大な河川が流れ、内水路の選択肢が多い。外洋航海用の準構造船はその大半を通行可能であることがアイヌ文化期の事例から推定できる。

D.Clarke の考古学的文化区分には自然遺物に関わる内容が含まれていないため、それを生業の領域に直接当てはめることはできない。そこで生業の領域の内容と D.Clarke の区分に一致点が認められるかみてみる。“文化”と“季節的狭域移動”・“季節的広域移動”領域の内容の一一致点は、統繩文期中葉の道南～道央部における複数漁撈具の変化であろう。“文化群”～“技術複合体”と“季節的超広域移動”領域の内容の一一致点は、異なる自然環境にまたがる広域交換の仕組みと準構造船を用いる水上運輸の体系がそれに対応すると考えられる。以上の根拠と大きさと合わせて、「季節的狭域移動」領域は “文化”的最小値～それ以下、「季節的広域移動」領域は “文化”的小規模、「季節的超広域移動」領域は “文化群”的最大値～“技術複合体”的

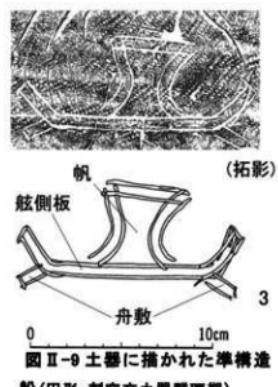


図 II-9 土器に描かれた準構造船(円形・刺突文土器群Ⅲ期)

鈴木 2013 引用加筆

最小値にはあたるとみなしてよいだろう。

III 縄文文化とは

1 総括

縄文期・統縄文期においては冷温帯林/亜寒帶林という自然環境が持続する。生業においては要素導入の遅滞・欠落があり変則的・逸脱的縄文といえる。統縄文期のそれは、変則的・逸脱的縄文生業の継続/非水稻耕作要素の威信的漁撈の盛行・衰退であり、縄文晩期後葉以来の量的資源拡張は「資源構造の拡張的開発」と言うより「生業の特化」が実態に相応する。道南・道央は「変則回帰型統縄文」、道東は「逸脱継続型統縄文」といえた。

北海道の統縄文は極僅かに非水稻耕作に関わる弥生系要素はあるが、「変則的縄文文化」から「統縄文」への移行は縄文的状況に後戻りする、「逸脱的縄文文化」から「統縄文」への移行は縄文的状況を維持する、であり、いづれも弥生化(水稻耕作化)とかかわらない。統縄文はほとんど「縄文文化“技術複合体”」の状況といえるものの、「特化した経済」であること、“技術複合体”にあたる必要条件を持つことから、縄文・弥生と同位ではあるが別系統の文化区分である。そして、弥生化と関わらない統縄文は縄文→弥生への移行段階ではないので段階区分としての統縄文は成立しない。

2 後継研究における意義

擦文化は道南・道央において蝦夷文化と変則回帰型統縄文文化との“文化”混合で生まれ、統いて“文化”融合が起こる。そして、逸脱継続型統縄文文化と道南→道央擦文化の融合により道東擦文化が生じる。オホーツク文化は道東擦文化



図III-10 文化的系統

により変容し、アイヌ文化は道南→道央擦文化と道東擦文化・トビニタイ文化の“文化”融合によって成立した。これらは分枝・融合を繰り返す網状進化的変容をする。

引用文献

- 相沢清利 2002「東北地方における弥生後期の土器様相」『古代文化』54-10 古代学協会
青森県 2005『青森県史 資料編考古』3 青森県
石川日出志 2006「下老子塙川遺跡出土の天王山遺跡がもつ意義」『下老子塙川遺跡発掘調査報告』
富山県文化振興財団
伊東信雄 1950「東北地方の弥生式文化」『文化』2-4 東北大文学会
伊東信雄 1955「東北地方の弥生式文化」『日本考古学講座』4 河出書房
大沼忠春 1977「北海道考古学講座 6」『北海道史研究』12 北海道史研究会
大沼忠春 1999「北海道の地域文化の成立」『日本考古学協会 1999 年度大会-研究発表要旨』
日本考古学協会
川幡穂高 2016「日本人と日本社会が経験した気候・環境」『科学』87-2 岩波書店
川幡穂高 2018「日本人と日本社会が経験した気候変動」『シンポジウム 北海道の縄文人の登場』
北海道考古学会

- 木村 高 2011「東北地方の続縄文文化」『日本の考古学講座 7 古墳時代（上）』青木書店
- 熊本後朗 2007「道東と道央部以南との比較」『科学研究費補助金基盤研究(B)(2)北海道における古代から近世の遺跡の暦年代』研究代表者 白井勲
- 合地信夫ほか 2005「縄文～続縄文時代における北海道中央部から東北地方への緑色・青色片岩製磨製石斧の流通」『日本考古学協会第72回総会 研究発表要旨』日本考古学協会
- 佐藤由紀男 2016「磨製石斧の流通からみた紀元前千年期の北海道・東北部」『北方島文化研究』12 北方島文化研究会
- 佐藤由紀男、宮田明 2018「石川県小松市八日市地方遺跡出土の層灰岩性片刃石斧と三面石斧をめぐって」『考古学研究』259 考古学研究会
- 佐原 真 1984「山内清男論」『縄文文化の研究』10 雄山閣
- 鈴木 信 2003「続縄文～擦文化期の渡海交易の品目について」『北海道考古学』39 北海道考古学会
- 鈴木 信 2007a「アイヌ文化の成立過程」『古代蝦夷からアイヌへ』吉川弘文館
- 鈴木 信 2007b「仔熊飼育型熊送りの成立とその背景」『考古学に学ぶ(III)』同志社大学考古学研究室
- 鈴木 信 2008「続縄文文化の鉄器・石器・渡海交易の関係について」『シンポジウム 続縄文文化とは何か』北海道考古学会
- 鈴木 信 2009a「続縄文文化と弥生文化」『弥生時代の考古学』1 同成社
- 鈴木 信 2009b「続縄文文化における物質文化転移の構造」『国立歴史民俗博物館研究報告』185 国立歴史民俗博物館
- 鈴木 信 2011「擦文化と交易」『古代中世の蝦夷世界』高志書院
- 鈴木 信 2013「北海道における事例」『舟と水上交通』石川県埋蔵文化財センター
- 鈴木 信 2015「続縄文文化における生業と行動様式」『森浩一先生に学ぶ』同志社大学考古学研究室
- 鈴木三男 2016『クリと縄文人』同成社
- 高瀬克範 2010「続縄文文化と縄文文化」『縄文時代の考古学』1 同成社
- 高瀬克範 2014「続縄文文化の資源・土地利用」『国立歴史民俗博物館研究報告』185 国立歴史民俗博物館
- 高橋 哲 2005「続縄文文化後半期の石器研究」『北海道考古学』41 北海道考古学会
- 高橋 理 1991「続縄文時代の貝塚」『考古学ジャーナル』336 ニューサイエンス社
- 椿坂恭代 2013「フローテーション作業を通してわかつてきしたこと」『先史時代の植物利用戦略』北海道考古学会
- 富山県文化振興財団 2006『下老子塙川遺跡発掘調査報告』同財団
- 中川 級 2017『人類と気候の10万年史』講談社
- 藤本 強 1988『もう二つの日本文化』東京大学出版会
- 水野清一、小林行雄 1959「続縄文式文化」『図解 考古学辞典』東京創元社
- 山内清男 1936「考古学の正道」『ミネルヴァ』1-6 ミネルヴァ書房
- 山内清男ほか 1936「北海道・千島・樺太の古代文化を検討する」『ミネルヴァ』1-7 ミネルヴァ書房
- 山内清男 1937「日本に於ける農業の起源」『歴史公論』6-1 雄山閣
- 山内清男 1969「縄文文化の社会」『日本と世界の歴史』1 學習研究社
- 山中二男 1979「日本の森林帶」『日本の森林植生』築地書館
- 若林邦彦 2018「近畿地方弥生時代諸土器様式の暦年代」『実証の考古学』同志社大学考古学研究室
- Clarke, David 1978 Analytical Archaeology second edition. London: Methuen

縦縄文文化要素の南下と古墳文化要素の北上

木村 高（青森県埋蔵文化財調査センター）

I 北東北の文化

1 「縦縄文」とは

「縦縄文」とは、山内清男(1902-1970)によってつくられた概念である。読んで字の如く、「縦文」が「縦」く、あるいは「縄文」の「縦」き、を意味する用語である。「縦縄文」の3文字が単独で用いられることはあまり無く、「縦縄文土器」、「縦縄文文化」、「縦縄文時代」のように、「土器」・「文化」・「時代」の2文字を加えて用いられる場合がほとんどである。

山内は昭和14年(1939)に、「北海道では縦紋式以後にも縦紋の多い土器の型式が続いている。この式を近年私は縦縄紋式と云って居り、若干の型式に細分し得る…(中略)…その古いものは…(中略)…近縁のものは陸奥、(本文中に記した田舎館村の土器等)羽後方面にまで見られ、中央部日本の弥生式と並行…(中略)…新しい方の区分は近年江別式と云はれ」と述べている。

また、山内は逝去の前年(昭和44年(1969))に、「内地が弥生文化に変化するころになると、全道は、わたくしが「縦縄文式文化」とよんだ(昭和12年)、一連の文化におおわれるようになる…(中略)…内地は稻がつくられ農業が一般化しているのに、全道ではその痕跡がなく、高度の漁労狩猟民としての生活がみられる…(中略)…東北北部はこのような場合、文化の北上、南下の接点となっていて…(中略)…「北奥」地方は依然として縦縄文式的であり、より北海道的と考えざるをえない。…(中略)…「縦縄文式期」は二期に分かれ、第一期は内地の弥生式と並行し、第二期は古墳時代に相当する。」と述べている。

2 「縦縄文」の重要なキーワード

「縦紋式以後にも縦紋の多い土器の型式が続いている。この式を近年私は縦縄紋式と云って居り…」(1939)という記述で明らかのように、元来「縦縄文」は、「縦文の多い土器の型式」に対する概念であった。昭和44年(1969)の記述には、「わたくしが「縦縄文式文化」とよんだ(昭和12年)」という一文があることから、晩年は「縦縄文」を「文化」として捉えていたようである。(昭和12年の論文に「縦縄文式文化」の記載は見いだされない。)

結局、山内自身は、「縦縄文」に「土器」・「文化」・「時代」の2文字を絡めた総合的な定義づけは行わなかつたが、以上の記述をつなぎ合わせると、以下のようにまとめることができる。

本州では「稻がつくられ農業が一般化しているのに」、「北海道」では「縦紋の多い土器」(「近縁のものは陸奥、羽後方面にもあり」)を「縦」けて使用し、「高度の漁労狩猟民としての生活」を行っている。この文化は「縦縄文式文化」と言われ、その期間は「弥生」時代(「第一期」)から「古墳時代」(「第二期」)に並行する。「東北北部は」、「縦縄文式的であり、より北海道的」である。

※「」内は山内の記述の引用。

表1 山内清男による「続縄文」

| 発表年 | 記述・発言の内容 | 文献 |
|-----------------|--|----|
| 1933 (昭和8年) | 「東北では亀ヶ岡式土器の後に、その伝統を持った、縄紋の多い土器型式が続いている。陸奥では田舎館村の土器の様な仲間がこれである。北海道にもこの仲間と似寄つた型式がある。室蘭市本輪西貝塚貝層上部の土器はこの式である。」 | 1 |
| 1936 (昭和11年) | 「日本縄文式には石器が一般的であって、各地方、各時期を通じて見られる。又弥生式に於いても同様であり、北海道に於ける続縄紋式又は以後にも石器がある。」 | 2 |
| 1936 (昭和11年) | 「北海道の縄紋式以後のクロノロダイを樹立することが必要…(中略)…縄紋式の後にも、縄紋を持った土器型式が相当続いている。そしてその縄紋は…(中略)…主に縦に走る特殊なもの…(中略)…二つ以上の細別を認め得る…(中略)…私は仮にこの仲間に続縄紋式と云はうかと思って居ます。東北にも同じ階段のものがあります。」〔座談会での発言〕 | 3 |
| 1939 (昭和14年) | 「44 北海道では縄文式以後にも縄文の多い土器の型式が続いている。この式を近年私は続縄紋式と云つて居り。若干の型式に細分し得る様である。その古いものは本輪西貝塚の土器の如きものであつて、近頃のものは陸奥。(本文中に記した田舎館村の土器等)羽後方面にまで見られ、中央部日本の弥生式と並行すべきものである。新しい方の区分は近年江別式と云はれ、…(中略)…この式に近似する土器は陸奥にもあるらしく、これが果たして中央日本の弥生式に並行するか、古墳時代に並行するか興味深い」 | 4 |
| 1964 (昭和39年) | 「縄文文化は一応各地一樣に大差なく終る…(中略)…内地では後に弥生式、古墳時代、歴史時代に通ずる日本文化圓…(中略)…北海道中心の地方は…(中略)…続縄文、擦文土器、オホーツク式土器の文化等が続き、…(中略)…この北方文化は…(中略)…狩猟民の文化であり、また縄文式からの伝統がないとはいえない」 | 5 |
| 1964 (昭和39年) | 「北海道には…(中略)…次に続縄文式に移行…(中略)…貫して特有な縄文が続いている。条の走行が斜行せず、古い方の式では上下に走り、新しい方の式では任意の方向に走る…(中略)…生活状態は、縄文式と同様、狩猟採集…(中略)…米は田舎館で発見されており、その土器には弥生式からの影響もあるが、なお続縄文と見るべき部分を多分に持っている。青森県ばかりでなく秋田県や岩手県にも続縄文が生で、…(中略)…東北北部地方は、北海道と同様続縄文式が主体であつて、それに弥生式または弥生式的な文物を多少取扱したもの…(中略)…条が縦に走る縄文は広く東北各地に点々として分布している。…(中略)…新潟県、富山県、石川県の弥生式のある種のものに併せて同様の縦の縄文が少数伴出し、全く異物の如き感を与えてている。これらは北方系の特徴」 | 6 |
| 1964 (昭和39年) | 「擦文土器と続縄文土器との間には他にも若干の型式があるものと思われる。口縫部に外からの刺突文の列を有する仲間もそれで、私はかつて本輪西貝塚の表土を見たが、これは伊東氏の「柳太土器系列に於ける『十和田式』」に見られ、相当すると思われる。続縄文と擦文の間には間隙があるといつてもよいし、これらを類擦文と考えてもよいであろう。」 | 7 |
| 1969 (昭和44年) | 「内地が弥生文化に変化するころになると、全道は、わたくしが「続縄文式文化」とよんだ(昭和12年)、一連の文化におおわれるようになる。土器その他の文物は、ほとんど縄文式の継続発達したもので、とくに貝塚がめだち、…(中略)…漁労関係の遺物がふえる。内地は稻がつくられ農業が一般化しているのに、全道ではその痕跡がなく、高度の漁労狩猟民としての生活…(中略)…東北北部は…(中略)…文化の北上、南下の接点…(中略)…「北奥」地方は依然として続縄文式的であり、より北海道的と考えるをえない…(中略)…「続縄文式期」は二期に分かれ、第一期は内地の弥生式と差別し、第二期は古墳時代に相当…(中略)…第二期は二、三の段階に分かれて、江別式土器が古く、つぎに北大式…(中略)…江別式土器は…(中略)…青森県、岩手県北東に発見される。それより南の岩手南部、宮城、山形などには破壊となって古墳時代の土師器とともに出土…(中略)…まことに「続縄文式」第一期の北海道的特徴を備えたものが、一部東北、北陸の弥生式にはいりこんだと述べたが、こんどは、第二期江別式では、東北北部を占居して、その南では古墳時代の土師器の古い部分(筆者が塩釜港で採集したものを標式とする)とふれあい、その状態が古墳時代中期以後までづく」 | 8 |
| 1971 (昭和46年) | 「やはりそれは内地から発生したもので北海道の渡島半島と、砂沢あたりで発生したものではないでしょうか。」【1969年のインタビュー発言】 「山内の「それ」は、インタビュアの平山が言った「惠山式などにみられる続縄文」を指しているものと思われる。 | 9 |

【文献1】山内清男 1933「日本遠古文化 第一四、縄文式以後(完)ー」『ドルメン』第2巻第2号・図書院。【文献2】山内清男 1936「考古学の正道 一高田博士に呈す」『ミネルヴァ』第1年第6号・翰林書房(P39-P25) 上段10行。【文献3】馬場修・江上波夫・藤原守一・伊東信雄・喜田貞吉・三上主男・山内清男・八幡一郎・甲野勇 1936「北海道・千島・樺太の古代文化を検討する」『ミネルヴァ』第1年第7号(9月号)・翰林書房(P33-P297) 下段9行。【文献4】山内清男 1939「日本遠古之文化」補註付・新版『先史考證』(P47-P48行)。【文献5】山内清男 1964「諺言」「日本原始美術 縄文式土器」講談社甲子野・江坂輝綱(著の譜)。【文献6】山内清男 1964「日本先史時代概説」『日本原始美術 1 縄文式土器』講談社(P147-[注1])。【文献7】山内清男 1969「縄文時代研究の現段階」『日本と世界の歴史』第1巻 古代〈日本〉先史・5世紀 学習研究社(P96-97)。【文献8】山内清男 1969「縄文時代研究の現段階」『日本と世界の歴史』第3巻 北奥古代文化研究会 中村五郎編 1971「山内清男先生と語る」『北奥古代文化』第3号・北奥古代文化研究会

※ 現在、「江別式」は「後北式」と呼称されることが多い。「後北式」は、「後期北海道式薄手繩文土器」の略称で、河野広道によって昭和8年(1933)に設定された(河野広道 1933「北海道式薄手繩紋土器群」『北海道原始文化聚英』犀川会)。河野はこの後北式を、昭和8年の段階では「A型」・「B型」・「C型」・「D型」の4型式に分けていたが、昭和34年に「C型」を「C1式」と「C2式」に細分した(河野広道 1959「北海道の土器」『郷土の科学』23 北海道地学教育連絡会)。その後、名取武光らによる北海道余市町フゴッペ洞窟の調査により、C2式とD式は同時期のものであると認識され(名取武光ほか 1970『フゴッペ洞窟』フゴッペ洞窟調査団)、現在ではC2式とD式をまとめて「後北C2・D式」と呼称するようになった。

3 「統繩文文化」とは

「統繩文」については、山内の昭和14年(1939)の記述は頻繁に引用される一方で、その30年後に提出された昭和44年(1969)の記述は引用されることが極めて少ない。また、山内は、「統繩文」に「土器」・「文化」・「時代」の2文字を絡めた総合的な定義づけを行わなかった。この影響であろうか、「統繩文文化」の捉え方、定義づけには研究者間で微妙な相違が生じている。一般的には、弥生～古墳時代並行期の北海道に展開した、縄文時代の生活様式を継承し、稲作を行わなかった文化、と概ね理解されているが、この理解は、山内の存命中の昭和34年(1959)に佐原眞が述べた内容を基盤にしているようである。

佐原の記述は、「稲作農業を基盤とする弥生式文化が日本の大部分にゆきわたり、そこでは縄文式文化の伝統が漸次消していったときに、北海道と奥羽北部地方では、自然環境が稲作の普及をはばんだために、もっぱら狩猟漁撈の生活に依存し、縄文式土器の伝統を強くこした土器を用い、石器・骨器を基本的な利器とした文化が、擦文土器文化、オホーツク式土器文化のはじまる時期まで存続した。山内清男はこの文化の土器を統繩文式土器と名づけ…」(佐原眞1959「統繩文式文化」『図解 日本考古学辞典』東京創元社)という内容である。

4 弥生～古墳時代の北東北^③の文化様相

※秋田県秋田市と岩手県宮古市を結ぶライン以北を「北東北」とする。

青森県の砂沢遺跡(弥生時代前期後葉)と垂柳遺跡(弥生時代中期中葉)に検出された「弥生水田」は、弥生文化の「一要素」が本州北端にまで達した事実をよく示しているが、これらの水田跡は北東北の限られた範囲に「点」として確認されたまでであり、稲作文化が「面」として広がっていたことを裏付けるものではない。また、砂沢遺跡と垂柳遺跡の稲作民は縄文文化の要素である土偶を用い、土器にはクマ崇拝を想わせる獸状突起を付け、石器の組成も縄文時代をほぼ踏襲している。つまり、弥生時代の北東北は、「弥生文化」の“要素”である「稲作技術」を部分的に導入し、コメの生産を一時的に行なったが、金属器の積極的な導入や階級社会を発展させるなどの状況にはならなかった。つまり、西日本のような弥生文化が進展した地域ではなかった。

弥生時代中期後葉以降になると、稲作関連資料は一斉に消え、弥生土器に一般的な壺や高杯等の器種はほぼ消滅、単純な器形の甕(深鉢)が主体となり、東日本各地の文様が不規則に混じり合うようになる。そして古墳時代前期に至っては、後北C2・D式を伴う土坑墓が広く分布するようになり、「統繩文文化」の“要素”を濃くしていく。

5 北東北は「ボカシ」の地帯

藤本強（1982・1988・1994）は弥生時代以後の日本列島の文化を「北の文化」・「中の文化」・「南の文化」の3つに分け、「北の文化」の中心は北海道、「中の文化」は本州・四国・九州の文化、「南の文化」の中心は沖縄県とした。そして、これら3つの文化の中間にある2つの地域、即ち、東北地方北部から渡島半島にかけての地域と九州地方南部から薩南諸島にかけての地域を「ボカシ」の地帯」と呼んだ（藤本1988）。

※2009年の著作では「ボカシの地域」と表現している。

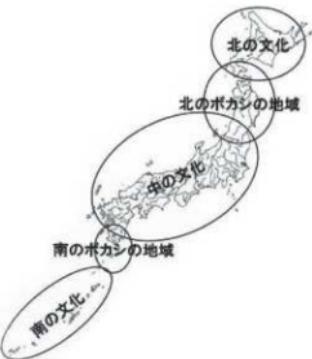


図1 弥生時代以降の日本列島の文化

（藤本強 2009『日本列島の三つの文化 北の文化・中の文化・南の文化』
市民の考古学-7 同成社より）

6 弥生～古墳時代の北東北の文化

藤本の言う「ボカシ」の地帯ないし「ボカシの地域」という表現は、きわめて簡潔明瞭で、北東北の文化様相を感覚的に理解する上ではたいへん優れたものである。しかしこの用語は、「文化圏」として括り難い空間を分かりやすく位置づけるためにつくられていることから、状況の説明には適しているが、状況を議論する際、例えば北海道の縄繩文文化と比較するなどの際には均衡がとれず、使いづらい用語もある。

青い文化圏と黄色い文化圏の中間地帯には、緑色の文化圏が形成されると仮定すれば、「ボカシの地域」は青（北の文化）と黄色（中の文化）の中間に位置する緑色の文化圏と言うことができる。即ち、「ボカシの地域」は青と黄色の様々な文化要素がモザイク状に組み合わされている地域（両文化がもつ様々な文化要素を混淆させた地域）であって、（セスナで航空飛行するかのように）それぞれの文化要素を近距離（ミクロ）で俯瞰すれば、青い文化要素と黄色い文化要素がモザイク状に組み合わされている状況が見えるが、（人工衛星の画像のような）超遠距離でマクロに見れば、「ボカシの地域」は緑色に見えることとなる。

この緑色には地域ごと、時期ごとに濃淡があって、その濃淡は青と黄色の文化要素の強弱によって常に変動する。このように捉えることによって、北東北という地域の様相も「文化」として把握することが可能となる。

この理解の下で、弥生時代から古墳時代の北東北の様相を俯瞰してみると、弥生時代前期から中期中葉の様相は、それまでの「縄文文化」に「弥生文化」と「北海道縄繩文文化」のいくつかの“要素”が加わった『北東北弥生文化』、弥生時代中期後葉から古墳時代の様相は、北東北弥生文化が北海道縄繩文文化の“要素”に包み込まれた『北東北縄繩文文化』と把握することができる。つまり、弥生時代中期中葉から後葉への過渡期に、北東北の文化は弥生文化的な状況から縄繩文的な状況に変遷したと考えられる。中の文化要素を用いて構築された時代区分は、圏外の文化変遷と整合しないのは当然のことである。

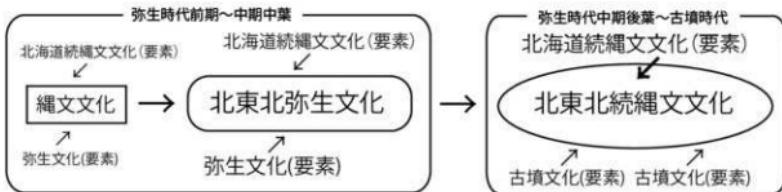


図2 弥生～古墳時代の北東北の文化変遷

7 北東北で起きていたアカルチュレーション

アカルチュレーションとは、異なる文化を持つ集団が直接的に接触し続けることで、一方のみ、もしくは両集団の文化が変動する現象である。主に文化人類学や社会人類学で用いられる用語で、「文化触変」、「文化変容」、「文化の接触変化」などのように訳されている。

弥生時代から古墳時代にかけての北東北は、北海道縄繩文文化との長期的な接触によって、アカルチュレーションを常に起こしていた地域であると考えられる。

II 縄繩文文化要素の南下

1 北東北縄繩文文化の「要素」（例：古墳時代前期）

【遺構】「袋状ピット」と「柱穴状ピット」を伴う土坑墓

袋状ピットは土坑墓の底面～壁面の境を横方向に抉った副葬品を納めるための施設、

柱穴状ピットは上屋の痕跡（支柱痕跡）とおおむね理解されている。

【遺物】縄繩文土器（後北C2・D式）、石器（方割石・黒曜石製搔器）、（琥珀玉）

方割石は葬送儀礼に用いた説と、皮革の柔軟化に用いた説がある。

黒曜石製搔器は、皮革加工工具との見方が一般的。

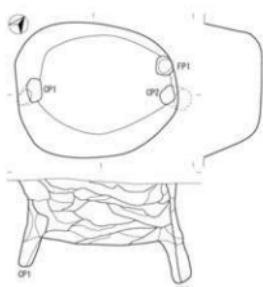


図3 縄繩文文化の土坑墓の平面形と断面形

(1/50 青森県七戸町猪ノ鼻(1)遺跡SK07土坑墓)

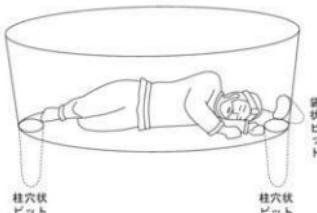


図4 縄繩文文化系土坑墓の模式図

猪ノ鼻(1)遺跡SK07土坑墓より推定

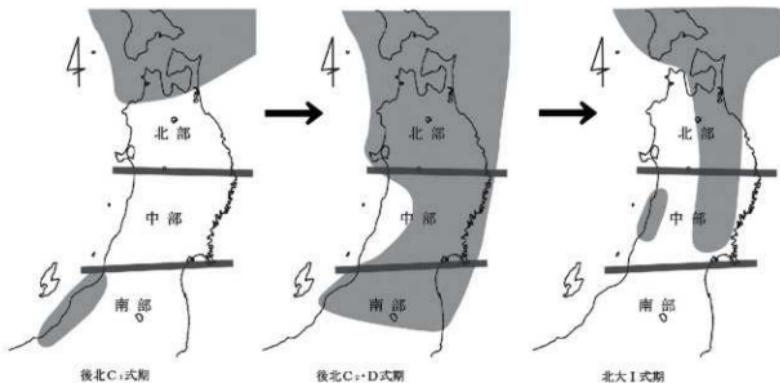


図5 統繩文土器の分布変化

(木村高 2011『東北地方の統繩文化』『講座日本の考古学7 古墳時代(上)』より)

表2 南下の理由各説 (主に後北C2・D式期に関する内容)

| 発表年 | 説 | 内 容 ・ 文 献 |
|-------------------|----------------|---|
| 昭和47年～ (1972～) | 気候 寒冷化説 | 古墳寒冷期の影響で東北地方へ南下したという説 吉崎昌一ほか 1972『シンボジウムアイヌその起源と文化形成』北海道大学図書刊行会 吉崎昌一 1976「6 北邊と南島 1 北邊」『考古学ゼミナール』山川出版社 上野秀一 1992『北海道における天王山系式土器について』『東北文化論のための先史学歴史学論集』 |
| 昭和51年 (1976) | 北方文化の 影響説 | 余市町フゴッペ洞窟出土の鈴谷式土器(サハリン方面から到来)を根拠に、その使用者が後北 C2・D 式の使用者に影響を与え、後北C2・D 式の使用者は南千島あるいは東北地方へ移動したという説 石附喜三男 1976「鈴谷式土器の南下と江別式土器」『北海道考古学』第12輯 北海道考古学会 |
| 昭和51年～ (1976～) | 鉄器などの 物資獲得説 | 古墳文化圏の物資を獲得するために南下したという説 千代業 1976「フゴッペ洞窟人の南進」『季刊どるめん』11 JICCA出版局 菊池徹夫 1978「恵山式と江別式—統繩文化編試論一」『北奥古代文化』第10号 |
| 平成27年 (2015) | 複合要因説 | 寒冷化によって生業が変化し、広域遊動が促され、集団の一部は金属器の交易へと変換するなど、要因は複合的であるとする説 大坂拓 2015「北海道(南部・中央部)」『弥生土器』考古調査ハンドブック12 |

2 南下理由に関して

気候寒冷化説 網走市で出土した古墳文化系の堅櫛(畠山1966)、北東北がルーツの赤穴式土器(弥生系土器)の道内出土例(乾1986・佐藤1998)、古式土師器・須恵器の北上(松田2007)北海道よりさらに北のサハリン南部や択捉島にも分布している統繩文土器(後北C2・D式)の存在(石附1976・大沼1980・大沼忠春1982)、これらはいずれも南下とは逆の動きを示している。よって寒冷化が直接の原因とは考え難い。

北方文化の影響説 鈴谷式の出土例は道内で徐々に増加しているが、少数で分布も限られる。また、後北C2・D式は鈴谷式の分布圏であるサハリン南部からも出土している。よって、鈴谷式を使用した集団が後北C2・D式の集団を広く動かすほどの影響をもっていたとは考え難い。

鉄器などの物資獲得説 統繩文土器に伴う鉄製品や玉類、須恵器等を見る限り、肯定要素は増加している。

複合要因説 印象的には妥当性が高いように感じられるが、「複合的な要因」というかたちで從来諸説をまとめる方向性は、これまでの貴重な議論を収束させかねない。むしろ「複合」させることなく、個々の從来諸説を複数の因子に「分解」し、それら多くの因子を時系列で再整理してみることで「主要な因子」が見えてくるのではないかと思われる。この課題解決には関連諸科学の成果を積極的に援用しながら取り組む姿勢が必要であろう。

III 古墳文化要素の北上

1 「古墳文化」とは「古墳時代の文化」

古墳文化とは、「古墳」がつくられた時代の文化、「古墳」がつくられた地域の文化。

前方後円墳の出現から消滅までの期間を一般的に古墳時代（3世紀中頃～6世紀末頃まで）と呼んでいるが、7世紀まで含める研究者もいる。

※前方後円墳は北海道、青森県、秋田県、沖縄県の4道県以外に分布している。岩手県の前方後円墳は奥州市（胆沢）にある国史跡「角塚古墳」で、日本最北の前方後円墳（古墳時代中期：5世紀後半）として有名。墳丘の長さ46m、後円部の高さ5.5mで、埴輪（円筒・鶴・猪・馬・人物・家）が出土している。なお、北東北のいわゆる「末期古墳」は7世紀以降のものであるが、7世紀を飛鳥時代とする研究者もいれば、古墳時代とする研究者もいる。

2 古墳文化の「要素」

【遺構】

古墳 壘穴住居跡…

【遺物】

土器（土師器※・須恵器）

金属器 玉 石製模造品

櫛 墓輪…

※前期の土師器（須恵器の登場

以前の土師器）は「古式土師器」と呼ばれる。



図6 南関東の古式土師器の北上過程
(比田井克仁 2004『古墳時代前期における関東土器圖』の上巻より)
『史館』第33号 より)

図7 北東北と北海道における古式土師器の分布

(松田安介 2007「北辺における古墳時代土師器系譜の資料」より)

表3 古墳文化の要素の北上に関する記述

| 発表年 | 記述 | 始発 | 終着 |
|----------------------|--|----------------------|-----------|
| 1985 丹羽茂 | 「波状口縁甕・S字状口縁甕は前者が関東地方、後者が東海地方および群馬県地方からの外来的要素の強いものと一般的に理解されているが…（中略）…今、積極的に検討できる段階にはない」 | 関東 東海 群馬県 | 南東北 |
| 1995 西川修一 | 「東北南部では北陸北東部系の流入から、関東系への転換があった」 | 北陸北東部 ・関東 | 南東北 |
| 1998 辻秀人 | 「三世紀後半段階における東海・北陸・関東からの人の移動が、古墳時代社会の成立の直接の契機になった…（中略）…東北地方南部の弥生社会から古墳時代社会への転換は、北陸・東海・関東などからの人の移動を契機として行われた」 | 東海 北陸 関東 | 南東北 |
| 1999 木村高 | 「壺形土器の複合部に施されている刻目や、高坏形土器の外面に残る顕著なハケメは、関東地方における古式土師器によく見られる要素」 | 関東 | 北東北 |
| 2002 木村高 | 「隠川(11)遺跡出土の塙釜式壺のような、複合口縁の下端にハケメ工具の先端による刻目を施すものは関東地方に一般的なものであり、この資料の胎土は、東京湾岸や千葉県域に出土するものとよく類似し、茨城県ひたちなか市金井戸遺跡の高坏の胎土とは特に酷似している。また、高坏は赤彩の色調やミガキの状態、胎土にいたるまで東京都中野区新井三丁目遺跡の高坏に極めて酷似」 | 東京湾岸 千葉県域 | 北東北 |
| | | ※隠川(11)遺跡=青森県五所川原市 | |
| 2004a 比田井克仁 | 「東北における…（中略）…古墳時代の幕開けは東京湾岸に出自を持つ人々の北上によって達成された…（中略）…東京湾岸から北上するという現象がなぜ起こったのか…（中略）…東京湾内部における、古墳とそれをさえる集団の社会構成の中にその解答が潜んでいると思われるが、現状では極めて難題」 | 東京湾岸 | 南東北 図6 |
| 2004b 比田井克仁 | 「II段階において人の流动性・集団移動の活性化が指摘できる地域は、唯一下総地域だけなのである。この段階に東北地方、塙釜式を作り上げた人々の母体は下総の中で東葛・印旛沼・手賀沼地域にある」 | 下総地域 | 南東北 |
| 2007 松田宏介 | 「点的な分布状況と共に、量的にわずかであることも、また当該期の社会状況の一端が現れている…（中略）…稀あるいは「交流」の存在といった点に止まらない評価を与えることが必要」 | 場所の指摘なし へ 問題提起 | 北海道 図7 |
| 2013 井上雅孝 早野浩二 | 「古墳時代中期前半、南小泉式の段階における東北地方には…（中略）…伊勢湾沿岸地域から宇田型甕が搬入される。」「大釜館遺跡出土の宇田型甕についても、主として鉄器が関係する技術拡散、物資流通が付随していた」 | 伊勢湾 沿岸地域 | 北東北 |
| | ■鉄器関係の技術拡散・物資流通説 | ※大釜館遺跡=岩手県滝沢市 | |
| 2020 木村高 | 「かつての青森県域は砂鉄の豊富な地域として有名であり、全国生産量の約半分を占めたこともある。その採取エリアの中心は上北地区…（中略）…赤穴式（≒小坂X式）や後北C2・D式の出土率が高い秋田県域の内陸北部は、小坂や尾去沢の鉱山付近に存在…（中略）…猪ノ鼻（1）遺跡の成立背景に加え、古式土師器の北上理由のひとつに、砂鉄獲得があつたのでは」 | 場所の指摘なし | 北東北 |
| | ■砂鉄獲得説 | ※猪ノ鼻（1）遺跡=青森県七戸町 | |

3 古墳文化要素の北上理由に関して

西川修一(1995)による予察からわずか4年後、青森県域(隠川(1)遺跡)において関東系古式土師器の出土が報告され(木村高1999)、その5年後には比田井克仁(2004b)が南東北へ向かう古式土師器の始発地域を下総地域(東葛・印旛沼・手賀沼地域)と推定した。

丹羽茂(1985)による「外来的要素」への注意からわずか20年弱の間に、東北へ向かう古式土師器の始発地域がかなり絞り込まれたことは大きな前進であるが、ここまで議論の中に「北上理由」に関するものはみられない。

中期の例ではあるが、大釜館遺跡から出土した土師器(宇田型甕)の北上の背景に、「鉄器関係の技術拡散と物資流通」があると述べた井上雅孝・早野浩二(2013)論文は、古墳文化圏の土師器の北上理由を明瞭に述べたものとして高く評価されるとともに、この説は続縄文文化の南下理由として妥当性の高い「鉄器獲得説」と対になる点が興味深い。

筆者による拙稿(2020・2021)では、古墳文化要素の北上理由として「砂鉄獲得説」を提出した。この説は古墳時代前期の玉類を豊富に保有していた青森県七戸町猪ノ鼻(1)遺跡の土坑墓群(古墳時代前期)、137点の細型管玉が出土した同町舟場向川久保(2)遺跡の土坑墓(弥生時代中期)、玉の保有率が異常に高い同町森ヶ沢遺跡の土坑墓群(古墳時代中期)、これら3遺跡が不自然なほど近接している状況(図8)に違和感を覚えたことが発端となっている。

「特別」と見なすべきこれら3遺跡が発掘調査件数の決して多くない、きわめて限定された狭い空間の中に統々と見つかったことは偶然とは考え難い。装身具を贅沢にまとった人物がこの地区に長期的に存在していた状況を想定すべきと考える。

ただしこのような奢侈品の入手にあたっては、相応の「交換財」が必要だったはずであり、弥生時代中期から古墳時代という時代性に照らせば、それはやはり「鉄」であったと考えられる。しかし当時、ここに製鉄技術があった可能性は限りなくゼロである。そこで「鉄の原料」はどうであろうかと調べたところ、かつての青森県域は砂鉄の豊富な地域として有名であり、全国生産量の約半分、東北地方の8割以上を占めていたことが判明した。

砂鉄の分布状況を具体的に示した図は意外なほど少なく、入手には困難を極めたが、長谷川熊彦(1936)によるもの(図9)が最も見やすくまとまっているものであると思われる。また、地質調査所(1955)も砂鉄の分布状況を示しており(図10)、これらの図によれば砂鉄は北東北の青森県下北地区から岩手県北部に特に濃く分布していることが分かる。

広域分布図から目を転じ、上記3遺跡の付近に砂鉄の存在を確認すると、森ヶ沢遺跡の西方3.6Kmの地点には「底田層」とよばれる砂鉄鉱床の母層があり、山砂鉄が露頭となっていたことが大西弘・友田吉澄(1962)によって報告されている。また、猪ノ鼻(1)遺跡の東方20Km弱のところ

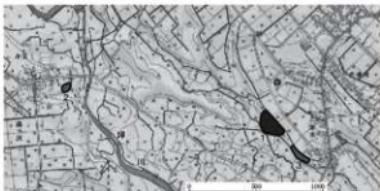


図8 玉類が豊富に出土した3遺跡の位置関係
(1:猪ノ鼻(1) 2:森ヶ沢 3:舟場向川久保(2))

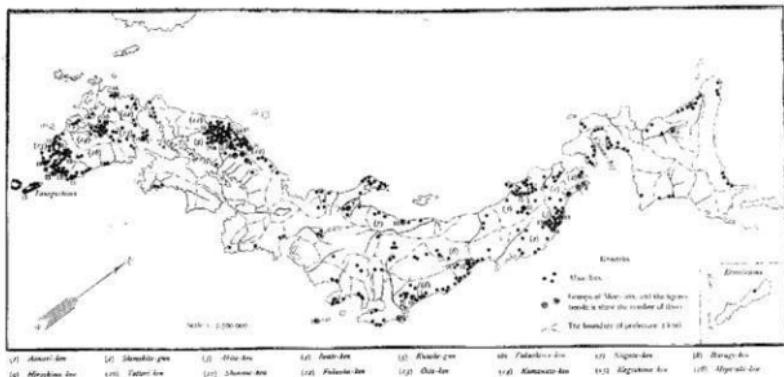


図9 日本全国の砂鉄鉱区の分布
(長谷川龍彦 1936『砂鉄』工業図書株式会社 より)

には「淋代層」と呼ばれる浜砂鉄があり、距離的に近いとは言いがたいが、坪川と小川原湖を利用した水運が可能であったと想定すれば、陸運距離はわずか4Km強である。

国内における砂鉄を原料とした鉄生産の開始時期は不明であるが、古墳時代前期頃から認められるようになる「砂鉄利用」の複数事例¹⁾や東日本における鍛冶関係遺跡の出現²⁾など、筆者による砂鉄獲得説は、このような事象を俯瞰的に捉えて提出したものである。

なお、この説は北海道統縄文文化の南下理由の1つに加えることも不可能ではない。つまり、北海道統縄文文化人は鍛冶に関する技術は持っていないかったが、砂鉄が「交換財」になり得ることを知っており、北東北の集団と接触する中で砂鉄を獲得、産出エリアを掌握し、古墳文化人との交易³⁾を行っていた可能性も考えられる。

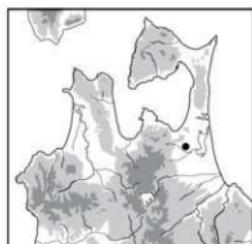


図11 玉類が豊富に出土した3遺跡の位置 (●印)



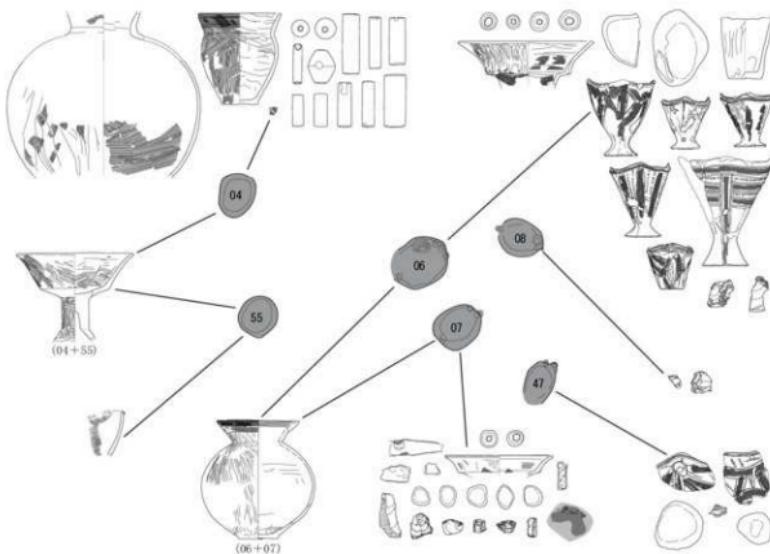
図10 東日本における砂鉄の分布
(地質調査所 1965『日本の砂鉄資源』
『地質ニュース』No.13 より)

註

- 1)千葉県白井市一本桜南遺跡(古墳時代初頭)では壺形土器の中に砂鉄が検出され、徳島県徳島市矢野遺跡(古墳時代前期初頭)では細頸壺の中に、高知県土佐市居留地遺跡(弥生時代終末期～古墳時代前期)では小型の鉢の中に砂鉄が入っていた。また、兵庫県豊岡市入佐山3号墳(古墳時代前期[4世紀後半])では埋葬施設から砂鉄が検出されている。
- 2)弥生時代終末期～古墳時代前期における東日本の鐵治関係の遺跡としては、新潟県長岡市五千石遺跡(古墳時代前期)で鐵冶炉跡・羽口、千葉県八千代市神塚遺跡(古墳時代初頭)で鐵冶炉跡・碗形津・鐵造剝片・粒状津、千葉県旭市岩井安町遺跡(弥生時代終末期)で炉壁跡・神奈川県小田原市千代南原遺跡(古墳時代初頭)で碗形鍛冶津・羽口、茨城県土浦市八幡脇遺跡(古墳時代前期)で鍛冶工房跡・羽口・金床石破片・鉄津・鐵造剝片・粒状津、埼玉県宮代町山崎山遺跡(古墳時代前期)で鍛冶工房跡・鉄津・羽口・鐵造剝片・砥石・台石・錐が見つかっている。
- 3)コメをはじめとする農産物は気候変動に弱く、当時の北東北、特に太平洋側では安定的な生産は望めないが、砂鉄は気候変動に左右されない安定的なものと言える。これを交換財にすれば容易となる。なお、余談ではあるが、図9に示しているように、北東北における砂鉄の分布は非常に濃厚であり、分布状況は岩手県岩泉町豊岡V遺跡の赤穴式窯の堅穴建物跡や、同県久慈市新町遺跡の二重口縁壺を伴う古墳文化系の堅穴建物跡、秋田県方面では続繩文系の土坑墓で著名な能代市寒川II遺跡などの分布と重なる。この点は当然ながら重複されなければならないが、後の時代では律令国家の北進理由や、いわゆる蝦夷集団の勢力圏の形成過程や背景を考える上でも示唆的である。

引用文献

- 乾芳宏 1986 「北海道における終末期弥生系土器群について」『史峰』第11号 新進考古学同人会
- 井上雅孝・早野浩二 2013 「岩手県岩手郡滝沢村大釜館遺跡出土の宇宙型壺について」
- 『筑波大学先史学・考古学研究』第24号 筑波大学人文社会科学研究科 歴史・人類学専攻
- 大西弘・友田吉澄 1962 「青森県東部鮮新世の砂鉄鉱床 天開林鉱山を中心として」『鉱山地質』Vol. 12, №55
- 大沼忠春 1980 「続繩文文化」『北海道考古学講座』みやま書房
- 大沼忠春 1982 「道央地方の土器」『繩文文化の研究』6 雄山閣
- 木村高 1999 「続繩文/古墳時代の出土遺物」『謁川(11)遺跡I・謁川(12)遺跡II』青埋報 第260集 青森県埋セ
- 木村高 2002 「岩手県を取り巻く続繩文文化・・・青森県域」『岩手考古学会第29回研究大会発表要旨』岩手考古学会
- 木村高 2011 「東北地方の続繩文文化」『講座日本の考古学7 古墳時代(上)』青木書店
- 木村高 2020 「北東北に検出された続繩文文化の墓」『考古学ジャーナル』№747 ニューサイエンス社
- 木村高 2021 「土坑墓」『猪ノ鼻(1)遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第616集 青森県埋蔵文化財調査センター
- 佐藤剛 1998 「北海道出土のいわゆる赤穴式土器について」『北方の考古学』野村崇先生還暉記念刊行会
- 地質調査所 1955 「日本の砂鉄資源」『地質ニュース』№13
- 辻秀人 1998 「列島における東北世界の成立」『歴史のなかの東北 ー日本の東北・アジアの東北』河出書房新社
- 西川修一 1995 「東・北関東と南関東・南関東圏の拡大ー」『古代探査』IV 早稲田大学出版部
- 丹羽茂 1985 「今熊野遺跡における方形周溝墓群とその集落」『今熊野遺跡・一本杉遺跡・馬越石塚』宮城県調査第104集
- 長谷川彦彦 1936 「砂鉄」工業図書株式会社
- 畠山三郎太 1966 「北海道の馬蹄状堅巣について」『北海道考古学』第2輯 北海道考古学会
- 比田井克仁 2004a 「古墳時代前期における関東土器圏の北上」『史館』第33号
- 比田井克仁 2004b 「地域政権と土器移動－古墳時代前期の南関東土器圏の北上に関する議論－」『古代』第116号
- 松田宏介 2007 「北辺における古墳時代土器器系譜の資料－日本列島北部における古墳時代併行期の理解に向けて－」『宮城考古学』第9号 宮城考古学会



図①

猪ノ鼻(1)遺跡の土坑墓と出土遺物

土器細片と測定の多くの場合は掲載を省略している。遺物のスケールは統一していない。

表① 土坑墓の形状・規模・付属施設等

| 群 | 遺構名 | 平面形 | 断面形 | 規 模 | | | | 柱穴ピット | | 鉢状ピット | | 軸方向 | その他の付属施設 | 直視遺構(同じく遺構) | 備 考 | | | | |
|----|------|----------|----------|-----|-----|-----|-----|----------|-------|-------|-----|-----|----------|-------------|------|-----------------|---------------------------|--|--|
| | | | | 開口部 | | 深さ | 面 | 柱穴ピット | | 鉢状ピット | | | | | | | | | |
| | | | | 長さ | 幅 | | | 長さ | 幅 | 長さ | 幅 | | | | | | | | |
| A群 | SK06 | 横円形 | 横 穴 | 208 | 165 | 184 | 141 | 1.30 : 1 | 54~66 | 38 | 南 西 | 北 東 | 178 | 右 | 土器 片 | N-66°-E P111 | SK05 平面規模最大 | | |
| | SK07 | 横円形 | やや不整な椭円形 | 162 | 136 | 138 | 102 | 1.35 : 1 | 54~59 | 29 | 南 西 | 北 東 | 162 | 左 | — | N-54°-E | — | | |
| | SK08 | 横円形 | 丸みを帯びた箱形 | 169 | 126 | 132 | 93 | 1.42 : 1 | 49~53 | 40 | 西 | 北 東 | 164 | 左 | — | N-115°-E | SD01 SP3200 | | |
| | SK47 | 横円形 | 丸みを帯びた箱形 | 150 | 101 | 116 | 83 | 1.40 : 1 | 36~54 | 31 | 南 西 | 北 東 | — | 右 | 土器 片 | N-29°-E | SD01 SP96, 229 底面の長さは図上推定 | | |
| B群 | SK04 | やや不正な椭円形 | 逆台形 | 152 | 122 | 114 | 91 | 1.25 : 1 | 38~49 | — | — | — | — | — | — | N-11°-E | ST01 上部の削平著しい | | |
| | SK55 | 円形に近い椭円形 | 逆台形 | 138 | 128 | 118 | 96 | 1.23 : 1 | 19~28 | — | — | — | — | — | — | N-29°-E | ST01 上部の削平著しい | | |

※底底の計測値は、基本的には図の「下端部」に基づくが、柱穴ピットをもつA群の土坑墓の長軸長において、柱穴ピットの上端縁によって土坑の下端縁が途切れる場合は、図上で鋭状のラインを復元して計測している。

表② 土坑墓出土遺物一覽

| 群 | 遺構名 | 土 器 | | | | 玉 | | | | 石器・石製品類 | | | | 重複構 (同じく遺構) | 備 考 | | |
|----|------|------------------|----------|--------|------|-------|-------|---------|---------|----------|----------|-----------|-----------|----------------|---|--|--|
| | | 統 文 | | 土器 | 古式土器 | 玉 | | 石製品 | 石器 | 石製品類 | | | | | | | |
| | | 竹付 筒状 竹付深鉢 | 無文 土器 | 不 明 | 高杯 | 壺 | 甌 | 刮削 器 | 刮削 器 | 王冠 小器 | 王冠 小器 | 赤色 顔料塊 | 赤色 顔料塊 | | | | |
| A群 | SK06 | ○○○ | ○○ | ○ | ○ | ●複合 | ○ | ○○○○○ | 有 | ○ | ○ | ○○○ | ○○○ | ○○○ | SK05 ●複合口縁器、同一個体 (SK06: 体部～底部) (SK07: 口縁部～底部) | | |
| | SK07 | ○○ | ○○ | ○ | ●複合 | ○ | ○○○○○ | ○○ | ○ | ○○○ | ○○○ | ○○○ | ○○○ | ○○○ | SD01 SP3200 | | |
| | SK08 | ○○○ | ○○○ | ○○○ | ○○○ | ○○○○○ | ○○○○○ | ○○○○○ | ○○○○○ | ○○○○○ | ○○○○○ | ○○○○○ | ○○○○○ | ○○○○○ | SD01 SP96, 229 | | |
| | SK47 | ○○○ | ○○○ | ○○○ | ○○○ | ●透 | ○○ | ○○○○○ | ○○○○○ | ○○○○○ | ○○○○○ | ○○○○○ | ○○○○○ | ○○○○○ | ST01 ●赤彩、同一個体 (杯底と脚部が複合) | | |
| B群 | SK04 | ●透 | ○○ | ○○ | ○○ | ○○○○○ | ○○○○○ | ○○○○○ | ○○○○○ | ○○○○○ | ○○○○○ | ○○○○○ | ○○○○○ | ○○○○○ | ST01 | | |
| | SK55 | ○○○ | ○○○ | ○○○ | ○○○ | ●透 | ○○○○○ | ○○○○○ | ○○○○○ | ○○○○○ | ○○○○○ | ○○○○○ | ○○○○○ | ○○○○○ | ST01 ●赤彩、同一個体 (杯底と脚部が複合) | | |

* SK06を切るSK05(平安時代)出土のガラス小玉はSK06に含め、SK04を切るST01(平安時代)出土の琥珀玉はSK04に含めている。

* 明らかに認めと見なされる土器細片と鉢底遺物は含めていない。

古墳時代のフロンティアライン－田向冷水遺跡－

小保内 裕之（八戸市博物館）

はじめに

19世紀の後半に米国で行われた西部開拓は、白人入植者による先住民のインディアン駆逐の歴史である。このとき定められた“フロンティア”は、開拓地と未開拓地との境界地域を指すとともに、インディアン掃討最前線を意味した。現在では負のイメージが強い一方で、新分野とか最先端といった意味も付加されているが、フロンティアの本来の意味は国境や辺境である。

本稿では、辺境という意味でフロンティアを用い、古墳文化側の社会と縄繩文化側の社会との交流がどのようなものであったか、日本最北に位置する古墳集落の田向冷水遺跡を通して考えてみたい。



図1 古墳時代の文化圏概念図

1. 田向冷水遺跡とは

(1) 遺跡の位置

青森県南東部に所在する田向冷水遺跡は、現在の海岸線から内陸におよそ4.5kmに位置し、新井田川下流域の左岸、標高8～20mの河岸段丘上に立地する。昭和61年の分布調査で発見されて以降、旧石器（県南初）・縄文・弥生・古墳（県内初）・飛鳥・奈良・平安・安土桃山・江戸までの、各時代の遺構や遺物がみつかっている。これだけの時代幅をもつ遺跡は、八戸市内において他に例がない。



図2 遺跡の位置

(2) 遺跡の年代

古墳時代は、前期・中期・後期に分けるのが一般的である。ただし、実年代については諸説あるため、本稿では土師器と縄繩文土器の併行関係を表1のとおりとして話を進めたい。この表に基づいて言えば、田向冷水遺跡の文物は5世紀後葉から6世紀中葉のものであり、集落は約100年弱存続したことになる。

| 時代 | 前期 | 中期 | 後期 |
|---------|------------|---------------|---------|
| 世紀 | 3世紀後半～4世紀末 | 4世紀末～5世紀 | 6世紀 |
| 土師器 | 壺釜式 | 壺小鉢式・引田式・佐平林式 | 住社式・渠園式 |
| 縄繩文土器 | 後北C2-D | 北大I式 | 北大II式 |
| オホーツク土器 | 鈴谷式 | | 十和田式 |

表1 古墳時代の併行関係

(3) 集落の構成要素と特徴

古墳時代の集落は、竪穴建物跡8軒・竪穴遺構3軒・土坑27基・円形周溝1基で構成され、中期後葉から後期中葉にかけて営まれた。これらは、新井田川を眼下に取める標高17m前後の緩斜面に造られ、約70m四方の範囲に分布する(図3)。

① 竪穴建物跡について

一辺6~3m程の竪穴建物跡は、規模に大・中・小が認められ、平面形は整った方形から長方形を呈し、柱穴配置は規模に比例して6・4・2本柱の3種類がある。北から北西壁にかけてカマドが造り付けられ、煙道は無いもの・半地下式で長い又は短いものがある。燃焼部奥壁の一段高いところから階段状に始まる煙道が特徴的であり、4軒で確認されている(図4)。また、南東又は北東隅に貯蔵穴を設けるものが多く、間仕切り溝は半数以上で、出入り口に関係するピットは半数の建物で確認されるなど、構造に強い規則性が認められる。

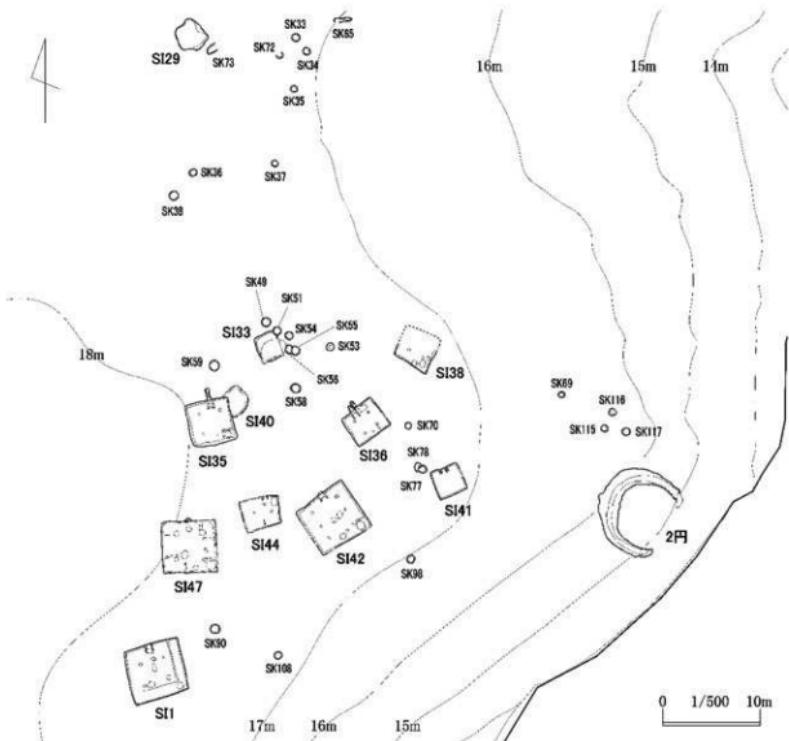


図3 田向冷水遺跡古墳時代集落遺構配置図

これらは、5世紀後葉に4軒前後で始まり、同規模で6世紀初頭を経過後、前葉には1軒のみとなり、中葉には姿を消す。

② 竪穴遺構について

3軒の竪穴遺構（表2の9～11）のうち、SI33は重複や配置状況等からみて、竪穴建物と同時かそれ以前のものであると考えられる。部分的に薄い貼床がされたSI40・29は、本遺跡における貼床の採用が赤穴式期（3世紀前後）の建物に認められることと重複関係から、3世紀以降5世紀末以前のものである可能性が高い。

③ 土坑について

27基検出された土坑は、建物の周辺、北、東の三箇所に分布する。多くの土坑に礫が伴い墓であった可能性が高く、詳細は後述する。5世紀後葉のものは少なく、6世紀中葉のものが多い。

④ 円形周溝について

建物跡からやや東に外れた台地の縁辺部、旧河道に向かって傾斜が強くなり始めところで位置する。削平により遺存状態は悪く埋葬施設は検出されていないが、本来、盛土がされた小型の円墳だったと考えられる。これについても後述する。

| 番号 | 時期 | 規模 | | 構造 | | 出土遺物 | | | | | | | | |
|---------|-----------------|-----------|-------------------|----|-----------|--------------|----------|-----|---------------|--------------------|--------------|-----------------------|---------------------|-------|
| | | 長×短m | 床面積m ² | 分類 | 平面形 | カマド | 通路 | 床中央 | 付属施設 | 土器 | 鉄製品 | 石製品 | 石器 | 玻璃 |
| 1 SI42 | 5世紀後葉 | 5.97×5.92 | 28.22 | 大型 | 方形 | 北西壁 中央 | 長 半地下 | - | 竪穴式1 間仕切構築 | 土師器、須恵器 高杯1、北大1 | 不明状況 | 網織石15、方削石1 1、縫石1ほか | 10.16 | |
| 2 SI47 | 5世紀後葉 | 5.70×5.33 | 26.36 | 大型 | やや 長方形 | 北壁 中央 | 短 半地下 | 1 | 竪穴式2 間仕切構築 | 土師器、須恵器 高杯1 | 刀子1 不明棒状1 | 網織石13、方削石1 2、藍色2ほか | 8.27 | |
| 3 SI44 | 5世紀後葉 | 4.00×3.40 | 10.76 | 小型 | 不整 長方形 | 北壁 東寄り | 不明 | 1 | 竪穴1 間仕切構築 | 土師器、北大1 | - | 円板形石製模 造品1 | 網織石4、方削石1 | 9.09 |
| 4 SE26 | 5世紀後葉～ 6世紀初頭 | 4.08×3.56 | 11.21 | 小型 | 長方形 | 北壁中央 ～西寄り | 長 半地下 | - | 竪穴1 間仕切構築 | 土師器、北大1 | 鉄鏃1 | 網織石玉本製品2 網織石3、縫石2 | 59.56 | |
| 5 SH1 | 5世紀後葉～ 6世紀初頭 | 3.08×3.04 | 8.29 | 小型 | 方形 | 北壁 中央 | 無 | 3? | - | 土師器 | - | - | - | - |
| 6 SI1 | 5世紀～ 6世紀初頭 | 5.80×5.60 | 28.20 | 大型 | 方形 | 北壁 中央 | 無 | 3 | 竪穴1 | 土師器、北大1 | 臼玉1 | 網織石10、方削石1 1、縫石製品3 | 2.3 | |
| 7 SI35 | 5世紀～ 6世紀初頭 | 4.58×4.56 | 15.27 | 中型 | 方形 | 北壁 東寄り | 長 半地下 | - | 竪穴1 間仕切構築 | 土師器、北大1 | 鉄鏃1 | 臼玉2、ガラス 玉1 | 網織石1、方削石2、 石墨1ほか | 17.66 |
| 8 SI38 | 6世紀前葉 | 4.05×3.82 | 12.15 | 中型 | 不整 長方形 | 西壁 中央 | 不明 | - | 竪穴2 | 土師器、須恵器 高杯1 | - | - | 網織石3、方削石1、 縫石1 | - |
| 9 SI40 | 3c～ 5世紀以前 | 2.72×2.64 | (4.80) | 小型 | 不整形 | - | - | - | 漆塗い貼床 鏡圓文？ | - | - | 網織石1 | - | - |
| 10 SE29 | 3c～ 5世紀以前 | 3.02×3.00 | 5.97 | 小型 | 不整形 | - | - | - | 漆塗い貼床 | 土師器 | - | - | - | - |
| 11 SI33 | 3c～ 5世紀以前 | 2.88×2.48 | 5.28 | 小型 | 長方形 | - | - | - | 漆塗床 | 土師器 | - | - | - | - |

註1: 小型10m前後、中型15m前後、大型25m前後

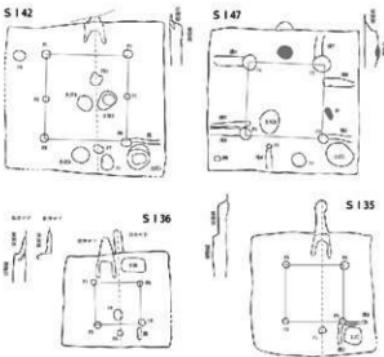


図4 竪穴構造模式図

表2 田向冷水遺跡古墳時代竪穴建物一覧

(5) 遺物の構成要素と特徴

田向冷水遺跡の古墳時代集落からは、大まかに言うと器の類である土器と、鉄製品・石製品などの道具の類がみつかっている。これらを、これまでの一般的な理解で分類すると、古墳文化に由来するものが「土師器、須恵器、鉄製品、石製模造品、玉類」、統縄文文化に由来するものが「統縄文土器、黒曜石製石器、方割石」となる。

① 土器について

土師器は壺、壺、甕、瓶、手捏土器などがみられ、須恵器は壺、甕、罐、高壺が出土している。

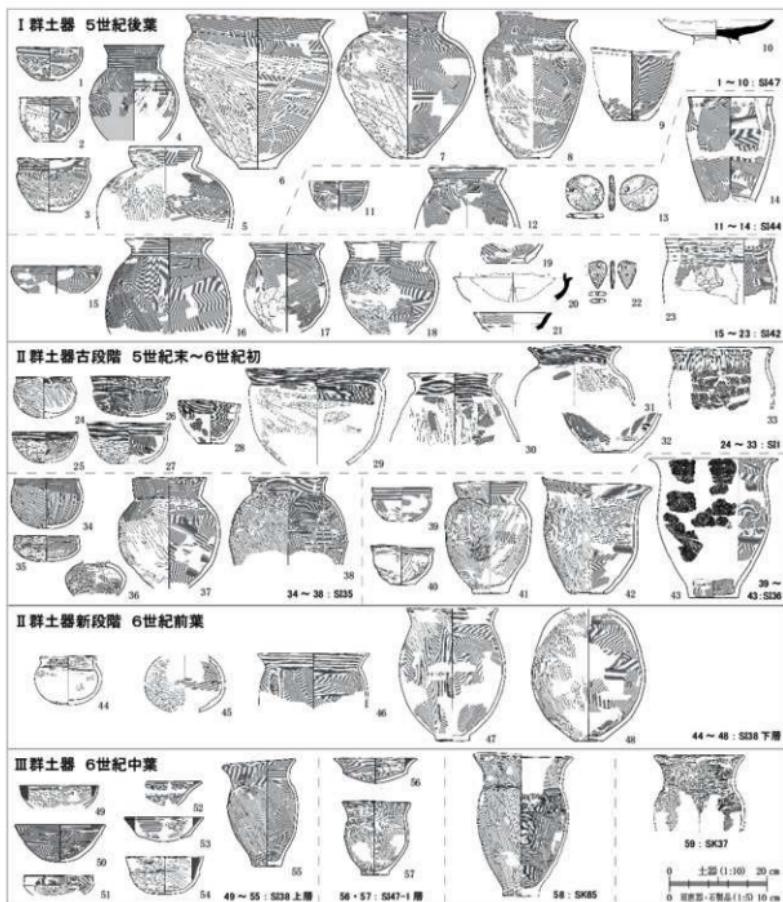


図5 田向冷水遺跡土器変遷図

続縄文土器は深鉢を主体に、鉢と片口も若干認められる。これらの土器は、これまでの検討によってⅠ群土器(5世紀後葉)→Ⅱ群土器古段階(5世紀末~6世紀初)→Ⅱ群土器新段階(6世紀前葉)→Ⅲ群土器(6世紀中葉)に分類されている(小保内2006、宇部2011)。指標となる遺物を図5に示した。

Ⅰ~Ⅱ群は、東北地方南部の引田(佐平林)式に併行すると考えられる土師器の壺・壺・甕・瓶・手捏土器を主体とし、TK216~23段階の須恵器壺・甕と北大I式土器の深鉢が伴う。また、赤褐色胎土の土師器がⅠ群で約57%、Ⅱ群古段階で約44%、Ⅱ群新段階で約11%伴う。

Ⅰ群の壺は平底で直立口縁のものが優位なのに対し、Ⅱ群の壺は半球形の体部で内面頸部に稜をもつ壺が優位となる。甕の違いは不明瞭ながら、Ⅱ群古段階から口縁部のミガキが目立つようになり、Ⅱ群新段階で長胴化する傾向にある。これに呼応するように、続縄文土器の口縁部も長くなる傾向が認められる。

住社式に併行するⅢ群は、土師器の壺・甕を主体とし、赤彩土器は残るもの赤褐色胎土の土師器と北大式土器はみられなくなる。替わって、内面黒色処理の壺が一定量伴い、壺52や甕55・57のようにヘラミガキを多用し口端の角張るものが現れる。Ⅲ群期には、赤褐色胎土の土師器の消滅と内黒土器の採用といった、東北南部と連動した動きを見せつつ、東北部型とされる甕55のような在地型の土師器甕が出現する。

なお遺跡全体として、土師器は完形のものが多く172個体、続縄文土器は破片しかないものの52個体検出されている。個体数では3:1ほどの比率なのに対し、土師器の遺存率が圧倒的に高く、建物内ではその傾向が一層強くなる。続縄文土器は、遺存率の低さや、拡張後の主柱に北大I式の口縁部破片が埋納されたSI1の例から、日常用の食器であった土師器とは異なる使い方や捨て方をされていた可能性がある。例えば、祭祀・儀礼に伴う破碎や埋納、古墳集落内外での分配といった特殊な使われ方が想定される。

② 鉄製品について

堅穴建物跡から鉄鎌、刀子、棒状鉄製品など4点みつかっている(図6)。SI35から出土した343は鍔身両丸造の長三角形を呈する鉄鎌で、逆刺の外反は弱い。角棒状の373は鉄鎌の柄の一部であろう。490は刀子、491は丸棒状を呈する鉄製品であるが用途は不明である。

田向冷水の対岸に位置する市子林遺跡の土坑墓SK15から、長三角形鎌が7点出土している。鎌身部分が大きく幅広なこの鉄鎌に対し、343は全体的に細身で薄い。同じ古墳時代中期のなかでも、市子林遺跡例がより古く、343は新しい時期のものとみられ、SI35の土器が5世紀末~6世紀初であることを符合する。

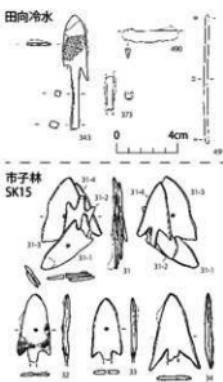


図6 鉄製品

③ 石器について

堅穴建物跡からは、搔器、削器、方割石、磨り石、敲き石、石皿、砥石、軽石製品など70点を超す石器が出土している。

このうち、扁平な円盤を長さ10cm前後に分割した方割石は、SI42・47・44・1・35・38から合わせて8点出土した。石材は凝灰岩・はんれい岩・砂岩・安山岩・頁岩がみられ特に偏りではなく、分割回数に規則性は認められない。明瞭な使用痕が認められるものではなく、分割面の縁辺に潰れがみられるもの、被熱しているものがある程度である。中半入遺跡では、黒曜石製石器と方割石は出土に相関関係が認められ、セットとなる加工具とされている（高木2002）。田向冷氷遺跡においてはそのような状況は認められなかったが、集落全体の性格を考えれば、方割石も加工具の一種であった可能性が高い。

④ 黒曜石製石器について

遺構内外合わせると70点以上出土しており、搔器、両極石器、素刃削器といった器種と、使用痕剥片、石核、剥片・碎片類が認められている。48点の使用痕分析を行った結果、黒曜石製石器は皮革加工に利用され、着柄の可能性があるという。また、使用痕は定型的な石器全てにみられたわけではなく、剥片類においても観察されている。これら使用痕の認められるものは、床面あるいは下層から検出されたものが多く、堅穴建物内で使われた道具の一つであったことは間違いない。

出土状況を見ると、大型のSI42・47・1では10点を超すのに対し、小型から中型のSI44・36・35では4点以下となる。つまり、堅穴の規模に比例する黒曜石保有率の違いは、生業活動内容の違いや、堅穴の機能が異なっていたことの証左であろう。

次に原産地についてみてみると、田向冷氷遺跡から出土した旧石器時代から平安時代に及ぶ黒曜石は、科学的に判別されたもの41点、使用痕分析において肉眼観察されたものの27点、筆者による肉眼観察10点があり、これら計78点の推定産地を図9に掲載した。その産地は、宮城県湯の倉が約8割を占め、岩手県折居と北海道がそれぞれ約1割となっている。旧石器時代は、ちょうど八戸の反対側に位置する深浦産だったものが、弥生時代には北海道産となり、古墳時代は宮城県北西部の湯の倉産が主体、古代には再び北海道産が増加する事実は興味深い。

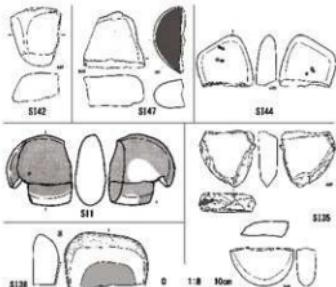


図7 方割石



図8 黒曜石製石器 (SI47出土品)

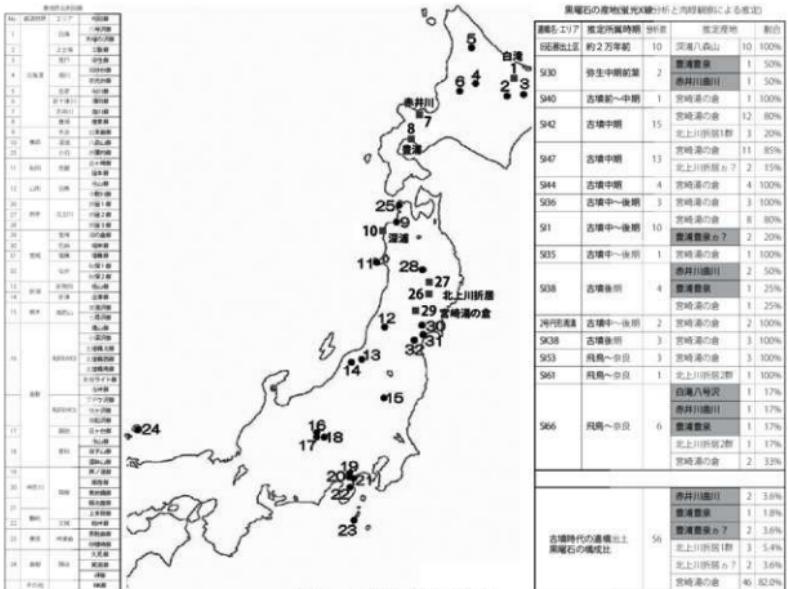


図9 黒曜石分析結果

⑤ 石製模造品について

祭祀具の石製模造品は、SI42から剣形1点が、SI44からは円板形1点が、いずれも床面から出土している。緑色凝灰岩製の剣形は、孔が頭部と中央付近の3ヶ所に穿たれ、最上部の孔は未貫通である。やや楕円形を呈する粘板岩製の円板形は、孔が2ヶ所に穿たれた、いわゆる双孔(有孔)円板である。孔の一つは表から裏へ、もう一つは裏から表へ向かって穿孔される。

岩手県中半入遺跡の双孔円板と比較すると、中型に分類された5点が非常に類似し、5世紀第3四半期とされている（高木2002）。ただし、中半入遺跡例の穿孔が全て片面から行われている点が異なり、表裏別方向の穿孔例は、宮城県仙台市南小泉遺跡第26次調査SR-1の4層出土品などに認められる（五十嵐1998 ※SR-1は5世紀の中でも幅をもつ）。また、福島県郡山市正直A遺跡1号祭祀跡では、複数孔の剣形が11点出土しており、遺構の年代は5世紀後半から6世紀初頭とされている（山内ほか1994）。これらのことからも、田向冷水遺跡の2点は、5世紀後葉のものとみて良いだろう。

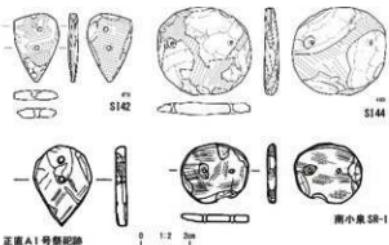


図 10 石製模造品

⑥ 玉類について

装身具の玉類は、石製白玉4点、勾玉1点、ガラス玉1点が出土しております。古墳社会の習俗が持ち込まれたことを示す。白玉は頁岩製で、1点が断面円筒状を呈し、他は太鼓洞状を呈する。勾玉も頁岩製で、全体に丁寧な研磨がみられる。ガラス玉には若干気泡が認められる。

市子林遺跡では、土坑墓4基から石製白玉・管玉、琥珀丸玉、ガラス玉が出土し、409点に達する白玉は緑泥石岩・緑色凝灰岩・軟玉などを素材とする(大野2004)。白玉は断面円筒状を呈するものが主体で、管玉様のものを切断して作ったものとみられ、このような例は森ヶ沢遺跡にも認められている(阿部2008)。また、北海道礼文町香深井5遺跡の土坑や墓坑、遺構外から出土した「石製小玉」と報告されている白玉は、管状のものを輪切りにして作ったものと推定されており(種市ほか1997)、より北の類例として挙げることができる。

堅穴建物からの出土である田向冷水遺跡例と、多くが墓から出土している上記3遺跡の白玉では製作技法上の違いが認められる。このことは、何よりも時期の違いを表していると思われるが、生産と流通を含めた系統の違いも示しているのかもしれない。

なお、6軒(SI42・47・44・36・1・35)の堅穴建物跡の床面や掘り方などから、細かく砕けた琥珀が一定量出土している。研磨痕を有し、穿孔は認められないものの玉未製品と考えられるものが3点あり、図示した1は棗玉様を呈する。

(6) 生業

堅穴建物跡の半数に地床炉が残され、石器の中で最も多く出土した黒曜石製石器に皮革加工の痕跡を認めることなどから、田向冷水の集落は工房的な性格が強く、皮革生産が主たる生業であったと考えられる。加えて、小規模ながら琥珀の加工も行っていた。

使用痕分析により定型的な石器だけでなく剥片にも皮革加工の痕跡が観察され、黒曜石以外の石材であっても黒曜石と同様の形態をとるスクレーバーもあるなど、使えるものは何でも使っていた状況がうかがえる。したがって、様々な用途が想定される方割石、敲き石、石皿なども含め、皮革加工の一連の工程の中で使うことがあったのかもしれない。

食料生産については、建物内からオニグルミ・トチノキ・イネなどの炭化種実がみつかっていることから、一定規模の採集活動と農耕も行われていたと考えられる。また、石鏃や骨角器などの狩猟具はみつかっていないが、遺跡の近くは新井田川と松館川が合流する絶好のサケの漁場であり、漁撈も生業の一部を成していたとみるのが自然であろう。

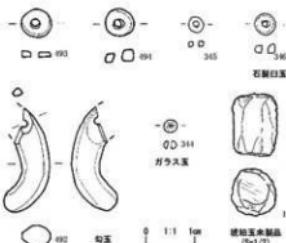


図 11 玉類

2. 土器

ここまで田向冷水遺跡の遺構と遺物の概要について確認した。ここからは、八戸地域における古墳時代中期から後期にかけての土器の変遷についてみていく。

(1) 変化する縦縄文土器

田向冷水遺跡では、縦縄文土器が52個体分みつかっている。これらはI群からIV群に分類されており(小保内2003)、図12に示した。

I群は、口唇及び隆線上に刻目をもち、頸部は「く」の字に外傾、胴部にはナデ消す帶縄文、又は刺突列が付属する帶縄文がみられる。微隆起線はない。北海道の同時期の資料に比べ胴部の丸みが強い。II群は、突瘤文と口唇ないしは隆線上に刻目をもち、口縁部は外反、胴部には刺突列が付属する帶縄文、又は微隆起線が付属する帶縄文がみられる。突瘤文以外の文様属性は限りなくI群に近く、波状口縁である点も共通する。

III群は、突瘤文をもち、口縁部は「ノ」の字に外反、隆線があるものは横走又は縦走し、胴部に文様があるものは帶縄文となる。IV群は、突瘤文+沈線、又は口縁部に縄文+沈線がみられる。IからIII群の深鉢形土器は、文様属性の変化と合わせて、胴部と頸部が次第に伸びることによって器高が高くなるという傾向を認めることができる。なお、胴部破片を含めても、帶縄文・微隆起線・刺突の三要素が組み合う資料は1点も認められていない。

次に、市子林遺跡の土坑墓から出土した土器を見ると、SK11では未だ類例のない23と北大I式土器24が共伴し、SK15では作りの雑な土師器坏29と北大I式土器30が共伴し

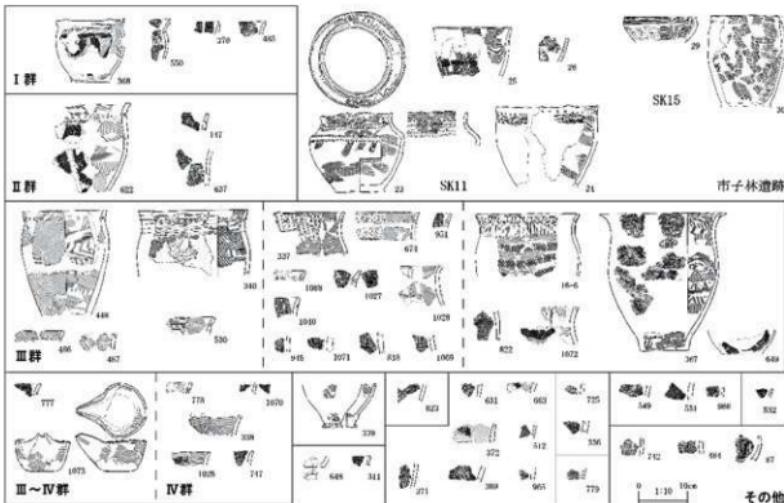


図12 田向冷水遺跡出土の縦縄文土器及び市子林遺跡出土土器

ている。24と30は、胴部が直線的で頸部に括れがほとんど認められることから、田向冷水Ⅲ群より古く位置付けられる。

壺形土器の23は、頸部と肩部に刺突列が巡り、一箇所にだけ鋸歯状の列点文が施され、北大I式土器の範疇にはない形態と文様を呈す。強いて言えば、文様モチーフや全体に重量感のある感じはオホーツク土器に似ており、鋸歯状の列点文は鈴谷式の縄線文に見えなくもない。いずれにせよ、北大式の分布域よりさらに北の土器との関連が注目される資料である。

(2) 縄繩文土器の年代観

土師器・須恵器と共に伴したⅢ群を定点としてその前後を考えると、市子林の資料が5世紀中葉、Ⅱ群は5世紀前葉、Ⅰ群は4世紀後半と想定しておきたい。Ⅳ群は、諸属性からみて型式学的には北大Ⅱ・Ⅲ式に当たることが可能であり、Ⅲ群に後続すると考えられる事から、6世紀前葉から中葉を想定しておきたい。

なお、宮城県旧築館町伊治城SD260・261では、4世紀中葉から後葉の塩釜式と北大I式土器が共伴しており(佐藤1992)、数ある共伴事例の中で格段に古い。ただし、同遺構の資料の中には本稿で言うⅡ群に相当する破片資料(41P-6・45P-27)も含まれることや、同じ宮城県内の仙台市鴻ノ巣遺跡SD26では後北C2-D式末(本稿Ⅱ群相当)と南小泉式期古段階の土器が共に出土している(工藤2004)など、北大I式の型式認定と年代観はなお検討を要する。

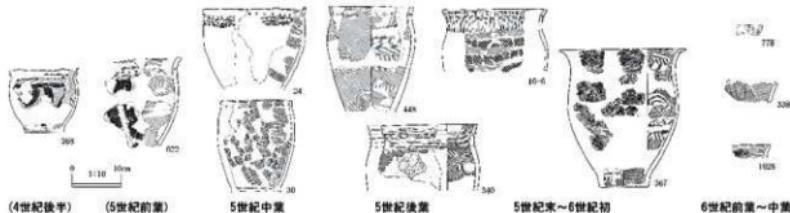


図13 八戸地域における統繩文土器の変遷

(3) 東北北部型土師器の誕生

ここまで、田向冷水遺跡の古墳集落においては、土師器が東北南部と連動して変化すること、統繩文土器もそれと呼応するように変化することを述べてきた。では、頸部に稜又は段をもち口縁部が強く長く外反する器形でミガキ調整が多用されるⅢ群土器の発生は、わち東北北部型土師器がどのように生まれたのかみてみたい。

まず、5世紀中葉以前では、在地集団が作ったとみられる八戸市佐ノ沢(3)遺跡SK257出土の617と、市子林遺跡SK15出土の29は、いずれも調整が難で厚手の擬似土師器坏である。これらは、東北南部以南の坏を見本とし模倣して作ったものと考えられ、モノの

交流によって在地の土器が変化し始めた模倣段階であることを示す。

次に、5世紀後葉I群土器の共伴例である、田向冷水遺跡SI44の北大I式土器深鉢448と土師器甕444は、胎土・器厚・調整がいずれも似通っており、同一人物が作ったのではないかとさえ思われるものである。また、5世紀末～6世紀初II群土器古段階の共伴例である、SI36の北大I式土器深鉢367と土師器甕366とでは、文様こそ異なるものの色調と器形は非常に良く似ている。

これらの事例は、模倣とか外部から持ち込まれたというより、人と人が直接交流したことによって生じた、融合の結果であると考えられる。

6世紀前葉II群土器新段階では、続縄文土器との共伴例を欠き詳らかではないが、土師器の長胴化がより一層進む。

6世紀中葉III群土器になると、それまで長頸化してきた北大式の深鉢と、長胴化した土師器とが合わさり、389・969のような東北北部型土師器が出現する。

また、細部を見ると、土師器甕482と内黒処理される甕383は、口唇部が角頭状を呈する点が全く同じであるだけでなく、口端部と頸部及び内面に赤彩する点まで共通する。このことからすると、長頸・長胴化に加えて、住社や舞台式に象徴される有稜有段の外反坏の作り方が、坏だけではなく甕の口縁部にも採用されることで、東北北部型土師器の出現を促したものと考えられる。

こうした黎明期の東北北部型土師器に類似するものは、北海道恵庭市カリンバ2遺跡、秋田県横手市田久保下遺跡、宮城県大崎市日光山古墳群(古川市2006※高橋誠明氏御教示による)など広範囲で認められている(註)。北大I式土器の分布圏内、特に東北北部では北大I式土器に替わる土器として定着していったものとみられる。

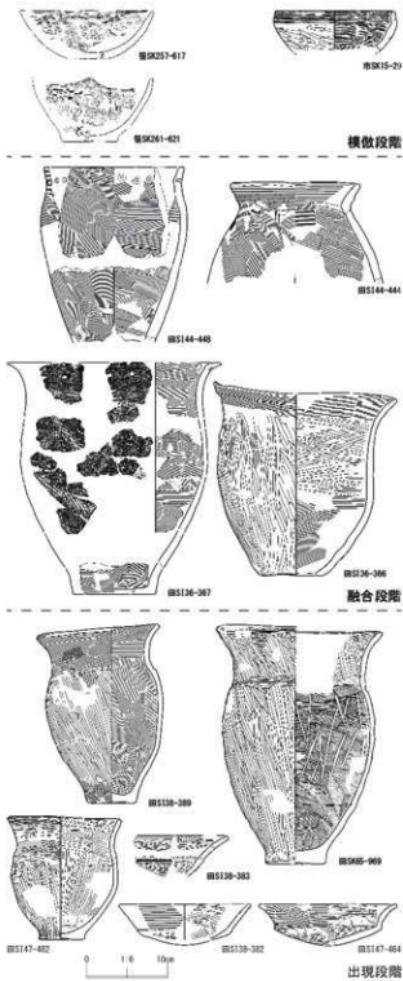


図14 東北北部型土器の誕生

3. 墓制

ここでは、古墳時代中期から後期の墓として、森ヶ沢遺跡と市子林遺跡の土坑墓、田向冷水遺跡の円形周溝に加え、墓坑の可能性がある笹ノ沢(3)遺跡例・田向冷水遺跡例、及び八戸城跡の土坑を取り上げ、八戸周辺の墓の変遷を概観する。

(1) 各遺跡の事例

| 番号 | 遺跡名 | 遺構名 | 時期 | 横幅cm 長×短 | 構造 平面形 | 付施設 | 出土遺物 | | | | 調査ID | その他 |
|----|--------|-------|-----------|--------------------|-----------|-----------------------------|--|----------------------------------|----|----------------|------------|------------|
| | | | | | | | 玉 | 鏡製品 | 刀劍 | 漆器 | | |
| 1 | 篠ノ沢(3) | SC221 | SC前後 | 68×42 31 | 円形 | H輪片1 | | | | | 川原石1 | |
| 2 | 篠ノ沢(3) | SC257 | SC前後 | 72×69 19 | 円形 | H輪片1 | | | | | 板谷自然遺1 | |
| 3 | 篠ノ沢(3) | SC261 | SC前後 | 85×75 25 | 楕円形 | H輪片+H輪片1 | | | | | 台石1, 自然遺13 | |
| 4 | 森ヶ沢 | 1号墓 | SC | 135×110 40 | 楕円形 | H輪P | ガラス小玉12, 日3.12.30 | | | | 6 | |
| 5 | 森ヶ沢 | 2号墓 | SC | 130×90 20 | 楕円形 | 不明 | 日3.2.26 | 銅鏡片5 | | | 11 | 1 罫1 |
| 6 | 森ヶ沢 | 3号墓 | SC | 125×90 20 | 楕円形 | H輪P | 日3.3 | 瓦金具1 | | | 6 | 網5 |
| 7 | 森ヶ沢 | 4号墓 | SC | 92×60 40 | 楕円形 | 鏡+柱P, H輪1, 7輪片(北大1) | 日3.2.6 | 刀子1 | | | 2 | |
| 8 | 森ヶ沢 | 45号墓 | SC | 108× 40 | 円形 | | 日3.3.20 | | | | | |
| 9 | 森ヶ沢 | 6号墓 | SC | 96×75 35 | 楕円形 | 鏡+柱P | | | | | 16 | |
| 10 | 森ヶ沢 | 8号墓 | SC | 90×87 40 | 円形 | | 日3.4.2 | | | | 2 | |
| 11 | 森ヶ沢 | 7号墓 | SC | 216×182 90 | 楕円形 | H輪P, H輪片1, 5高环片1 | ガラス豆1, 直口(1), 鏡片(1), 鏡片(2), 鏡片(3), 鏡片(4) | 刀子片1, 銅刀片1, 鏡片1, 鏡片2, 鏡片3, 鏡片4 | 29 | 1 罫1, 川原石1 | | |
| 12 | 森ヶ沢 | 8号墓 | SC | 102×84 45 | 楕円形 | H輪P, H輪片1, 5高环片1 | 日3.3.26 | 刀子片2 | | | 12 | |
| 13 | 森ヶ沢 | 9号墓 | SC | 172×130 75 | 楕円形 | H輪P, H輪片(北大1) | 日3.3.23 | 刀子片8, 鏡片8件16 | 30 | 川原石, 罫1 | | |
| 14 | 森ヶ沢 | 10号墓 | SC | 95×29 24 | 楕円形 | H輪P | 直口(1), 長石1, 直口(1) | 鏡片1, 長石1, 直口(1), 長石1, 直口(1), 長石1 | 16 | 1 罫1, 赤色土塊, 罫石 | | |
| 15 | 森ヶ沢 | 11号墓 | SC | 150×85 16 | 楕円形 | 不明 | 日3.3.23 | | | | 4 | |
| 16 | 森ヶ沢 | 12号墓 | SC | 145×106 60 | 楕円形 | H輪P | ガラス小玉1, 日3.3.10 | 刀子片2 | | | 12 | 1 罫9 |
| 17 | 森ヶ沢 | 13号墓 | SC | 39×70 20 | 楕円形 | H輪P, H高环片1 | 日3.3.20 | | | | | |
| 18 | 森ヶ沢 | 15号墓 | SC | 77×64 29 | 楕円形 | 鏡+柱P, H輪片1, 5高片1, 7口片(北大1) | ガラス小玉6, 日3.4.1 | 刀子1 | | | 29 | |
| 19 | 森ヶ沢 | 16号墓 | SC | 90× 20 | 円形 | | 日3.3.1 | | | | | 罫4 |
| 20 | 森ヶ沢 | 17号墓 | SC | 70× 12 | 円形 | | 日3.3.2 | | | | | |
| 21 | 森ヶ沢 | 18号墓 | SC | 80× 5 | 円形 | | 日3.3.18 | | | | 3 | |
| 22 | 森ヶ沢 | 19号墓 | SC | 50× 10 | 円形 | 不明 | | | | | | |
| 23 | 森ヶ沢 | 20号墓 | SC | 67×35 14 | 楕円形 | 鏡+柱P, H輪片1, 5高片1, 7口片(北大1) | | | | | | 1 罫1 |
| 24 | 森ヶ沢 | 21号墓 | SC | 280×180 100(推定) | 長方形 | | | | | | | 赤色顔料土塊 |
| 25 | 市子林 | SK30 | SC | 360×164 37 | 楕円形 | H輪P, H輪片(北大1 ?) | ガラス小玉1, 日3.3.20 | 小鏡1 | | | | |
| 26 | 市子林 | SK31 | SC | 147×106 34 | 楕円形 | H輪P, 2口片(1), 鏡片(1)(北大1) | 普3.3, 直口3.3, 直口3.6(2件), 鏡片1, 條状1 | | | | | |
| 27 | 市子林 | SK34 | SC | 112×110 34 | 円形 | H輪P, 2口片(1), 老人1(?) | 日3.2.7 | | | | | |
| 28 | 市子林 | SK35 | SC | 150×100 42 | 不規則円形 | H輪P(直口小窓+引田), 2口片(1)(北大1) | ガラス小玉3, 日3.3.17 | 銅鏡7 | | | | |
| 29 | 八戸城跡 | SK34 | SC(後葉) | 120×90×18 | 直角形 | 3盤1 | | | | | | |
| 30 | 田向冷水 | SK33 | SC(中葉) | 90×38 14 | 楕円形 | H輪片(1), 鏡片(1) | | | | | | 小鏡1 |
| 31 | 田向冷水 | SK34 | SC(中葉) | 83×74 18 | 円形 | H輪片1 | | | | | | 近面1, 罫2 |
| 32 | 田向冷水 | SK35 | (BC~前) | 72×26 10 | 円形 | | | | | | | (近江面)面3 |
| 34 | 田向冷水 | SK36 | (5~6C) | 81×70 11 | 楕円形 | H輪片1 | | | | | | |
| 35 | 田向冷水 | SK37 | (5~6C) | 65×7 7 | 楕円形 | H輪片(1), 鏡片(1) | | | | | | |
| 36 | 田向冷水 | SK38 | (5~6C) | 94×87 9 | 楕円形 | H輪片1(往社), 鏡片(1), 鏡片(1) | | | | | | 近江面上に面6 |
| 36 | 田向冷水 | SK39 | (5~6C) | 94×94 30 | 円形 | 近江道引(往社), 鏡片(1), 鏡片(1)(北大1) | | | | | | 小鏡5 |
| 37 | 田向冷水 | SK41 | (5~6C) | 90×88 12 | 円形 | 近江片1, 2, 鏡片(1)(北大1) | | | | | | 磨り鏡石1, 小鏡4 |
| 38 | 田向冷水 | SK42 | (5~6C) | 83×29 43 | 不規則円形 | H輪片1(往社~) | | | | | | 小鏡1 |
| 39 | 田向冷水 | SK43 | (5~6C) | 88×80 17 | 不規則円形 | H輪片1 | | | | | | 1 罫14 |
| 40 | 田向冷水 | SK45 | (5~6C) | 97×84 11 | 不規則円形 | | | | | | | |
| 41 | 田向冷水 | SK46 | (5~6C) | 92×89 12 | 不規則円形 | H輪片1(引田~往社) | | | | | | |
| 42 | 田向冷水 | SK48 | (5~6C) | 97×92 21 | 円形 | H輪片1 | | | | | | 鏡2 |
| 43 | 田向冷水 | SK49 | (6C~中葉) | 168×98 51 | 円形 | 近江引(引田~往社), 鏡片(1)(北大1) | | | | | | 小鏡2 |
| 44 | 田向冷水 | SK55 | (6C~中葉) | 185×48 44 | 直角形 | H輪片1(引田~往社), 鏡片(1) | | | | | | 鏡3 |
| 45 | 田向冷水 | SK56 | (5~6C) | 86×61 15 | 円形 | | | | | | | 鏡6石1 |
| 46 | 田向冷水 | SK57 | (4~6C) | 68×62 19 | 不規則円形 | | | | | | | |
| 47 | 田向冷水 | SK58 | (4~6C) | >71 20 | 楕円形 | | | | | | | |
| 48 | 田向冷水 | SK61 | (4~6C) | >76 14 | 楕円形 | | | | | | | |
| 49 | 田向冷水 | SK67 | (6C~中葉) | 86.6×81 20 | 不規則円形 | H輪片2(裏群) | | | | | | 小鏡3 |
| 50 | 田向冷水 | SK68 | (6C~中葉)以前 | 88×70 39 | 不規則円形 | H輪片1(引田~往社) | | | | | | 小鏡1, 罫1 |
| 51 | 田向冷水 | SK69 | (5~6C~BC) | 100×98 94 | 円形 | H輪片1(引田), 鏡片1(1~II面) | | | | | | 石鏡1, 罫1 |
| 52 | 田向冷水 | SK69 | (6C~中葉) | 99×82 23 | 円形 | | | | | | | 鏡4 |
| 53 | 田向冷水 | SK80B | (6C~中葉) | 84×75 17 | 不規則円形 | H輪片1(往社) | | | | | | 底面に鏡25 |
| 54 | 田向冷水 | SK815 | (6C~中葉) | 72×68 9 | 円形 | H輪片1(往社), 鏡片1 | | | | | | 小鏡23 |
| 55 | 田向冷水 | SK816 | (5~6C~BC) | 79.5×75 52 | 円形 | H輪片1(引田~往社), 鏡片1(1~II面) | | | | | | |
| 56 | 田向冷水 | SK817 | (5~6C~BC) | 80×76 48 | 円形 | H輪片1(引田~往社), 鏡片1(1~II面) | | | | | | ウバガイ, 罫8 |
| 57 | 田向冷水 | SK818 | (5~6C~BC) | 81.5×66 41 | 円形 | H輪片1(1~II面), 鏡片1(1~II面) | | | | | | 鏡613 |

表3 青森県内における古墳時代中期から後期の関係土坑墓・土坑一覧

笹ノ沢(3)遺跡: 3基検出され、周囲にある9基の土坑も同時期のものと推定されている（青森県2003）。平面形は円形基調で、規模は径0.7m前後である。続縄文土器の特徴を併せもった土師器壺・鉢・甕の破片が出土しており、5世紀前後のものと推定されている。ほかに黒曜石の剥片、台石、礫が伴う。

森ヶ沢遺跡(七戸町)・土坑墓: 20基が群集する。平面形は楕円形と円形の二種類があり、楕円形のものは長径0.7～2.2mと大きさには幅がある。円形のものは径1m前後の規模である。これらは、家族的なまとまりを単位とするいくつかのグループに分かれながら、10号墓を中心外周へと営まれ、墓の規模と出土品の多寡に相関関係が認められている（阿部2008）。半数を超す12基に袋状ピットが、さらにその中の4基には柱穴状ピットも付属する。遺物は、土師器、須恵器、北大I式土器、鉄製品、黒曜石、多量の石製玉類などが出土している。阿部の報告では、5世紀中葉以前に納まる土坑墓群であるとしている。

木棺土坑墓: 1基検出（21号）。土坑と木棺とともに長方形で、掘方の上面規模は長軸2.1m×短軸0.95m、木棺は長軸1.8m×短軸0.7mの規模である。先行する楕円形・円形土坑墓群の系譜をひく、6世紀代のものとされている（阿部2008）。

市子林遺跡: 4基検出。平面形は楕円形と円形の二種類があり、それぞれ長径1.5m、径1.1mの規模である。全てに袋状ピットが付属し、主軸方向から2基1対で配置されたものとみられ、SK11と15の組の方が厚葬である。石製白玉を中心に管玉、ガラス玉、鐵鑓、鉄釧などが副葬されている。土器は前述したように、北大I式深鉢、壺形土器、擬似土師器壺が出土している。

八戸城跡: 1基検出。平面形は隅丸長方形で、長軸1.4m程度の規模である。TK208段階の須恵器が出土しており、5世紀後葉のものとみられる。周辺からは土師器壺、黒曜石製石器も出土しているが、続縄文土器はみつかっていない。

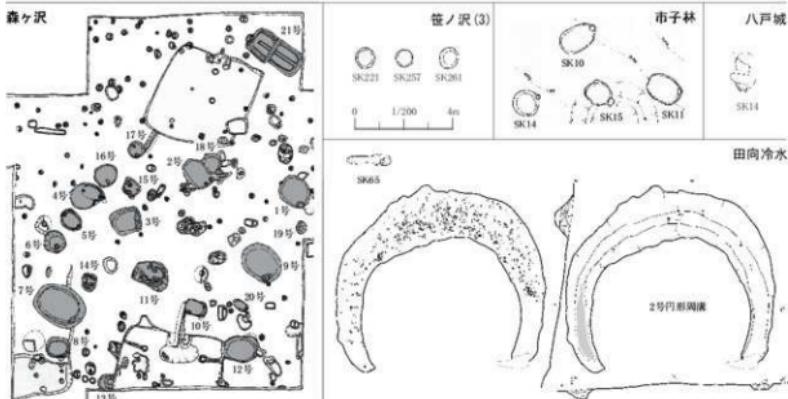


図15 土坑墓・土坑集成

田向冷水遺跡・土坑：27基検出。三箇所に分かれ、それぞれで群集する。26基は円形を基調とし、径0.9m前後、深さ平均25cmの規模である。大半が埋め戻され、18基の土坑に礫が伴う。礫は、底面から數十cm上にかけて検出されており、後世に削平を受けた浅い土坑にも礫が伴っていた可能性がある。土師器壺・甕、続縄文土器深鉢、黒曜石剥片などが出土している。5世紀後葉のものは少なく、堅穴建物跡が無くなった後の6世紀中葉のものが多い。長楕円形のものとして唯一検出されたSK65は、長軸約1.9mの規模を有し、ほぼ完形の土師器甕(図5の58)が坑底直上から出土している。

円形周溝：1基検出、削平を受けていたため本来の平面形と開口部の有無は不明。規模は、外径約9m、溝幅約0.9～2.3m、深さ11～81cmである。周溝の底面は、壁上面の比高差約1.4mに対し0.3mほどしかなく、平坦に近く整えてある。周溝から総数613点の礫が検出され、本来は盛土と葺石がされた円墳と推定された。石材は近くの河川敷で一般的にみられるものであり、遺跡周辺から採取したものと考えられる。溝からIII群期の土師器甕、北大I式土器の深鉢、須恵器壺類、黒曜石製石器などが出土している。埋葬施設の検出を欠くため断定できないが、堅穴建物跡が存続した時間幅(5世紀後葉～6世紀前葉)の中でも、その終わりに近い時期に構築されたものと考えている。

(2) 円形土坑から木棺土坑へ

森ヶ沢例は、核となる墓坑を中心に展開する。そして、袋状ピットなどが付属する森ヶ沢・市子林例では、大小異なる規模あるいは楕円形と円形のものがセットになる。核となる墓坑は社会的地位を示し、セット間の規格の違いは家族関係や葬方の違いを表すのかもしれない。これらは続縄文文化の所産である。

複数から成る椎ノ沢(3)例と三箇所に分かれて群集する田向冷水例は、これまで的一般的な理解に従えば、礫を伴う墓坑であった可能性がある。これらも続縄文文化の所産であるが、森ヶ沢例などと異なり規格に大きな違いを認めず概ね小型である。田向冷水例については、古墳社会との交流・接触によって、社会的地位や家族関係に何らかの変化が生じ、ある制約の中で均一な規格の円形土坑となったのかもしれない。

今のところ単独で検出されているのが、八戸城・田向冷水2号円形周溝とSK65・森ヶ沢21号墓である。八戸城例は、5世紀後葉段階で隅丸長方形の土坑であること、遺跡内全体で未だ続縄文土器を見ないことなど、他の遺跡と比べ異質な部分があり、土坑の性格を特定するのは難しい。古墳文化側の所産であるとみておきたい。

田向冷水遺跡においては、円形土坑と同時存在した円墳の2号円形周溝の段階を経て、長軸約1.9mの規模を有する長楕円形の土坑SK65が築かれる。そこには、東北北部型土師器の甕が納められた。本遺構の担い手は、古墳でも、続縄文でもなく、東北北部型土師器を作り使った、その人である。さらに同じころ、森ヶ沢に木棺土坑墓が築かれる。森ヶ沢21号墓は、末期古墳出現直前の7世紀初め頃に築かれた、おいらせ町阿光坊遺跡2号土墳へとつながる可能性を示すものとして重要である(註)。

4. 南北交流と境界

(1) 南の要素と北の要素

田向冷水遺跡に残された各種遺構・遺物の特徴は、東北南部のものと共通する点が多い。例えばカマド付きの竪穴では、間仕切り溝をもつ例として福島県中通り地方の正直A・清水内・白山A遺跡、宮城県仙台平野の南小泉・鴻ノ巣遺跡などが類例として挙げられている(宇部2015)。石製模造品も同地域との関係が認められ、特に赤褐色胎土の土師器は福島県内の土器との類似性が強い。円墳は古墳文化に広く認められるものであり類似地域の特定はできないが、一定量出土している須恵器を模倣した壺にいたっては、関東地方との関係さえもうかがえる。こうしたことから、田向冷水遺跡に古墳文化の足跡を残したのは、東北南部からの移民であった蓋然性が高い。

その一方で、北の要素は在地の文化として定着していた続縄文土器、黒曜石製石器、方割石、礫を伴う土坑に限定される。直接北からもたらされたものとしては、数点の黒曜石とその可能性のある市子林遺跡の壺形土器しかなく、古墳側の文物に対して続縄文側の文物が余りにも少ない。このことは、続縄文側である北の世界からもたらされたものが、遺跡に残りにくい有機物だったことを示してはいないだろうか。

ところで、黒曜石の産地の8割が、伊治城跡から南西約30km(図17参照)にある宮城県湯の倉産であることは先に述べた。これは、田向冷水遺跡から見れば南からの産物となる。宮城県北部の大崎平野は、古墳が比較的安定して造られた古墳文化圏内であり、湯の倉はその近傍に位置する。大崎平野以北の古墳時代の状況を、「古墳社会」・「古墳系グループ」・「続縄文系グループ」に分けその関係を整理した高橋誠明氏は、三者が隔絶状態なく相互に交流していた様子を明らかにした(高橋2014)。その中で、古墳時代中期後半の大崎地方を「皮革製品の生産用具や続縄文系グループが祭祀儀礼で必要とした黒曜石の供給基地としての役割を果たした」と位置付け、続縄文系グループとの協働が認められる古墳社会の集落である名生館官衙遺跡や、続縄文系グループが残した木戸脇裏遺跡などで黒曜石の素材生産が行われた後、他へ搬出された可能性を指摘している。

つまり、この時期の湯の倉の黒曜石は、続縄文人同士の流通だけでなく、一旦古墳社会に取り込まれ、相互交流の認められる中半入遺跡や田向冷水遺跡などに供給されていたものとみられる。

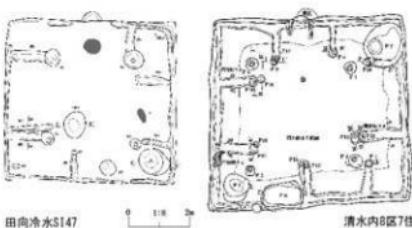


図16 共通する住居構造の一例

(2) 境界と辺境

さて、図17に古墳文化圏の範囲と、時代の下降とともに北上する続縄文土器の分布境界を示した。これを見ると、いかに田向冷水遺跡が飛び地的に存在するか分かる。ただし近年の調査例では、岩手県沿岸北部の久慈市新町遺跡から5世紀前半のカマドを伴わない堅穴建物が発見されており、田向冷水遺跡よりも前の段階で、玉の原材料として琥珀を求めた古墳社会の進出があったものと考えられている（米田ほか2009）。この事例は、特定の資源を産出する場所への進出ということで理解し易い。

ではなぜ八戸の田向冷水だったのだろうか。図17には6世紀半ばまでに施行された国造制の範囲などから推定される、ヤマト政権の北限を示した。当時は、新潟平野－米沢盆地－仙台平野を結んだ線以北に居住する人々は蝦夷とされ（熊谷2004）、同地はヤマト政権下の中央の人々から辺境とみなされていた。その後9世紀初頭にかけて次々と城柵が設置され、北に向けて拡大した古代国家による直接的な蝦夷支配は、志波城と秋田城を結ぶラインまで達する。馬淵川以北に位置する八戸は、古代を通して律合体制に組み込まれることがなく、間接的な支配関係にとどまった。このような経過をたどった地域に位置するのが田向冷水遺跡である。

八戸は、「海から拓けたまち」と形容され、海路・陸路ともに交通の要衝であり、様々な物資が集積する土地である。このような状況は、各時代の遺跡からも看取できることであり、田向冷水遺跡も例外ではない。古墳集落としては小規模ながら、続縄文集団の墓の可能性のある土坑26基と続縄文土器52個体という数は、本州島内の同時期の遺跡に比べ圧倒的に多い。つまり、本州続縄文集団の中で、田向冷水は交易・交流の拠点的な場所だったのではないかと考えられる。

青森県の下北半島では、大間遺跡、大平(4)遺跡、浜尻屋遺跡から、北大I式土器や、6世紀の土師器・須恵器がみつかっている。皮革生産の原料となる海獣の皮を含めた北海道島からの産物は、一度下北を経由して下北地方の産物とともに八戸へと運ばれたのではないだろうか。その途中に位置する森ヶ沢遺跡もまた、続縄文の遺跡としては規模が大きく、津軽方面をも含めた交易の拠点だった可能性がある。田向冷水の続縄文集団は、土坑の分布状況からみて複数の



図17 古代蝦夷の世界

系統が居たものと考えられ、皮革加工を中心とする交易品の生産に携わる者、産物の交易・運搬に係る者、日常生活に係る生業活動に従事する者などが存在したのかもしれない。

おわりに

筆者は以前、田向冷水遺跡を「在地独自の文化、続縄文文化、古墳文化それぞれの特徴がみられ、古墳時代の本州北縁域における文化の多様性を示す」遺跡と位置付け(小保内2018)、皮革製品という古墳社会からの需要の高まりに応えるために出現し、手工業生産が行われていた集落であるとした(小保内2006)。その具合的な内容はこれまで累々述べてきたが、今回は北からの視点と、南からの視点に分けて考えてみた。

古墳側の社会は、彼らから見れば辺境である東北北部に、皮革を入手するため東北南部の人々を移民させ、続縄文人と協働で加工を行うだけでなく、周辺に散在する続縄文集団と、そこで加工される皮革の掌握にも努めたことであろう。田向冷水遺跡は、このようなハイブリッドタイプの集落として現在最北に位置し、古墳時代中期から後期にかけての本州北部におけるフロンティアラインであった。

一方、続縄文側の社会から田向冷水を見た場合、続縄文文化圏内の南端ではなくむしろ中心近くに位置しており(図1参照)、古墳社会の進出を受容しつつ、北海道島に対峙する下北半島が中継点となって、続縄文集団の交易拠点となったものと考えられる。

これら古墳と続縄文の社会に、極端な緊張関係や殺戮などの痕跡があったことを示す遺構・遺物は今のところ発見されていない。つまり、西部開拓における先住民に対する侵略のようなものはなく、古墳と続縄文社会は、互いに補完し合う関係で結ばれていたのだろう。しかしながら、工房的性格が強く、皮革加工を專業とした田向冷水遺跡の出現は、自然発生的なものではなく、東北南部以南の首長層による関与を想定しなくてはならない。田向冷水に暮らし皮革生産を担った集団の族長が誰であるのか、その系譜をたどることが今後の課題である。

最後に、本稿は筆者が以前墓制を中心にまとめた小稿(2018)に、交易等の検討を加えて作成したものであることをお断りしておく。また、本稿作成にあたり宇部則保氏、室野秀文氏、横須賀倫達氏に貴重なご教示とご意見をいただいた。記して謝意を表したい。

註

東北北部型土師器の類例の一つに、岩手県盛岡市上田蝦夷森古墳群第1号墳に副葬された土師器甕があり、7世紀前半から中葉のものと報告されている(室野ほか1997)。口縁部の外反が若干弱いものの、柱状の底部・胴部の丸みと頸部の絞り具合・口縁端部の角処理など共通点が多く、筆者は6世紀代に遡る可能性が高いとみている。

共伴した横矧板紙留式衝角付甕については、型式学的にTK217(7世紀前葉)以降とされ(横須賀2009)、地方生産品であればTK209(6世紀末～7世紀初)まで遡る可能性がなくはないという(横須賀倫達氏御教示)。

このように1号墳の甕と甕は、共に年代を通り得る可能性があり、岩崎台地遺跡群の末期古墳と同じかそれよりも古いものであることを暗示する。

引用参考文献

- 青山博樹 1999「古墳時代中～後期の土器編年—福島県中通り地方南部を中心に—」『福島考古』第40号記念号
- 阿部義平編 2008「森ヶ沢遺跡発掘調査報告（上）』『国立歴史民俗博物館研究報告』第143集
- 阿部義平編 2008「森ヶ沢遺跡発掘調査報告（下）』『国立歴史民俗博物館研究報告』第144集
- 五十嵐康洋 1998『南小泉遺跡 第26次調査報告書』仙台市文化財調査報告書第225集
- 上屋真一・藤田光一 1987『カリンバ2遺跡』北海道恵庭市発掘調査報告書
- 宇部則保ほか 2001『田向冷水遺跡I』八戸遺跡調査会埋蔵文化財調査報告書第1集
- 宇部則保ほか 2002『八戸城跡II』八戸遺跡調査会埋蔵文化財調査報告書第3集
- 宇部則保ほか 2011『田向冷水遺跡IV』八戸市埋蔵文化財調査報告書第129集
- 宇部則保 2015「北三陸の古墳時代集落から古代集落変遷への展望」『考古学ジャーナル』No.669
- 大野亨 2004「市子林遺跡第6次C地点」『八戸市内遺跡発掘調査報告書18』八戸市埋蔵文化財調査報告書第102集
- 大庭脩ほか 1997『「あつれき」と「交流」—古代律令国家とみちのくの文化—』大阪府立近づ飛鳥博物館
- 小保内裕之ほか 2006『田向冷水遺跡II』八戸市埋蔵文化財調査報告書第113集
- 小保内裕之 2018『八戸周辺の古墳時代』『北辺域における古墳時代前期～中期の変革』岩手考古学会第50回研究大会
- 菊池俊彦 1998『サハリーン出土の鉢谷式土器』『時の紳』石附喜三男先生を偲ぶ「道を辿る」
- 木村高 2011「二 古墳時代並行期の北方文化 東北地方の続縄文文化』『講座日本の考古学7 古墳時代（上）』
- 工藤竹久 1999『東通村誌・遺跡発掘調査報告書編一』東通村教育委員会
- 工藤竹久 2001『第1章第5節「古墳時代と続縄文文化』』『東通村誌（歴史編I）』東通村教育委員会
- 工藤哲司 2004『酒ノ堀遺跡 第7次調査報告書』仙台市文化財調査報告書第280集
- 熊谷公男 2004『蝦夷の地と古代国家』山川出版社
- 熊谷公男編 2015『蝦夷と城柵の時代』東北の古代史3 吉川弘文館
- 小谷地翠 2007『阿光坊古墳群発掘調査報告書』おいらせ町埋蔵文化財調査報告書第1集
- 佐久間正明 1996『环形土器の共通性から見た「舞台式」と周辺土器群との関係』『法政考古学』第22集
- 佐藤則之 1992『伊治城跡』築館町文化財調査報告書第5集
- 財団法人郡山市埋蔵文化財発掘調査事業団『清水内遺跡-6・8・9区調査報告』第1冊 郡山市教育委員会
- 鈴木信 2011「二 古墳時代並行期の北方文化 北海道の続縄文文化』『講座日本の考古学7 古墳時代（上）』
- 鈴木琢也 2012「北海道における3～9世紀の土壙墓と末期古墳」『北方島文化研究』10号 北方島文化研究会編
- 高橋学ほか 1992「田久保下遺跡」『秋田ふるさと村（仮称）建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書』秋田県文化財調査報告書第220集
- 高木晃ほか 2002『中半入遺跡・蝦夷塚古墳発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第380集
- 高橋誠明 2014「古墳築造周縁域の地域社会の動向」『古墳と続縄文文化』東北・関東前方後円墳研究会編
- 種市幸生ほか 1997『香深井5遺跡発掘調査報告書』北海道礼文町教育委員会
- 中村哲也ほか 2003『塙ノ沢（3）遺跡III』青森県埋蔵文化財調査報告書第346集
- 藤沢教編 2015『倭国の形成と東北』東北の古代史2 吉川弘文館
- 藤沢教 2018「弥生時代後期から古墳時代の北海道・東北地方における考古学的文化の分布」『国立歴史民俗博物館研究報告』第211集
- 古川市 2006『古川市史 第6巻 資料I 考古』
- 船場昌子ほか 2008『田向冷水遺跡III』八戸市埋蔵文化財調査報告書第118集』
- 室野秀文ほか 1997『上田蝦夷森古墳群 大田蝦夷森古墳群発掘調査報告書』盛岡市教育委員会
- 山内幹夫ほか 1994「正直A遺跡」『母畑地区遺跡発掘調査報告書34』福島県教育委員会・（財）福島県文化センター
- 横須賀倫達 2009「後期型鉄冑の系統と系譜」『考古学ジャーナル』No.581 ニューサイエンス社
- 米田寛ほか 2009『新町遺跡』『平成20年度発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第546集

秋田県の古墳文化と縄繩文文化（再考）

島田 祐悦（横手市教育委員会）

はじめに

昨年度、滝沢市埋蔵文化財センター開館20周年講演会において、弊職は横手盆地の古墳文化を中心として資料を作成したが、縄繩文文化の遺跡は主要遺跡を提示しただけであった（文献①）。講演会はコロナ禍により残念ながら中止となったが、本年度も同講師陣と発表を得る機会を頂いたことから、秋田県の縄繩文時代遺跡の全面的な見直し作業を行った。その結果、縄繩文時代に関連する遺跡が弥生時代後期から古墳時代までの間に確認され、その数が72遺跡であったことがわかったのである。

秋田県の弥生時代後期と縄繩文時代は、1989年に小林克氏と児玉准氏が秋田県の23遺跡の集成と土器研究の現状と課題をまとめているが（文献②）、約30年たった現在でも、遺跡数が増加しているにも関わらず年代を検討し得る共伴資料はほとんどなく当時は状況は変わっていないと思われる。それに対し、同じく断片的であった古墳時代（文化）の遺跡は、2010年代以降に横手市で相次いで発見され、発掘調査によって良好な資料が蓄積し、住居形態や土器型式を見通せるようになったのは、昨年度の報告のとおりである。

1. 秋田県の弥生時代後期から古墳時代（縄繩文時代）の遺跡【図1、表1】

「秋田県の古墳文化と縄繩文文化」というタイトルは、異なる文化を理解する上ではわかりやすいが、実はそう単純ではない。本州の歴史区分に当てはめれば、縄繩文時代は縄文晩期から飛鳥時代頃までの範疇であるが、秋田県で確認されている縄繩文時代の遺跡は、弥生時代後期から古墳時代となる。文献②段階では、弥生土器が18遺跡・縄繩文土器（後北Cと記述）が5遺跡の計23遺跡が示されたが、今回の集成では、弥生後期文化が23遺跡・縄繩文文化（後北C2・D式）が14遺跡・弥生と縄繩文の両文化が18遺跡・古墳文化が13遺跡・古墳と縄繩文（北大I式・在地系土器）の両文化が4遺跡の計72遺跡となつた。

遺跡の分布は、表1から米代川流域・日本海沿岸域・雄物川流域で確認されているが、米代川流域が特に密度が濃く、子吉川流域では宮崎遺跡があるのみである。高速道路など開発行為に伴う発掘調査は全県的に行われている今日であるが、やはり米代川流域が多いのは秋田県内陸北部という地理的原因もあるのであろう。さらに細かく見ていくば、弥生時代後期と縄繩文時代の遺跡は近距離でまとまっており、双方の土器が出土している例からも、弥生文化と縄繩文文化が深く関わっていたとみられ、72遺跡中55遺跡がそうであるように、包括された文化圏を形成していたことが想定される。これら遺跡の立地は、盆地内沖積地に展開する例はなく、低丘陵緩斜面・小河川沿いの段丘上や台地にあり、稲作には適していない土地であろうことから、稲作の受容を弥生時代（文化）というならば、これら遺跡から出土する土器は、弥生土器ではなく縄繩文土器となり、秋田県では弥生時代といつても縄繩文時代といった方が良いのかもしれない。

古墳文化の13遺跡は、八郎潟周辺・秋田平野・横手盆地など沖積地内に立地する。横手盆地では、沖積地内の小河川沿いにある程度広い自然堤防上に遺跡が展開しており、遺構は堅穴建物跡や掘立柱建物跡が確認されている。古墳時代の水田跡は確認されていないが、古代の水田跡は大見内遺跡などで検出されており

（文献③）、稲作に適した土地を選択した可能性が高いと思われる。これら遺跡から出土した土器は、全国的に斎一性のある形態であり、当時、秋田県にいた在地住人が古墳文化を受容したというよりも、南の古墳文化の移民によるものと解した方が良いと思われる。

古墳文化と縄繩文文化の遺跡としたものは、宮崎遺跡・田久保下遺跡・郷土館B遺跡・候后阪遺跡の4遺跡である。宮崎遺跡は砂丘地にあるが、この地は西目潟隣接地で、往時は日本海に面した八郎潟周辺の遺跡と同様に、ラグーンを海上交通による交易拠点として遺跡が立地した可能性が指摘されている（文献④）。宮崎遺跡は古墳文化の集落であるが、縄繩文土器の北大I式が出土した県内唯一の遺跡である。田久保下遺跡

は、続縄文文化の土坑墓に古墳文化の土師器や在地系土器が埋納されているもので、郷土館B遺跡・侯后阪遺跡は遺構こそ明確ではないが、遺跡が低丘陵に立地することや古式須恵器や土師器（壺・甕）の出土などから、田久保下遺跡のように土坑墓の可能性も高いと思われる。

3. 秋田県の弥生時代後期から古墳時代（続縄文時代）の土器型式【表2.3】

(1) 弥生時代と続縄文時代の土器型式

秋田県における弥生時代の時期区分と土器型式は、表2のように児玉準氏と根岸洋氏によって提示され（文献12.35）、児玉氏の弥生時代後期の土器型式は、天王山式期から小坂X式・後北C2式の流れである。これら特徴を文献②から引用すると、秋田県の天王山式土器の特徴は、交互刺突文と磨消縄文手法を伴う籠描沈線文を伴うものと伴わないものがあり、前者は天王山式の範囲、後者は標識資料がないものとのことから、在地系土器の天王山式並行期として捉えておく。

天王山式の後には、付加条縄文（撲糸文）と帶状に施文された細縄文が特徴の小坂X式となると推測し、これは岩手県での赤穴式、青森県での鳥海山式に理解される土器群とされる。寒川II遺跡では、特殊な器形の小坂X式土器と後北C2式土器、及び有段口縁の無文鉢型土器の共伴が第2土坑墓で確認されているが、確実な共伴は現在もこの一例のみである。重要な指摘として、後北C2式土器は交互刺突文を特徴とする土器との関係は、その後の小坂X式との関係に比べ希薄ではないかと述べている。

表3は、鈴木信氏が作成したもので、東北北部と北海道（道南・道央）の時期区分と土器型式である（鈴木2021）。これには、弥生時代後期から飛鳥時代と続縄文時代中葉から後葉の並行関係が示されている。東北北部の弥生時代後期中葉と後北C1式が、弥生時代後期後葉の赤穴式から古墳時代前期前半までの赤穴式/塗釜式と後北C2・D式（古・中）が並行関係となっていることを注目し、次項で引用したい。

(2) 秋田県の弥生時代後期から古墳時代（続縄文時代）の土器型式（試案）【表4、図2~14】

これらを参考として、図2から図14まで提示した土器を検討し、表4に秋田県の弥生時代後期から古墳時代（続縄文時代）の主要遺跡と土器型式の試案を作成した。これは、あくまで試案なので参考程度として欲しい。なぜなら、今回は資料集成と土器形態から見た現時点の見通しであり、今後、土器を詳細に観察して、認識や精度を高めていく必要があるからである。

弥生時代後期は、内陸北部の米代川流域・日本海沿岸域・内陸南部の雄物川流域のいずれも同様の土器型式で推移していると思われる。

後期前葉は、天王山式で、米代川流域が尾樽部（5.6.12）・大岱I（2）・大岱III（1.4）、日本海沿岸域が大倉（9~13）・松木台（48）・片野I（39~42）、雄物川流域が中沢（1~4）・上野台X（4）などがある。雄物川流域に天王山式と認められるものが多く、米代川流域では天王山式並行期資料が多いと思われる。

後期中葉は、小坂X式古相と後北C1式並行期の2型式が考えられる。文献②でいう付加縄文と沈線文が併用される一群が小坂X式古相の可能性もある。米代川流域の大岱III（13~15）・はりま館（55）は、撲糸文が土器全体に緻密にあり、頸部は磨消縄文手法を施す。はりま館（51）や案内III（1）は口縁部文様帯が連続・重層する菱形・三角形のモチーフを描いている。次に後北C1式並行期であるが、米代川流域では尾樽部（15）と天戸森（238）、日本海沿岸域では片野I（52）、雄物川流域では和田（28）がそれに該当する。後北C1式と施文方法は異なるが、特徴的な文様モチーフが類似している。さらに秋田県内ではこの段階で後北C1式は確認されておらず（雄物川流域の下田遺跡に後北C1式と類似と書かれるが特徴を見出せない）、後北C1式並行期土器が在地系土器として並行関係であった可能性もある。

弥生時代後期後葉から古墳時代前期前半は、小坂X式期新相（赤穴式並行期）と後北C2・D式の2型式が考えられる。小坂X式新相は付加縄文が徐々に省略され無文へと進み、深鉢の口縁部が緩く外傾または外反し、土師器でいう壺型になっていくのだろうか。米代川流域では、大岱II（1）・はりま館（126.131）・台地

平(54)、日本海沿岸域では寒川II第2号土坑墓(1.2)・雄物川流域では石坂台II(6)・上祭沢(53)・和田(25~27)・トクラ(3.4)などが上記形態に該当しそうである。後北C2・D式は、米代川流域が、曙岱(1~12)・寺の沢I・大岱III(下段1~19)・はりま館(177)・物見坂III(114~119)、案内VI(92~101)・片山館コ(1~7)・川口十三森(74~77)、日本海沿岸域が、寒川II(2~6号土坑墓)・雄物川流域が、石坂台VII(1~7)・川端山III(7~12)などで、資料が多いのも太平洋側の岩手県北部と共通する(文献⑤)。雄物川上流域まで確認されるが、米代川流域が圧倒的に多く、日本海沿岸部というより内陸の山間部にその広がりがあるように思われる。木村高氏は、寒川II遺跡出土の後北C2・D式の年代を北陸・漆町編年6~8群、塙釜式では辯慶年のI~2期~III~1期(3世紀前半~4世紀前葉頃)と推察している(文献29)。

古墳時代は、各地域によって異なる様相となる。前期後半になると県内全域で遺跡が消滅するが、唯一日本海沿岸域南部の宮崎遺跡では塙型式並行期の器台1点と能登瓈3点が表探されている(文献47)。近隣の井岡遺跡では子持勾玉が確認されており、日本海沿岸域南部の子吉川下流域までは古墳文化が北上してきた可能性はあるが、様相はまだわからないのが実情で、このような状況は古墳時代中期前半まで続く。

中期後半には、突如として雄物川流域上流域と日本海沿岸域南部に古墳文化の集落が展開する。定型化された土師器の形態は、全国の古墳文化の中にこの地域が包括されていったことを物語るが、米代川流域や日本海沿岸域北部までは到達していなかったと現状では考えざるを得ない。土師器はこれまで太平洋側の南小泉式と考えられてきたが、高壺の量や瓈底部が自立しない丸底など土器形態や堅穴建物跡にカマドが付されていないなどの構造から、北陸の古墳文化と共通することが多いことが想定された(漆町編年13群新段階・引田式並行期)。しかし、これらの古墳文化は長続きせず、中期後半という枠組みの中で消滅する。

古墳時代後期から飛鳥時代前半の集落遺跡は現在のところ確認されていない。土坑墓は雄物川上流域の田久保下遺跡で、郷土館B遺跡や米代川下流の候后阪遺跡が可能性を含む。雄物川上流域の中藤根遺跡では住社式の大小の壺が出土し、沖積地内という遺跡立地から集落の可能性がある。前述のように、田久保下遺跡では続縄文文化の所産である土坑墓に、古墳文化の土師器や須恵器が埋葬されていた。土師器の壺・塊類は太平洋側の住社式であるが、土師器の壺・瓈の形態は類例が少なく、在地系土器の可能性もある。日本海沿岸域南部の宮崎遺跡で北大I式が確認された以降、続縄文土器が県内では確認されておらず、太平洋側では岩手県内陸南部まで多く確認されるのとは状況が異なっている(文献⑤)。小保内裕之氏は、北大I式と土師器が融合し、東北北部型土師器が6世紀中葉に出現したのではないかと指摘しており(文献⑥)、田久保下遺跡をはじめとする郷土館B遺跡・候后阪遺跡の壺・瓈は、融合した在地系土器とも考えられそうである。田久保下遺跡のSK317土坑墓の土器は、飛鳥時代前期の栗団式で、在地系土器は確認されていない。

飛鳥時代後期は、再び各地域で集落が確認され始めるが圧倒的に雄物川上流域が多い。これら集落から出土する土師器は栗団式並行期の在地土器だが、東北北部型土師器の範疇でも良いかと思われる。7世紀前半の土坑墓から、奈良時代中葉の蝦夷塚古墳群などの末期古墳が確認されるまで100年の時間を有しているが、土坑墓から末期古墳の移行も、続縄文文化から前代より形成してきた東北北部型土器(文化)への移行の可能性があり、この担い手(在地住人)が、「蝦夷」といわれる人々となり、奈良時代の『続日本紀』にみられる歴史舞台に登場していくのであろう。

資料作成にあたり、小林克氏からはご教示・ご指導をいただきました。また、秋田県埋蔵文化財センター高橋和成氏、大館市教育委員会島影社憲氏、美郷町教育委員会山形博康氏より資料や情報提供をいただきました。記して感謝申し上げます。

[引用文献] *文献1,2などのアラビア数字のものや、その他は表2,3に提示している。文献①島田祐徳2020「秋田県の古墳文化と続縄文文化」『土器と墓制から見た北東北の続縄文化』滝沢市埋蔵文化財センター開館20周年記念講演会資料/文献②小林克・児玉準1990「秋田県における天王山式壺の現状と課題」『天王山式壺をめぐって』の検討会記録集/文献③高橋直樹2005「大見内遺跡・船野遺跡」秋田県文化財調査報告書第386集/文献④滝沢沢「古墳時代から飛鳥・奈良時代にかけての東北地方日本海側の様相」『国立歴史民俗博物館研究報告第179集』/文献⑤井上雅孝2021「岩手県における続縄文文化の土器と墓制」『土器と墓制から見た北東北の続縄文化』/文献⑥小保内裕之2021「古墳時代中期のフロンティアライン」『土器と墓制から見た北東北の続縄文化』

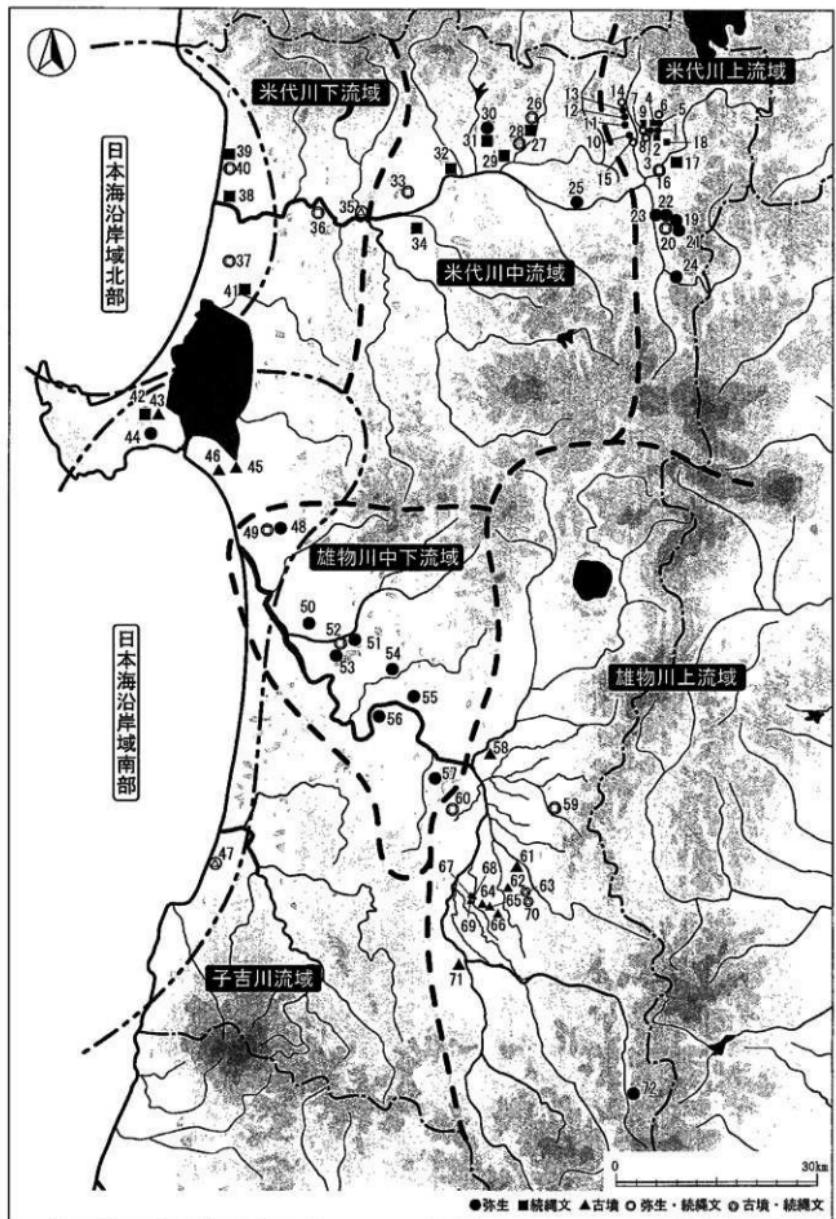


図1 弥生時代後期から古墳時代（続縄文時代）の遺跡位置図

表1 秋田県の弥生時代後期から古墳時代（統繩文時代）の遺跡一覧

| 順 | 遺跡名 | 組い手 | 水系 | 立地 | 所在地 | 土器（時期）・種別 | 引用文献・参考文献（文献番号） | |
|----|---------------------------|---------------|------------|-------------|------------------|---|--|---|
| 1 | 尾岱遺跡 【発掘】 | 弥生文化 | 米代川 上流域 | 薄田い 段丘上 | 小坂町小坂鼠山 字尾神部 | 弥生土器（後期：天王山（北方）式）と文献 13、文献2の小坂C-F式」「黒落葉（石 頭型）」。アメリカ石器・土製鉄錐等）+文 獻12.2.4での内の空透跡。3の野水池西 側。 | L山陽 - 安保彰1963「十和田湖西南部小坂鼠山の弥生式文化と 其の後続形態」『考古学雑誌』日本考古学会編/2.鹿良修介・斎島 信1967「秋田県の考古学」吉川弘文館/3.安保彰1975「弥生式土器 （統繩文式土器）」「小坂町史」/4.小林宏・児玉重1990「秋 田県における天王山式期の現状と課題」「天王山式をめぐつ て」の検討会「弥生時代研究会 | |
| 2 | 尾岱遺跡 | 統繩文文化 | 米代川 上流域 | 低丘陵 | 小坂町小坂鼠山 尾瀬原76 | 統繩文土器（後北C2-D式）/遺物包含地 | 3.安保彰1975「弥生式土器（統繩文式土器）」「小坂町史」 | |
| 3 | からみ山遺跡 | 弥生文化 | 米代川 上流域 | 低丘陵 | 小坂町小坂鼠山 字尾神部 | 弥生土器（後期：小坂町特有の特殊捺文式 の土器から小坂X式とされる）/遺物包含地 | 3.安保彰1975「弥生式土器（統繩文式土器）」「小坂町史」 | |
| 4 | 内の岱 野水池遺跡 | 統繩文文化 | 米代川 上流域 | 台地 | 小坂町小坂鼠山 宇尾峰跡 | 統繩文式（小・中型）/遺物包含地 | 4.秋田県教育委員会2000「秋田県遺跡地図（鹿角地区版）」に統 繩文土器と記載。 | |
| 5 | 内の岱 火薬庫跡遺跡 | 弥生文化 | 米代川 上流域 | 台地 | 小坂町小坂鼠山 | 弥生土器（後期天王山式を初めて確認と記 載される）、統繩文式B式 | 5.安保彰1975「弥生式土器（統繩文式土器）」「小坂町史」 | |
| 6 | 内の岱北方遺跡 【旧火薬庫北方 遺跡】 | 弥生文化 統繩文文化 | 米代川 上流域 | 台地 | 小坂町小坂鼠山 | 弥生土器（後期：天王山式、文献2の小坂A 式）- 小坂X式（不明）/後北式と文献3 に記載される（統繩文土器の可視性も指摘さ れる）/遺物包含地 | 6.安保彰1975「弥生式土器（統繩文式土器）」「小坂町史」 | |
| 7 | 妙山遺跡 | 弥生文化 統繩文文化 | 米代川 上流域 | 田畠い 段丘上 | 小坂町小坂鼠山 宇杉沢 | 弥生土器（後期）- 統繩文土器（不明）/遺 物包含地 | 7.安保彰1975「弥生式土器（統繩文式土器）」「小坂町史」/5. 秋田県教育委員会2000「秋田県遺跡地図（鹿角地区版）」に統 繩文土器と記載。 | |
| 8 | 下大谷地遺跡 【旧大谷地】 | 弥生文化 統繩文文化 | 米代川 上流域 | 台地 | 小坂町小坂鼠山 字杉沢 | 弥生土器（後期：小坂X式と命名と文献 3）- 統繩文土器（不明）/遺物包含地 | 8.安保彰1975「弥生式土器（統繩文式土器）」「小坂町史」/5. 秋田県教育委員会2000「秋田県遺跡地図（鹿角地区版）」に統 繩文土器と記載。 | |
| 9 | 寺の岱遺跡 【旧寺の岱】 | 統繩文文化 | 米代川 上流域 | 田畠い 段丘上 | 小坂町小坂鼠山 宇室沢35 | 統繩文土器（後北C2-B式）/遺物包含地 | 9.安保彰1975「弥生式土器（統繩文式土器）」「小坂町史」 | |
| 10 | 綾平原II遺跡 【発掘】 | 弥生文化 | 米代川 上流域 | 低丘陵 | 小坂町小坂字 綾平原 | 弥生土器（後期：天王山式）/遺物包含地 | 10.綾平原II遺跡 1984「綾平原I・綾平原II・綾平原III・綾 平原IV・綾平原V」「河内原遺跡」秋田県文化財調査報告書第120 号 | |
| 11 | 呂合遺跡 【発掘】 | 弥生文化 | 米代川 上流域 | 台地 | 小坂町小坂字 呂合 | 弥生土器（中後期：天王山式系1点以上） /遺物包含地 | 11.呂合遺跡 1984「呂合I・呂合II・呂合III・呂合IV」秋田県文化 財調査報告書第120号 | |
| 12 | 大岱I 【発掘】 | 弥生文化 | 米代川 上流域 | 川底い 段丘上 | 小坂町小坂字 大岱 | 弥生土器（後期：天王山式）/遺物包含地 | 12.大岱I遺跡 1984「はりま屋遺跡・横須遺跡・大岱I遺跡」秋田県文 化財調査報告書第109集 | |
| 13 | 大岱II 【発掘】 | 弥生文化 | 米代川 上流域 | 川底い 段丘上 | 小坂町小坂字 大岱 | 弥生土器（後期：天王山式、小坂X式）/遺 物包含地 | 13.大岱II遺跡 1984「大岱II遺跡・大岱II遺跡」秋田県文化財調査報 告書第120集 | |
| 14 | 大岱II遺跡 【発掘】 | 弥生文化 統繩文文化 | 米代川 上流域 | 台地 | 小坂町小坂字 大岱 | 弥生土器（後期：天王山式、小坂X式）- 統 繩文土器（後北C2式）/遺物包含地 | 14.大岱II遺跡 1984「大岱II遺跡・大岱II遺跡」秋田県文化財調査報 告書第120集 | |
| 15 | はりま屋遺跡 【発掘】 | 弥生文化 統繩文文化 | 米代川 上流域 | 川底い 段丘上 | 小坂町小坂字 下上八山37 | 弥生土器（中期：芋泽／台字C2期）- 後期： 天王山式・小坂X式と文献3、中期：芋泽 式C2期・はりま屋式と文献5、統繩文 土器（後北C2-D式）/遺物包含地（遺構外） | 15.はりま屋遺跡 1984「はりま屋遺跡」秋田県文化財調査報告書第192 号/5.秋田県教育委員会2000「秋田県遺跡地図（鹿角地区版）」 /12.横岸洋2006「赤藤字式の研究（2）-秋田県内の弥生前期・中 期の土器編年について」『秋田考古学第50号』秋田県考古学協会 | |
| 16 | 物見坂遺跡 【発掘】 | 弥生文化 統繩文文化 | 米代川 上流域 | 台地 | 鹿角市十和田 先端部 | 鹿角市十和田 銚字木物見坂5 | 銚字木物見坂5 （後北C2-D式）/遺物包含地（遺構外） | 16.物見坂遺跡 2003「物見坂遺跡」秋田県文化財調査報告書第3 号/354集 |
| 17 | 宮野平遺跡 | 統繩文文化 | 米代川 上流域 | 低丘陵 | 鹿角市十和田 大字宮野平 | 銚字木物見坂5 （後北C2-D式）/遺物包含地 | 17.秋田県教育委員会2000「秋田県遺跡地図（鹿角地区版）」に統 繩文土器と記載。 | |
| 18 | 八森II遺跡 | 統繩文文化 | 米代川 上流域 | 低丘陵 | 鹿角市八森2 | 統繩文土器（不明）/敷布地 | 18.八森II遺跡 2003「八森II遺跡」秋田県文化財調査報告書第3 号 | |
| 19 | 猪子I遺跡 【発掘】 | 弥生文化 | 米代川 上流域 | 台地 | 鹿角市花輪字 猪子I | 弥生土器（後期：天王山式）/遺物包含地 室内16-77 | 19.猪子I遺跡 1982「上萬同IV遺跡・劉林遺跡・猪子I遺跡・猪 子II遺跡」秋田県文化財調査報告書第91号 | |
| 20 | 東内Ⅳ遺跡 【発掘】 | 弥生文化 統繩文文化 | 米代川 上流域 | 川底い 段丘上 | 鹿角市花輪字 猪子I | 弥生土器（後期：小坂X式）/黑須遺 跡（後北C2-D式）/遺物包含地 | 20.東内Ⅳ遺跡 1984「東内Ⅳ・IV・V・VI遺跡」秋田県文化財調 査報告書第115集 | |
| 21 | 東内Ⅴ遺跡 【発掘】 | 弥生文化 | 米代川 上流域 | 川底い 段丘上 | 鹿角市花輪字 猪子I | 弥生土器（後期：天王山式、小坂X式）/遺 物包含地 | 21.東内Ⅴ遺跡 1984「東内Ⅴ・IV・V・VI遺跡」秋田県文化財調査報 告書第115集 | |
| 22 | 東内Ⅵ遺跡 【発掘】 | 弥生文化 統繩文文化 | 米代川 上流域 | 川底い 段丘上 | 鹿角市花輪字 猪子I | 弥生土器（後期：天王山式系）- 統繩文 土器（後北C2-D式）/遺物包含地 | 22.東内Ⅵ遺跡 1984「東内Ⅵ・IV・V・VI遺跡」秋田県文化財調 査報告書第115集 | |
| 23 | 戸戸森遺跡 【発掘】 | 弥生文化 | 米代川 上流域 | 鹿角市 邊野辺 | 戸戸森142-1 行原斯 | 弥生土器（後期：天王山式系・後北C1式） /遺物包含地 | 23.戸戸森遺跡 1984「戸戸森遺跡」秋田県文化財調査報告書第 24集 | |
| 24 | 大地平遺跡 【発掘】 | 弥生文化 | 米代川 中流域 | 丘陵中腹 平坦地 | 鹿角市八幡平 字大字平 | 弥生土器（後期：小坂X式）/遺物包含地 跡・上山遺跡・堂の上遺跡・上萬同II遺跡 | 24.大地平遺跡 1981「崩削井遺跡・油漬窯遺跡・大地平遺 跡・上山遺跡・堂の上遺跡・上萬同II遺跡」秋田県文化財調 査報告書第78集 | |
| 25 | 萬ヶ長根IV遺跡 【発掘】 | 弥生文化 | 米代川 中流域 | 舌状 | 大館市長井沢 萬ヶ長根 | 弥生土器（後期：天王山式・小坂X式）/遺 物包含地 | 25.萬ヶ長根IV遺跡 1981「山田遺跡・沢口遺跡・萬ヶ長根IV遺 跡・萬ヶ長根III遺跡・萬ヶ長根II遺跡」秋田県文化財調 査報告書第84集 | |
| 26 | 福原遺跡 【発掘】 | 弥生文化 統繩文文化 | 米代川 中流域 | 台地 | 大館市高塚字 福原 | 弥生土器（後期：小坂X式）- 統繩文土器 （後北C2式）/遺物包含地 | 26.福原遺跡 1973「福原遺跡包含地横井野竹穴住居址発掘調査 報告書」大館市史編さん調査資料第7集 | |
| 27 | 萩黄森II遺跡 | 統繩文文化 | 米代川 中流域 | 台地 | 大館市高塚字 萩黄森南 | 統繩文土器（不明）/遺物包含地 | 27.萩黄森II遺跡 1974「片山遺跡」大館市史編さん調査資料第13 集 | |
| 28 | 片山前コ 【発掘】 | 弥生文化 統繩文 | 米代川 中流域 | 台地 | 大館市字片山 宇立字上昔 | 弥生土器（後期：天王山式系）- 統繩文 土器（後北C2-D式）/黒落葉（整六連鏡） | 28.片山前コ遺跡 1973「片山前コ遺跡」大館市史編さん調査資料第13 集 | |

| 遺跡名 | 遺跡名 | 水系 | 立地 | 所在地 | 土器(時期) / 標別 | 引用文献・参考文献 |
|--------------------------|---------------------|-------------------------------------|-------------------------|--------------------------------|---|--|
| 29 川口十三曲 【発掘有】 | 縄織文化 中流域 | 米代川 中流域 | 低丘陵 | 大船市布川字十三曲 | 縄織文土器 (後北C・D式) / 遺物包含地 | 23.福士社2014『川口十三曲遺跡』大船市文化財調査報告書第11集 |
| 30 朽木遺跡 【発掘 主・旧朽木】 | 弥生文化 中流域 | 米代川 中流域 | 台地 | 大船市田代町 山田宇木の森 | 弥生土器 (後期：天王山式・小原X式) / 磁 器 (配石土坑より出土・土坑器) | 18.夷山園1971『北秋田郡田代町山田宇木の森文藝斯究穴群・施 設遺跡記石碑』大船市久留山調査報告書第2集 |
| 31 岩瀬遺跡 【発掘有】 | 縄織文化 中流域 | 米代川 中流域 | 台地 | 大船市川口 字下岩瀬 | 縄織文土器 (不明) / 遺物包含地 | 22.大船黒馬橋校1966『秋田港跡』/8.板崎芳男1990『遺跡詳細 分布調査報告書』大船市教育委員会 |
| 32 みのり台遺跡 | 縄織文化 中流域 | 米代川 中流域 | 台地 | 大船市長坂 字牛田岱 | 縄織文土器 (不明) / 遺物包含地 | 5.秋田県教育委員会2000『みのり台遺跡地図 (鹿角地区版)』に続 織文土器と記載。 |
| 33 脱口遺跡 | 弥生文化 中流域 | 北秋田市 東湖町 | 低丘陵 | 北秋田市田代 字湖畔 | 弥生土器 (後期：天王山式) / 縄織文土器 統織文化 (不明) / 遺物包含地 | 24.復木治祐2006『市内遺跡詳細分布調査報告書』北秋田市文化 財調査報告書第4集 |
| 34 からむし岱 遺跡 | 縄織文化 中流域 | 北秋田市 北浦部 | 台地 | 北秋田市御所 字からむし岱 | 縄織文土器 (不明) / 遺物包含地 | 24.復木治祐2006『市内遺跡詳細分布調査報告書』北秋田市文化 財調査報告書第4集 |
| 35 烏野上岱遺跡 【発掘有】 | 弥生文化 中流域 | 米代川 下流域 | 台地 | 前代町二ツ井町 地形字烏野上岱 | 弥生文土器 (後北C・D式) / 遺物包含地 (アメノカ式石器) | 25.新井和広2006『烏野上岱遺跡』秋田県文化財調査報告書第 406集 |
| 36 侯后坂遺跡 | 縄織文化 主体・ 古墳文化 | 米代川 下流域 | 低丘陵 南面部 | 能代市二ツ井町 荷上町下中島 | 土器類 (追跡)。小型陶器 (春) は丸皿。在 地 (土) - 侯后坂 (後期)。灰壺 - 瓢壺は MT15-TK10式 (式) / 遺物包含地 | 26.和泉紹一1996『ニツ井町の侯后坂、土器類新資料紹介』『秋 田考古学第45号』秋田考古学協会 |
| 37 寒川川遺跡 【発掘有】 | 縄織文化 弥生文化 | 米代川 下流域 ・ 日本海 沿岸 北部域 | 沢辺 丘陵 丘陵上 | 能代市浅内字 寒川家上48 | 弥生土器 (後期：天王山式・小原X式・十 五五式) - 縄織文土器 (後北C・D式) / 磁 器 (麻績石器)。文鏡23では、第2次払堤： 弥生土器+王台式器・天王山式器 (小型 盤) - 小型刀子。第3次払堤：縄織文土器 式 (後北C) C2式器、第4次払堤江戸 式 (後北C) C2式器、第5号・第6号枕 器 (江戸式) (後北C) C2式枕8、第6号枕 器 (江戸式) (後北C) D式枕4。 | 27.小林克1988『寒川I・II遺跡』秋田県文化財調査報告書第 167集・28.小林克1995『寒川家上 (A・B・C) 遺跡、寒川II遺 跡』『能代市史 資料編 考古』 |
| 38 上落合大野 遺跡 | 縄織文化 | 日本海 沿岸北部 | 台地 | 能代市落合 字上大野 | 縄織文土器 (不明) / 遺物包含地 | 29.木村高1999『東北地方北端における弥生系土器と古式土器 の並行開闢』『青森県埋蔵文化財センター研究紀要第4号』 |
| 39 斎藤遺跡 | 縄織文化 | 日本海 沿岸北部 | 砂丘地 | 八幡町峰浜田 字斎藤原 | 縄織文土器 (不明) / 遺物包含地 | 30.井上義孝2013『青森県若狭郡大庭町斎藤遺跡出土の土器 型について』『新潟大学先史学・考古学研究論集24号』 |
| 40 手筋谷地遺跡 | 弥生文化 縄織文化 | 日本海 沿岸北部 | 砂丘地 | 八幡町峰浜田 字手筋谷地 | 弥生土器 (不明) - 縄織文土器 (不明) / 遺 物 (後北C・D式) / 遺物包含地 | 31.八木光洋2015『古墳時代後期の北日本』『倭因の形成と東 晉』吉川弘文館 |
| 41 放牧遺跡 | 縄織文化 | 日本海 沿岸北部 | 轟辯山 | 三種町轟川 字上大沢 | 縄織文土器 (不明) / 遺物包含地 | 32.秋田県教育委員会2002『秋田県遺跡地図 (山本地図版)』に 続織文土器と記載。 |
| 42 朝間崎遺跡 【発掘有】 | 弥生文化 | 日本海 沿岸中部南 部低丘陵 | 男鹿半島 字牛込 | 朝間崎 字牛込 | 縄織文土器 (不明) / 遺物包含地 | 34.荒川準『「美唄の牛込遺跡の土器について』『豊平島研究第 13号』1984 |
| 43 小谷地遺跡 【発掘有】 | 古墳文化 | 日本海 沿岸中部南 部低丘陵 | 八郎潟 富士小谷地 字冲 | 小谷地 富士小谷地9 字冲 | 土器類 (古墳中期：涉前編年13年新附) / 磁器 | 36.大野寺司1982『小谷地遺跡』男鹿市文化財調査報告書第2集 37.島田信也2018『一本杉遺跡』能手市文化財調査報告書第44集 |
| 44 大食遺跡 | 弥生文化 | 日本海 沿岸中部南 部低丘陵 | 八郎潟 富士大食 字下大食 | 大食 富士大食 | 弥生土器 (後期：天王山式) / 遺物包含地 | 38.荒川準『「大食の食進跡の弥生の出生時遺物について』『秋田県埋蔵文化財センター研究紀要第2号』 |
| 45 下須遺跡 【旧里謫遺跡】 | 古墳文化 | 日本海 沿岸中部南 部低丘陵 | 八郎潟 糸川 字下須15号 | 下須 糸川 | 縄織文土器 (大正I式) - 土器類 (古墳中 期：涉前編年13年新附) / 遺物包含地 | 2.奈良修介・豊島昌1987『秋田県の考古学』吉川弘文館/38.秋 田県教育委員会2003『秋田県遺跡地図 (男鹿・南秋田地区版)』 /39.秋田県埋蔵文化財センター2013『南寄・佐保川』パンフレット |
| 46 北野I・II遺跡 【旧里謫遺跡】 | 古墳文化 | 日本海 沿岸中部南 部低丘陵 | 糸川 字下野天王 字北野21-2号 | 北野I 糸川 字下野天王 字北野21-2号 | 土器類 (僅は古墳中期) / 遺物包含地 | 38.秋田県教育委員会2003『秋田県遺跡地図 (男鹿・南秋田地区 版)』/39.秋田県埋蔵文化財センター2013『南寄・佐保川』 |
| 47 宮室遺跡 【発掘有】 | 古墳文化 主体 縄織文化 | 日本海 沿岸中部南 部低丘陵 | 砂丘地 東面部 | 由利本荘市 西町浜田沼 字宮室56 | 縄織文土器 (大正I式) - 土器類 (古墳中 期：涉前編年13年新附) - 磁器 (古墳中 期：TK23式) / 磁器 (築六郎物・土 器) *採用資料として、古墳時代前中期の土 器類 (小型器) / 純骨器 (埴輪) (埴輪式並行開 拓) | 40.小松正夫1987『宮室遺跡』西日野教育委員会/41.納谷信廣 2003『津軽郡宮崎崎遺跡の土器器について』『秋田考古学第47 号』/42.庄内昭男2002『秋田市史 第6巻 古考 史料編』/2.奈良修介・ 豊島昌1987『秋田県の考古学』吉川弘文館 |
| 48 松木田畠遺跡 | 弥生文化 | 治南南部 ・ 雄物川下流域 | 丘陵中 平原地 | 秋田市下新城中 字蛇木台 | 弥生土器 (後期：天王山式) / 遺物包含地 | 43.庄内昭男2002『秋田市史 第6巻 古考 史料編』/2.奈良修介・ 豊島昌1987『秋田県の考古学』吉川弘文館 |
| 49 片野I・II遺跡 【発掘有】 | 弥生文化 縄織文化 | 治南南部 ・ 雄物川下流域 | 丘陵中 平原地 | 秋田市下新城中 字片野 | 弥生土器 (後期：天王山式・天王山式並行 開拓) - 縄織文土器 (後北C・D式) / 遺物包含地 (SK21式) / 磁器 (SK21式) | 43.庄内昭男1996『片野I・II遺跡』秋田県文化財調査報告書第265 集/44.庄内昭男2002『秋田市史 第6巻 古考 史料編』 |
| 50 大杉沢遺跡 【発掘有】 | 弥生文化 | 雄物川 中流域 | 台地 | 秋田市四小里 字大沢 | 弥生土器 (後期：天王山式) - 縄織文土器 (後北 C・D式) / 遺物包含地 | 45.高柳志郎1987『大杉沢遺跡』秋田県文化財調査報告書第151 集 |
| 51 石坂台II・III遺跡 【発掘有】 | 弥生文化 | 雄物川 中流域 | 台地 | 秋田市河辺石坂 字七曲石坂5号 | 弥生土器 (後期：天王山式・小原X式 系) / 磁器 (SK05) | 46.小林克1985『七曲台遺跡』秋田県文化財調査報告書第125集 |
| 52 石坂台IV・V遺跡 【発掘有】 | 弥生文化 | 雄物川 中流域 | 台地 | 秋田市河辺石坂 字七曲石坂5号 | 弥生土器 (不明) - 縄織文土器 (後北C・ D式) / 遺物包含地 | 47.小林克1988『石坂台IV・VI・VII・VIII・IX・X遺跡』松木田畠遺 跡・南尾寺遺跡・野坂台I・II遺跡・野坂台II・III遺跡 |
| 53 上柴只遺跡 【発掘有】 | 弥生文化 | 雄物川 中流域 | 台地 | 秋田市河辺石坂 字上柴只38号 | 弥生土器 (後期：小原X式) / 磁器 (SK05) | 48.小林克1990『上柴只遺跡・野坂台I・II遺跡・野坂台II・III遺跡』秋 田県文化財調査報告書第195集 |

| 遺跡名 | 遺跡名 | 水系 | 立地 | 所在地 | 土器（時期）/櫛器 | 引用文献・参考文献 |
|--------------------------|-----------------------|------------|------------|-------------------------|--|--|
| 54 和田遺跡 【発掘有】 | 弥生文化 | 雄物川 中流域 | 沢辺い 段丘上 | 大仙市佑和 上笠川字和田 149 | 弥生土器（後期：一部は天王式含む）文獻 44. 文獻45では「後期」（風満溝）（境土堤 櫛・竹六律ビット・土製鉈錐等） | 49.高橋学1991「和田遺跡」秋田県文化財調査報告書第212号/50. 根岸洋2007「弥生時代の遺跡と遺物」『横手市史 貢利編 考古』 |
| 55 中沢遺跡 | 弥生文化 | 雄物川 中流域 | 低丘陵 | 大仙市佑和 吉澤川字中沢9 | 弥生土器（後期：天王式並行期）/遺物包 含地（アメリカ式石鍋） | 50.根岸洋2007「弥生時代の遺跡と遺物」『横手市史 貢利編 考 古』 |
| 56 上野町X遺跡 【発掘有】 | 弥生文化 | 雄物川 中流域 | 古地 北端部 | 大仙市強首 字上野台14-1 | 弥生土器（後期）/遺物包含地 | 51.西仙北町郷土歴史委員会2005「西仙北町史」50.根岸洋 2007「弥生時代の遺跡と遺物」『横手市史 貢利編 考古』 |
| 57 小出I遺跡 【発掘有】 | 弥生文化 | 雄物川 中流域 | 沢辺い 段丘上 | 大仙市南外 小出443号 | 弥生土器（中期後葉～後期）で、後期は天王 式（並行期と文獻45）/遺物包含地 | 52.谷地重実1991「小出I・II・III・IV遺跡」秋田県文化財調査報 告書第206集/50.根岸洋2007「弥生時代の遺跡と遺物」『横手市史 貢利編 考古』 |
| 58 上野I遺跡 【旧上野】 | 古墳文化 | 雄物川 上流域 | 盆地内 沖積地 | 大仙市高岡上 字上野80-4 | 土器類（古墳時代中期）/遺物包含地 | 53.船戸義典「田代櫛跡I・改序跡」秋田県文化財調査報告書第 122集/54.高橋学2010「横手盆地における弘道院成立以前の古代 墓葬」『田代山遺跡文化財センター研究紀要第24号』 |
| 59 川瀬山遺跡 【発掘有】 | 弥生文化 続縄文文化 | 雄物川 上流域 | 古地 東端部 | 美郷町金沢東 字川瀬山 | 弥生土器（中期前段）・続縄文土器（C2・D式）/遺物包含地 | 55.鳥居宗崇2015「町内遺跡詳細分布調査報告書」美郷町埋蔵文 財調査報告書第16集 |
| 60 下田遺跡 【発掘有】 | 弥生文化 続縄文文化 | 雄物川 上流域 | 低丘陵 東端部 | 横手市大森町 板井田字下田 | 文獻52では「弥生土器（後期）」・文獻45では 續縄文土器（後期C1式に類似するがその ものではない記載）/遺物包含地 | 56.谷地重実1990「下田遺跡・下田谷地遺跡」秋田県文化財調査報 告書第189集/50.根岸洋2007「弥生時代の遺跡と遺物」『横手市史 貢利編 考古』 |
| 61 一本木遺跡 【発掘有】 | 古墳文化 | 雄物川 上流域 | 盆地内 沖積地 | 横手市川尻町 一本木内 | 土器類（古墳中期：津町福原13群新附）/ 遺物包 含地 | 57.島田祐徳2012「中津町A遺跡・一本木遺跡」横手市文化財調 査報告第44集/51.島田祐徳2018「一本杉遺跡」 |
| 62 オホン清水B 遺跡 【発掘有】 | 古墳文化 | 雄物川 上流域 | 盆地内 沖積地 | 横手市理塚 一本木内 | 土器類（古墳中期：津町福原13群新附）/ 遺物包 含地（古墳中期：有蓋TK208型式）/黑 色オホン清水212号 | 58.芦谷敬1984「オホン清水遺跡」横手市文化財調査報告10/34. 島田祐徳2018「一本杉遺跡」横手市文化財調査報告第44集 |
| 63 郡士館B遺跡 【発掘有】 | 続縄文文化 主体 n 古墳文化 | 雄物川 上流域 | 低丘陵 東端部 | 横手市赤坂字坂 土崎・郡ノ 谷端 | 土器類（文獻50.55%）は小型盤（香港）は古墳 時代中葉だが、古墳遺跡の在地土器の可 能性）・黒陶盤（横穴式石室） | 59.阿部典平編2008「北部日本における文化交流」国立歴史民俗 文化財研究報告第143集/59.島田祐徳2015「神谷地遺跡・小出遺 跡」横手市文化財調査報告第32集 |
| 64 一本杉遺跡 【発掘有】 | 古墳文化 | 雄物川 上流域 | 盆地内 沖積地 | 横手市平鹿町 吉田一木堂松 ノ後 | 横手市平鹿町下 吉田一木堂松 ノ後（古墳中期：津町福原13群新附）・ 遺物包 含地（古墳中期：有蓋・环形・土器「ぼ うけ」はTK208型式）（黒陶盤）（整穴式土器5 と建物）（往々火候・外周環狀土器・土坑2 と建物）（往々火候・外周環狀土器・土坑2 と建物）・黒陶盤（横穴式石室） | 60.島田祐徳「一本杉遺跡出土の縄年の考察」『津町遺跡！』石川 県立埋蔵文化財センター |
| 65 五味川遺跡 | 古墳文化 | 雄物川 上流域 | 盆地内 沖積地 | 横手市平鹿町 浅瀬井字五味川 | 土器類（古墳中期：津町福原13群新附）/ 遺物包 含地 | 59.島田祐徳2015「神谷地遺跡・小出遺跡」横手市文化財調査 報告第32集 |
| 66 中郷遺跡 【発掘有】 | 古墳文化 | 雄物川 上流域 | 盆地内 沖積地 | 横手市中郷町 中郷字中郷 | 土器類（古墳後期：糞は住家式と文獻23） 遺物包 含地 | 61.小松正夫1974「中郷遺跡」秋田県文化遺産委員会/37.島田祐徳 2018「一本杉遺跡」横手市文化財調査報告第44集 |
| 67 小出遺跡 【発掘有】 | 古墳文化 | 雄物川 上流域 | 盆地内 沖積地 | 横手市雄物川町 薄井字小出 内地 | 土器類（古墳中期：津町福原13群新附）/ 遺物包 含地（古墳中期：無蓋TK208型式）/黑 色土器（整穴式土器）・獨立柱建物跡 1・土器臺区1区） | 59.島田祐徳2015「神谷地遺跡・小出遺跡」横手市文化財調査報 告第32集/37.島田祐徳2018「一本杉遺跡」横手市文化財調査報 告第44集 |
| 68 沖谷地遺跡 【発掘有】 | 古墳文化 | 雄物川 上流域 | 盆地内 沖積地 | 横手市雄物川町 薄井字神谷地 内地 | 土器類（古墳中期：津町福原13群新附）・ 遺物包 含地（古墳中期：香港）は「ぼうけ」は TK208型式）（黒陶盤）（整穴式土器）・獨立 柱建物跡1・土器臺区1区） | 59.島田祐徳2015「神谷地遺跡・小出遺跡」横手市文化財調査報 告第32集/37.島田祐徳2018「一本杉遺跡」横手市文化財調査報 告第44集 |
| 69 会津田中B遺跡 【発掘有】 | 古墳文化 | 雄物川 上流域 | 盆地内 沖積地 | 横手市雄物川町 会津田中字田中 | 土器類（古墳中期：津町福原13群新附）/ 黒陶盤（土坑2） | 62.島田祐徳2007「会津田中B遺跡」横手市文化財調査報告第7集/ 37.島田祐徳2018「一本杉遺跡」横手市文化財調査報告第44集 |
| 70 田久保下遺跡 【発掘有】 | 続縄文文化 主体 古墳文化 | 雄物川 上流域 | 低丘陵 東端部 | 横手市綿次大堤 字田久保下62 | 経織火文土器（唐は北大式系で夜刀）土器 類（古墳後期：住社一束型式）・漢器 (古墳中期：MT15～TK10型式)・土坑墓 (黒窯)。文獻58.59%より、SK306住社 式2件・小刀1・曲刀土器1・井状工具1、 SK307・住社式2件・合環1件、SK308・唐 窯鐵製品1・木製削刀1刀子1・縦子1・ 環状鉄製品1・SK309・住社式2件と土器（在 地内）、刀子2・環状鉄製品1・竹編束頭、 SK310・住社式小型2件と土器（在地内 SK311複合）、環状鉄製品1と鉄製品破片 1、SK311・住社式2件・壺1と土器（在地 内SK310複合）、SK312・住社式环・ 壺・竹編3・刀子2・箆2・SK317・箆2件1・ 壺1。 | 63.高橋学1992「高ヶ沢A・B・C墓群・田久保下遺跡・高ヶ沢1 ～4号墓」秋田県文化財調査報告書第220集/54.高橋学・内庭男 2007「横手市田久保下遺跡出土の鉄製品」『秋田県立博物館研 究報告第32号』/65.辻秀人編「古代東北・北海道におけるモノ・ ヒト・文化交流の研究」東北学院大学 |
| 71 大久保郡山遺跡 | 古墳文化 | 雄物川 上流域 | 盆地内 沖積地 | 羽後町 大久保地内 | 土器類（古墳中期：高井は津町福原13群新 附）/遺物包 含地 | 66.株木健男1992「大久保郡山遺跡詳細分布調査報告書」羽後町 文化財調査報告書第11集 |
| 72 トカラ遺跡 【発掘有】 | 弥生文化 | 雄物川 上流域 | 沢辺い 段丘上 | 東成瀬川橋川 字トカラ4-1 | 弥生土器（後期：小坂X式・赤穴式土 器n）/遺物包 含地 | 67.安田創2019「トカラ遺跡」秋田県文化財調査報告書第513集 |

表2 秋田県の弥生時代時期区分と土器型式

| 兜玉(1987文献35)を引用加筆 | | 楳岸(2006文献12)を引用加筆 | |
|-------------------|-----------------|-------------------|---|
| | 秋田県 | | 秋田県南部 |
| 弥生時代 | 地蔵田B・新聞・平鹿 | 前 期 | 前半 (+) |
| | 湯の沢A | 後半 | 砂沢(古) 砂沢(新) |
| | 手取清水 | 前 葉 | (+) 寒川I |
| | 横長根A | 中 葉 | (+) 横長根A(古) 横長根A(新) |
| | 宇津ノ台I群 | 葉 | 宇津ノ台I群 (松木台I) |
| | 三十刈、 宇津ノ台II群 | 後 葉 | 宇津ノ台II群(古) 宇津ノ台II群(新) (木津根崎I・若井堂) |
| | 天王山式 | 後 前半 | *はりま縄I群が小坂X式の系統へつながるものであろうと推測している。 |
| | 小坂X式・後北C2式 | 後 後半 | |

表3 東北北部と北海道(道南・道央)の時期区分と土器型式

| 鈴木(2021「続文とは何か」)『土器と墓制から見た北東北の続縄文文化』 漁澤市埋蔵文化財センターP1を引用 | | | |
|---|---------|-----------------------|-----------------------------------|
| | 東北北部 | 道南 | 道央 |
| 弥生時代 | 砂沢式 | 尾白内II群 | H37丘珠式 前5C後葉～前4C前半 |
| | 二枚縄式 | 青苗B(古) 宅野式 | H317式 前4C後半～前3C前半 |
| | 宇鉄II式 | 青苗B(新) 下添山(アヨロ1式) | H37栄町式(古) 前3C後半～前2C前半 |
| | 田舎越2・3 | 西桔梗B2 アヨロ2ab式 | H37栄町式(古) 江別太1式 前2C後半～前1C前半 |
| | 念仏間式 | 南川III アヨロ2b式 | 江別太2式 |
| | 家ノ前式 | 南川IV アヨロ3ab式 | 後北A式 前1C後半 |
| | (鳥窓) | 南川IV/要山KII群アヨロ3ab式 | 後北B式 (1C前葉～1C中葉) |
| | 赤六式 | 要山KII群 | 後北C1式 (1C後葉～2C中葉) |
| | 赤穴式/壺蓋式 | 後北C2・D式(古・中) | 2C後葉～4世紀前葉 |
| | 塙釜式 | 後北C2・D式(新)/円形・刺突文土器群I | 4C中葉～後葉 |
| 古墳時代 | 南小泉式 | 円形・刺突文土器群II～III | 5C前葉 |
| | 引田式 | 円形・刺突文土器群IV～V | 5C中葉～後葉 |
| | 住社式 | 円形・刺突文土器群VI～VII | 6C前葉～後葉 |
| 飛鳥時代 | 栗圓式 | 円形・刺突文土器群IX～X | 7C前葉～中葉 |
| | | 円形・刺突文土器群IX～X | 7C後葉 |

表4 秋田県の弥生時代後期から古墳時代(続縄文時代)の主要遺跡と土器型式(試案)

| 雄物川流域 | | 日本海沿岸域 | | 米代川流域 | |
|-------|--|--------|--|--|--|
| 弥生時代 | 天王山式(並行期) *中沢・和田・小出I | 中葉 | 天王山式(並行期) *松木台III・大倉・片野I | 天王山式(並行期) *尾樽部・大岱I・大岱III・狼ヶ平 ・越平館II・はりま縄 | |
| | 小坂X式/後北C1式並行期 並行期・和田 | | 小坂X式/後北C1式並行期 *片野I | 小坂X式/後北C1式並行期 *尾樽部・戸戸森 | |
| | 小坂X式(赤穴式並行期) /後北C2・D式 | | 小坂X式(赤穴式並行期) /後北C2・D式 *寒川II | 小坂X式(赤穴式並行期)/後北C2・D式 *尾樽部・曙岱I・大岱III・はりま縄 | |
| | (*石坂台II・VII)・川端山III | | 壺蓋式(並行期) *荒崎 | (+) | |
| | (+) | | (+) | (+) | |
| | (+) | | 漆町福年13群(引田式並行期) /TK20型式 *一本杉・オホン清水 | (+) | |
| | 漆町福年13群(引田式並行期) /TK23型式/北大I式 *小谷地・宮崎 | | (+) | | |
| | (+) | | (+) | TK15～MT10型式カ *後后阪 | |
| | (+) | | (+) | (+) | |
| | 栗圓式 *田久保下 | | 栗圓式並行期(東北北部型) *大清水台II | 栗圓式並行期(東北北部型) *鹿角沢II | |
| 古墳時代 | 栗圓式 *田久保下 | | | | |
| | 栗圓式並行期(東北北部型) *下藤根・猪向・釘賀 | | | | |
| 飛鳥時代 | | | | | |
| | | | | | |

*●式並行期とは、秋田県在地系土器の可能性があるグループである。

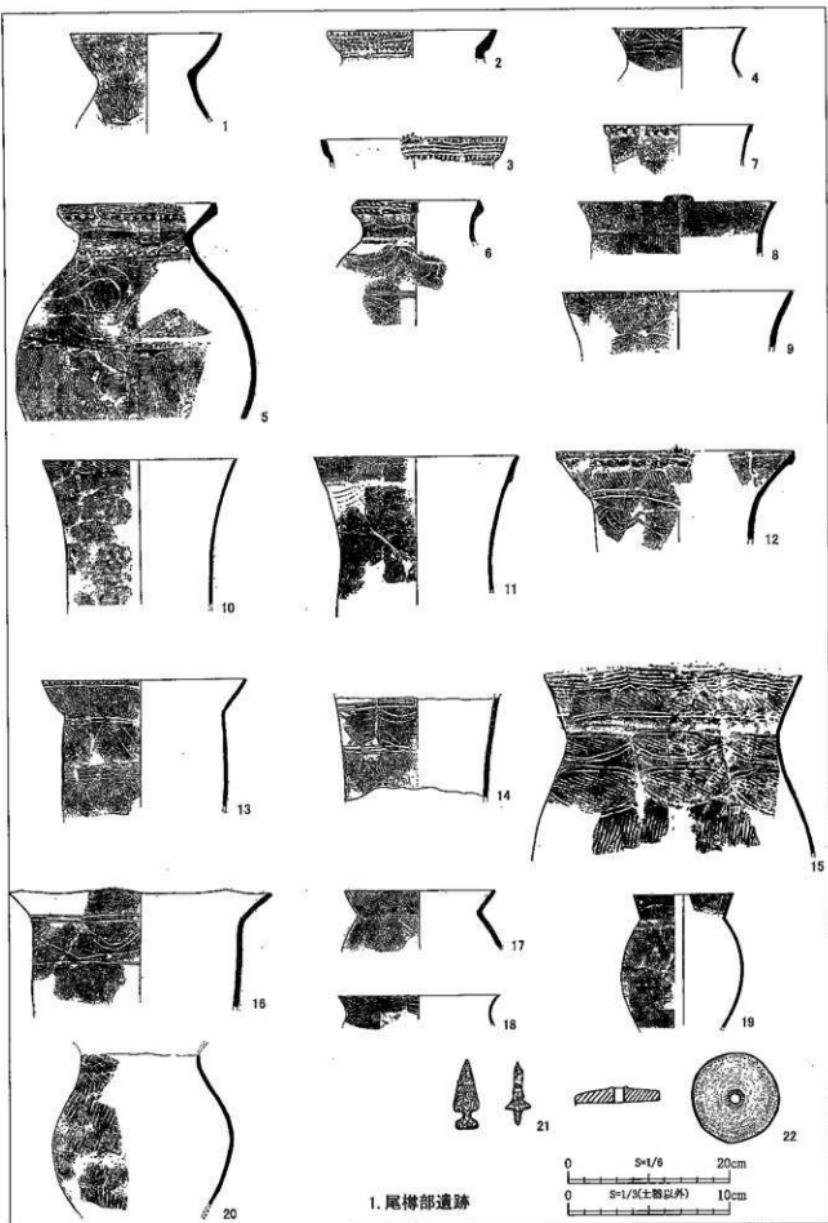
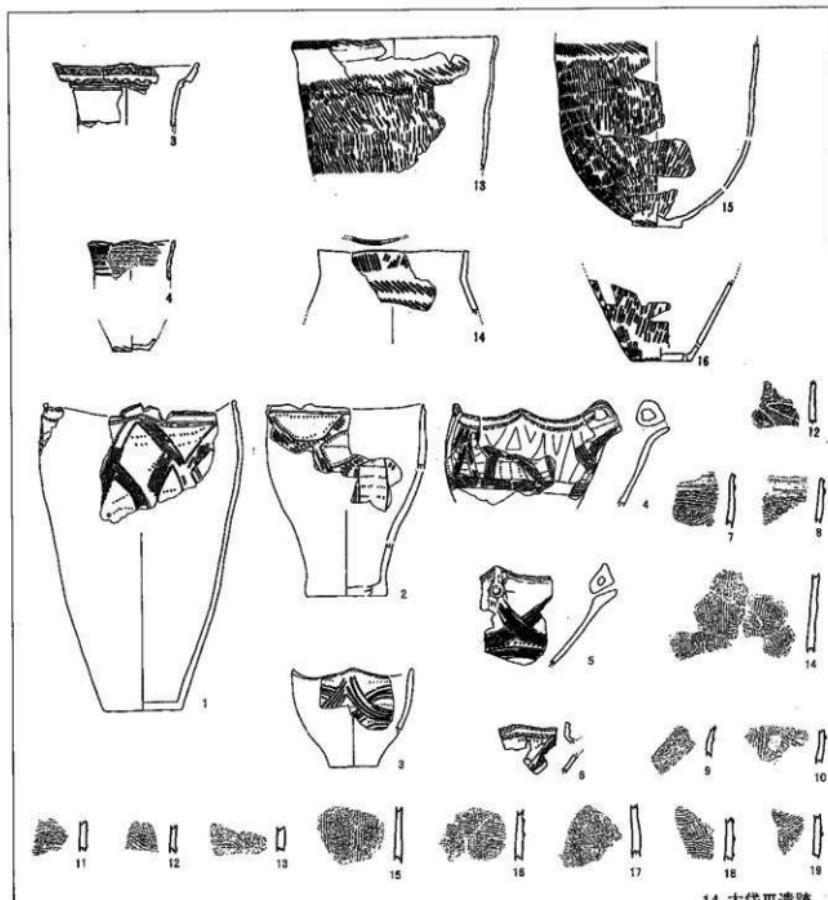


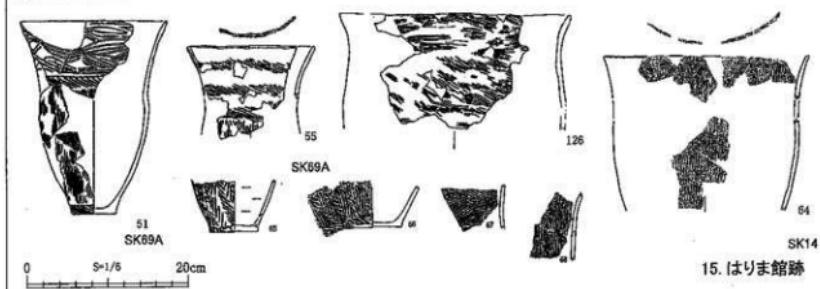
図2 米代川上流域 (1)



図3 米代川上流域(2)



14. 大岱Ⅲ遺跡



15. はりま館跡

図4 米代川上流域 (3)

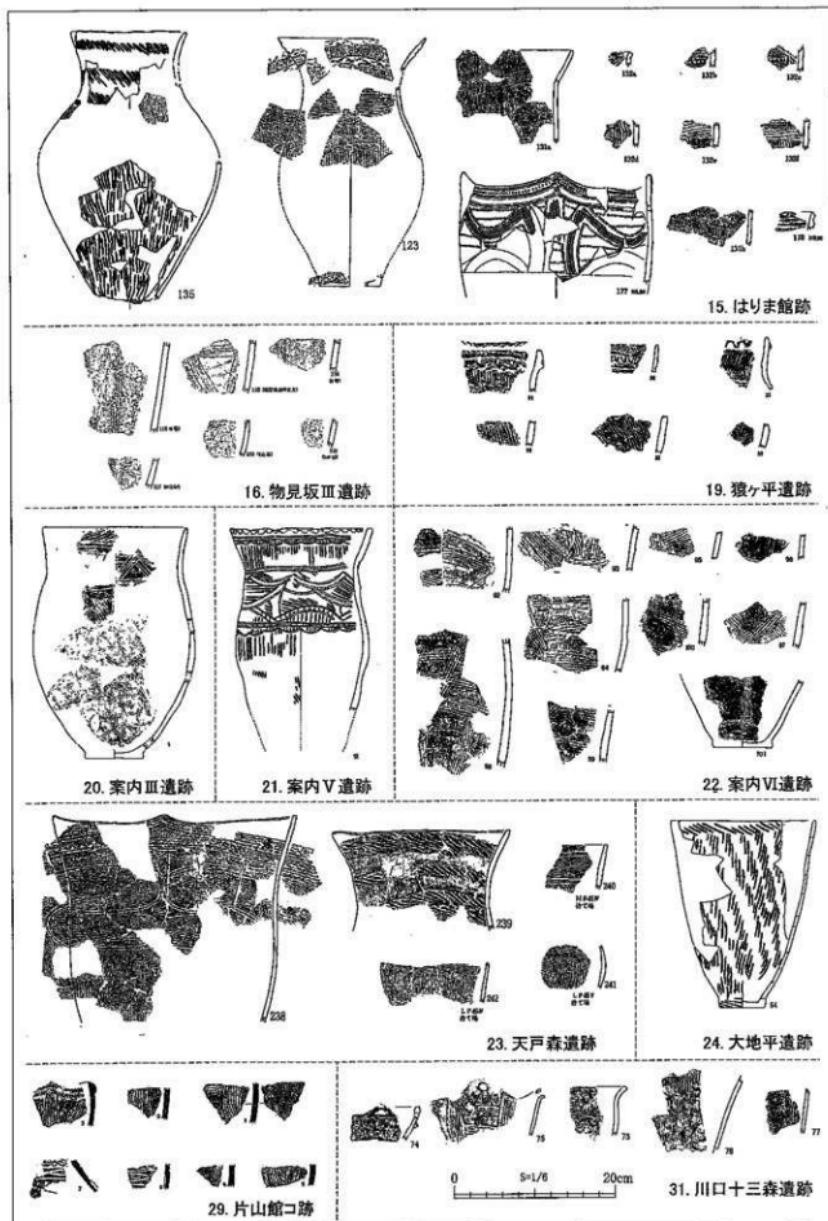


図5 米代川上流域(4)・米代川中流域

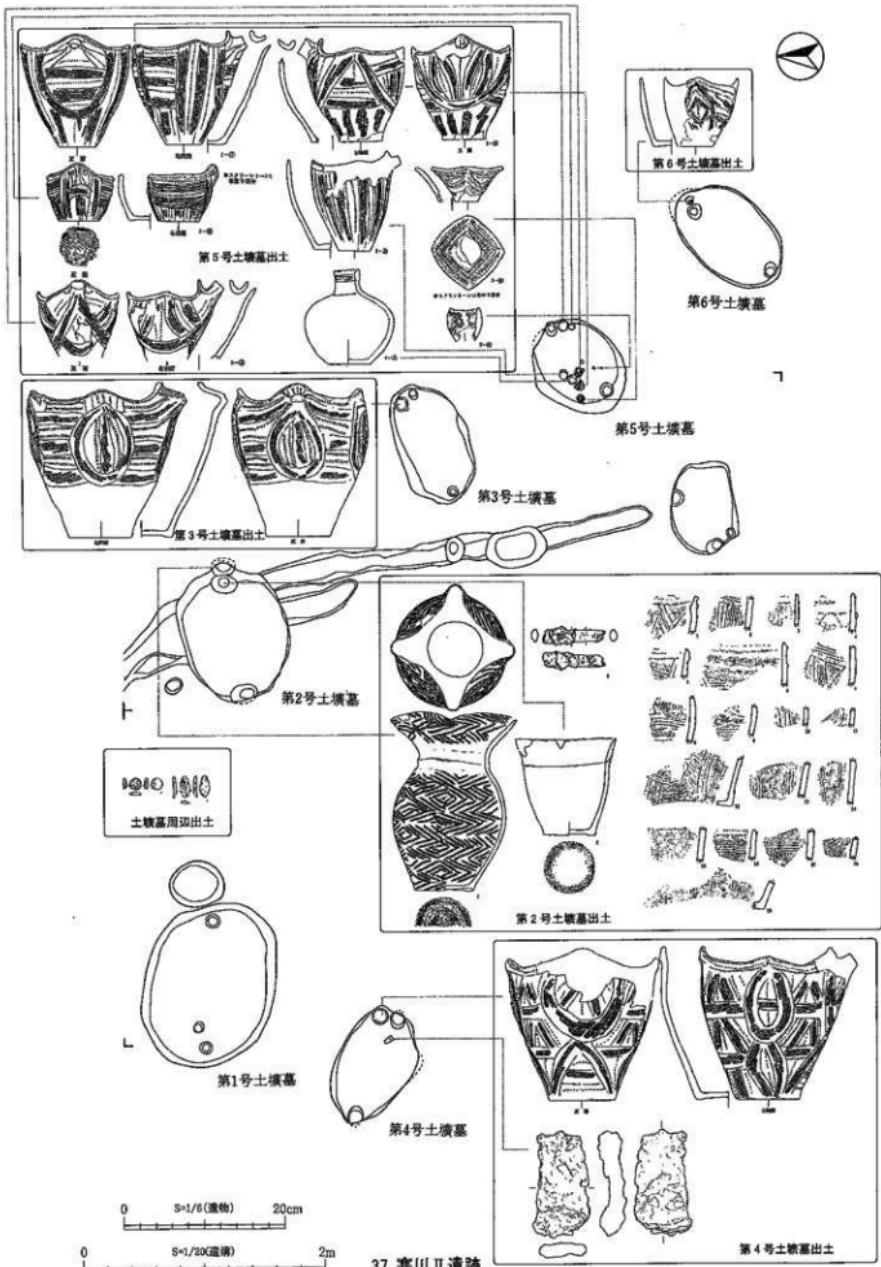


図 6 米代川下流域・日本海沿岸域北部 (1)

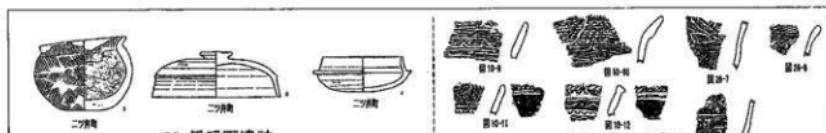
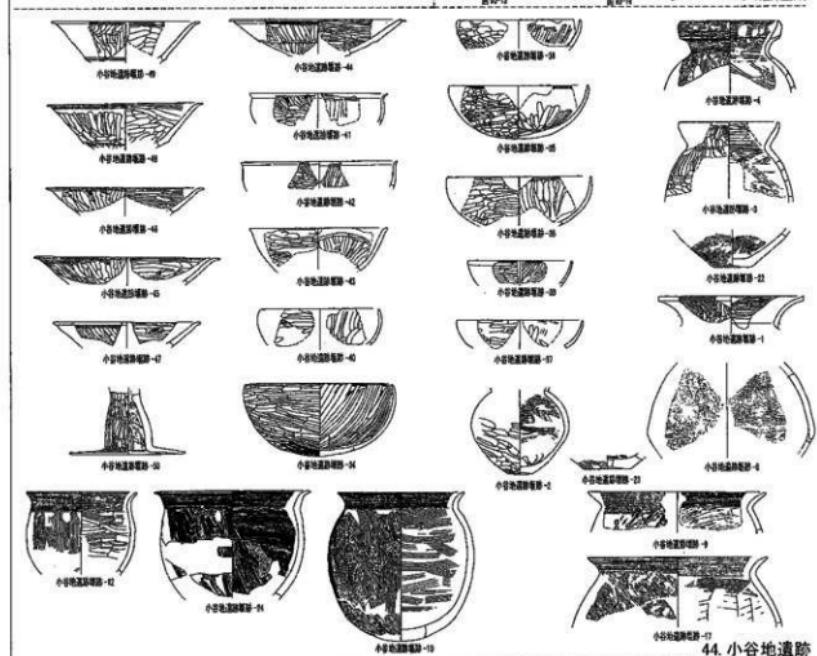


図7 米代川下流域・日本海沿岸域北部(2)



44. 小谷地遺跡

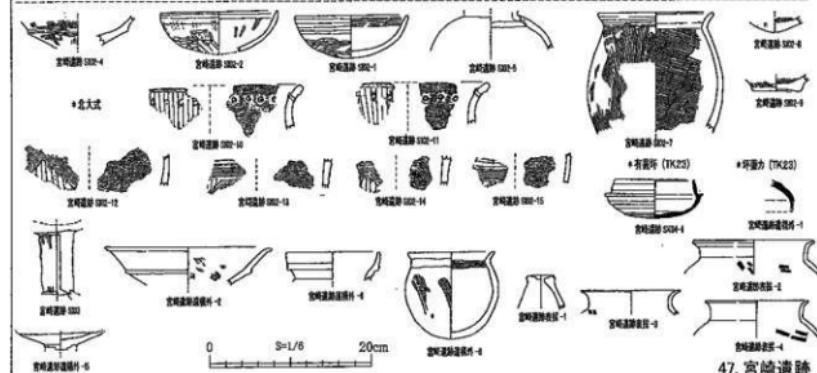


図8 日本海沿岸域南部(1)

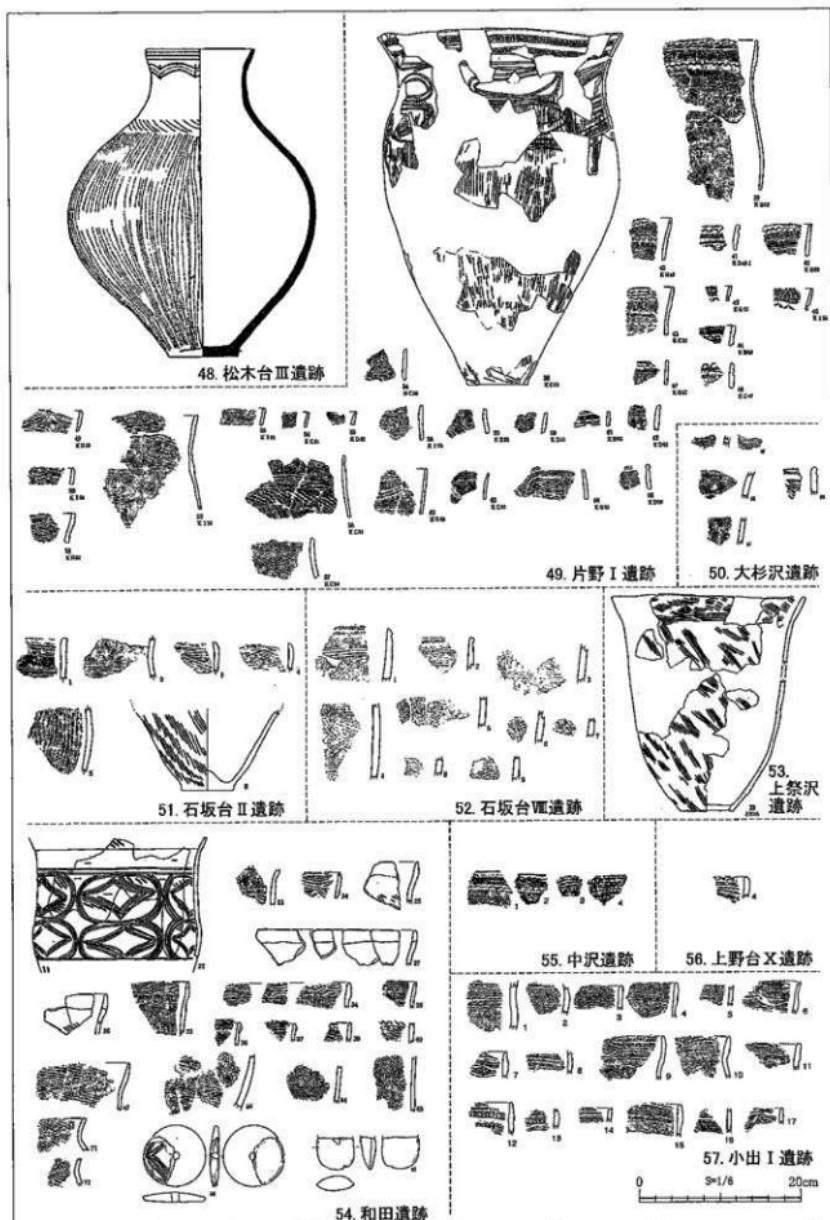


図9 日本海沿岸域南部（2）・雄物川中下流域

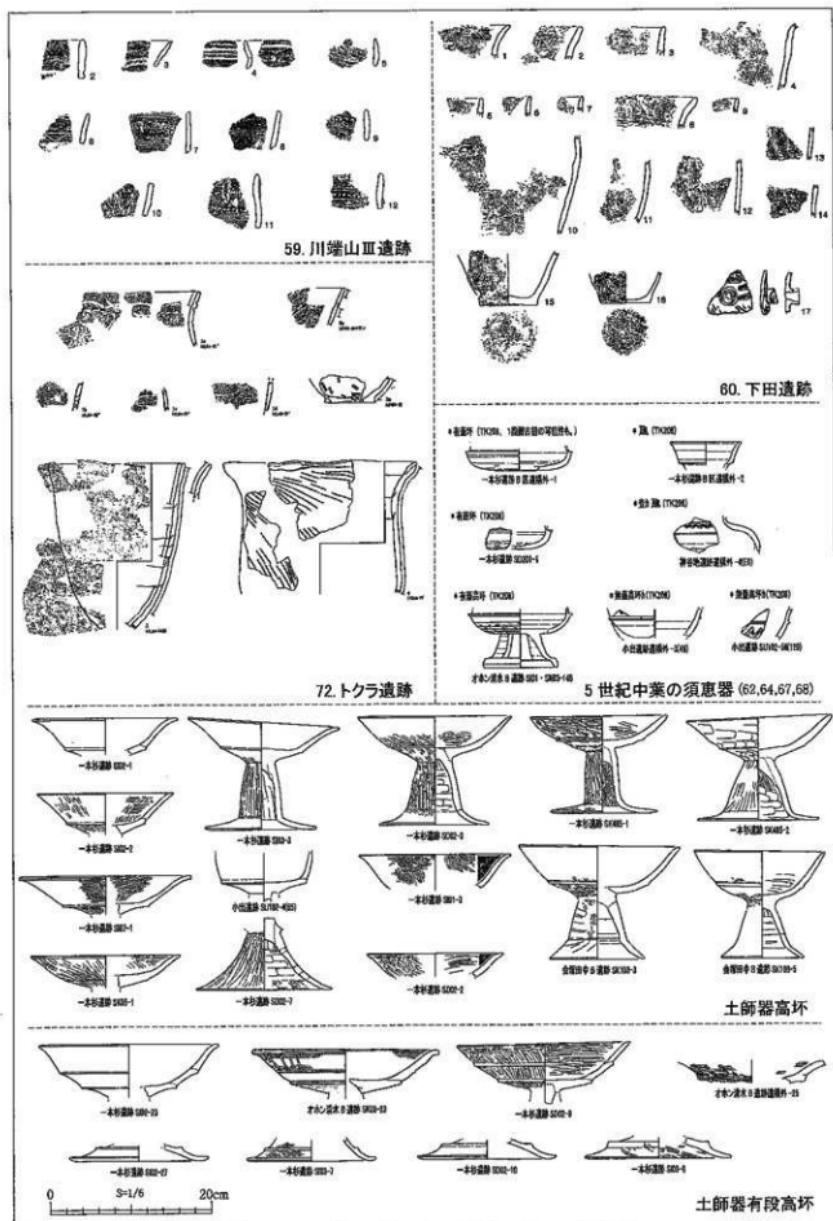


図 10 雄物川上流域 (1)

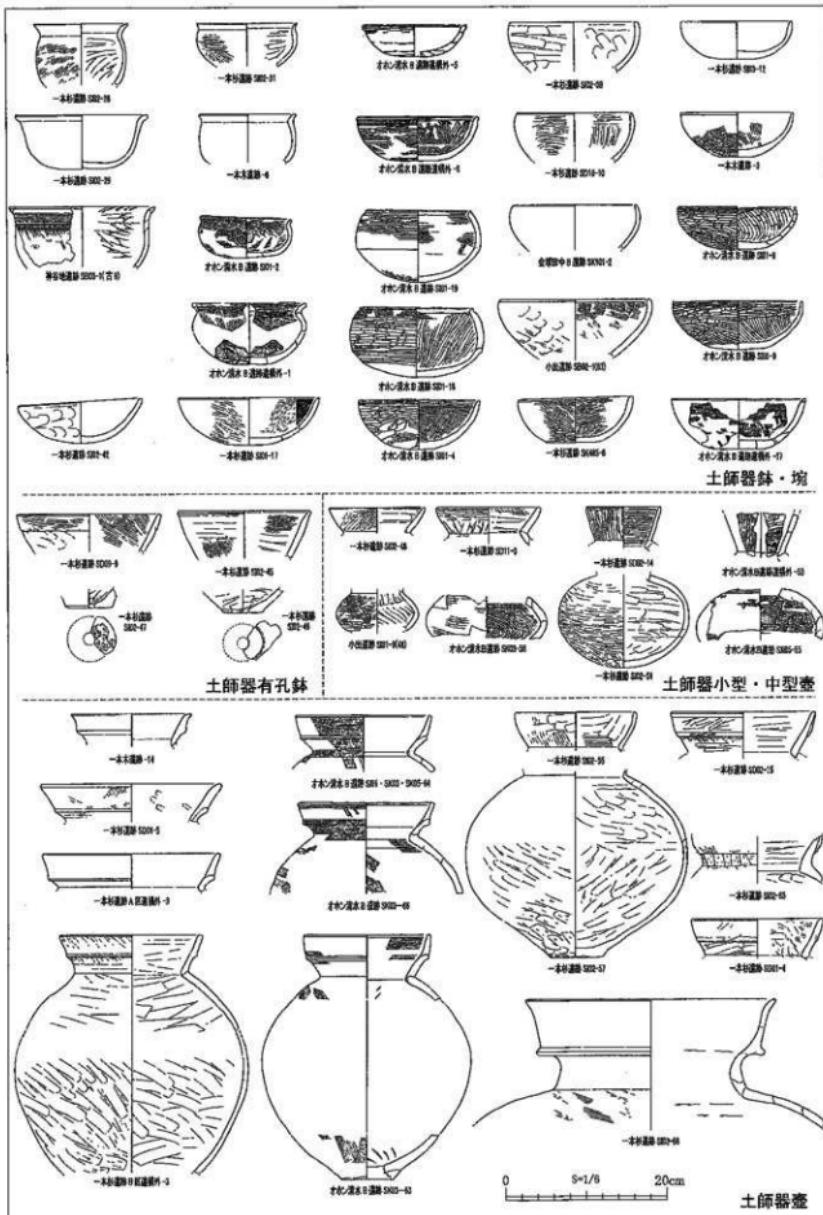


図 11 雄物川上流域 (2)

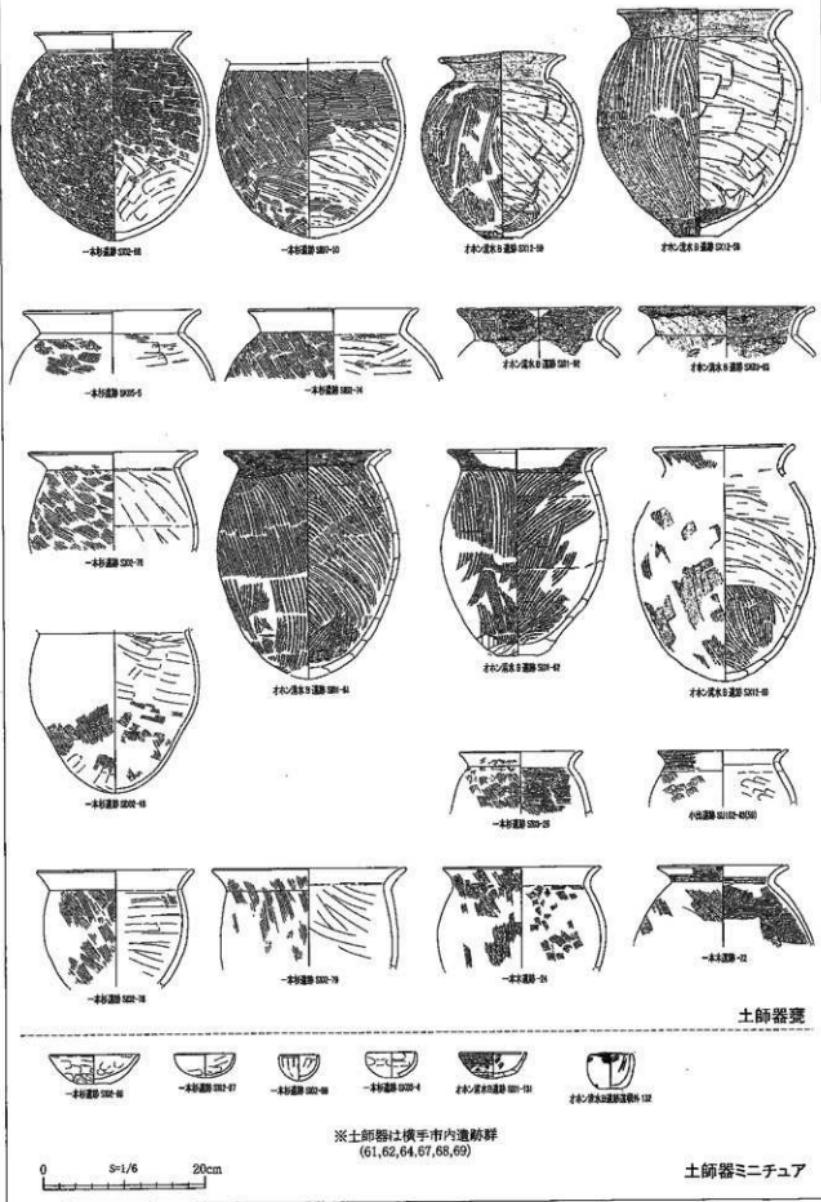
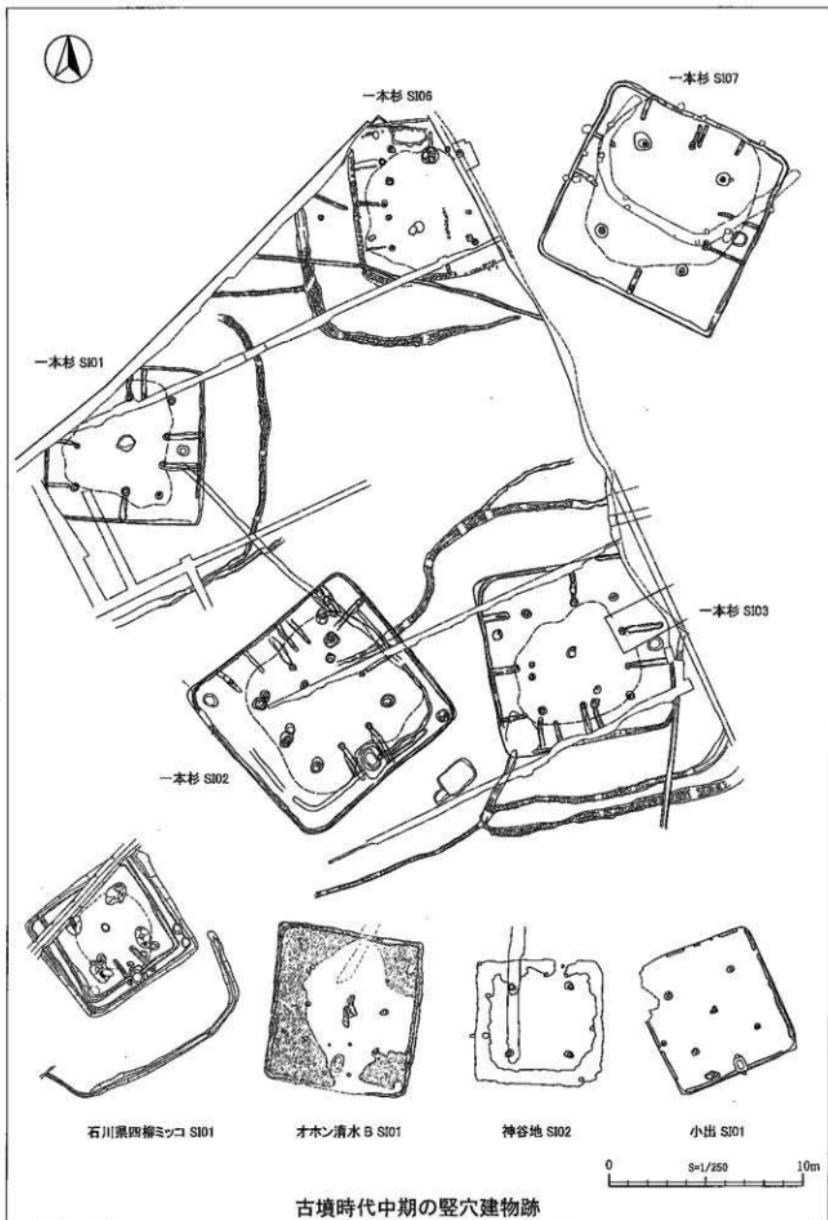
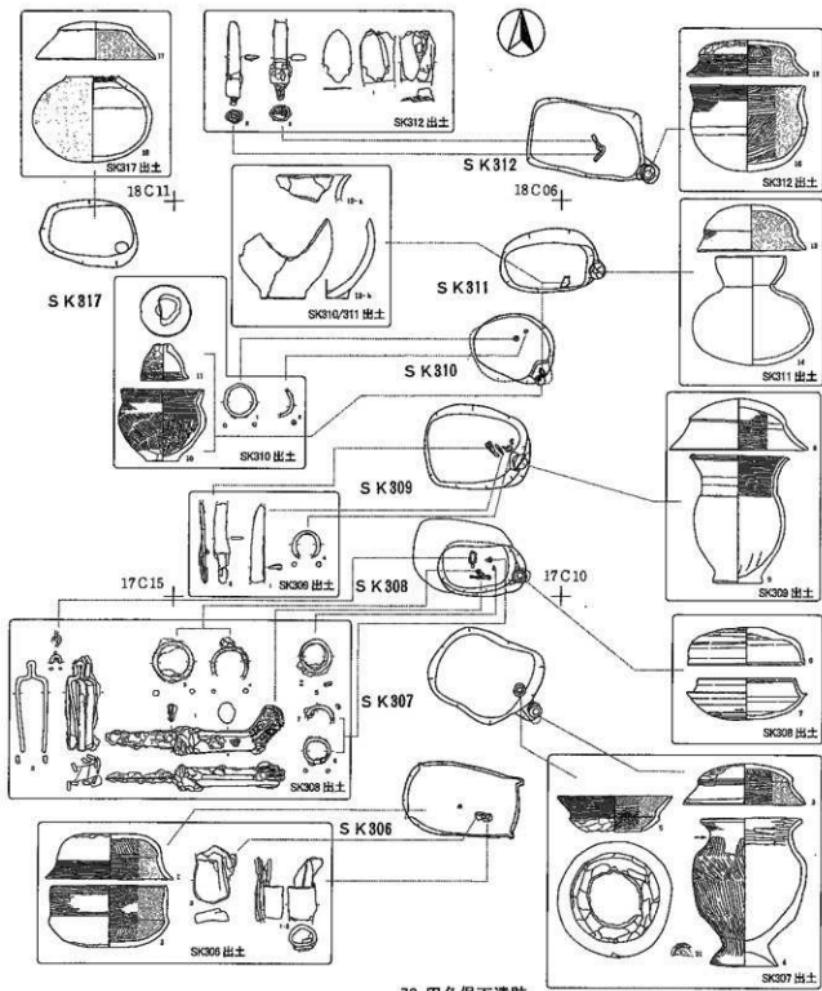


図 12 雄物川上流域 (3)



古墳時代中期の竪穴建物跡

図 13 雄物川上流域 (4)



70. 田久保下遺跡

※土坑墓からは黒曜石も出土している



63. 郷士館 B 遺跡



66. 中藤根遺跡

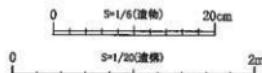


図 14 雄物川上流域 (5)

岩手県における縄繩文文化の土器と墓制

井上雅孝（滝沢市埋蔵文化財センター）

I 遺跡の分布

岩手県において、縄繩文土器（後北C2-D式・北大I・III）が出土する遺跡は、現段階で約75遺跡を数える（表2）。そのうち後北C2-D式土器が出土する遺跡は62遺跡で、主に表掲もしくは遺構外が多いが、滝沢市大石渡V遺跡の焼土群、盛岡市永福寺山遺跡・安倍館遺跡、滝沢市仮沢III遺跡・大石渡遺跡、九戸村長興寺I遺跡などの土壙墓のように縄繩文に関する遺構も確認されている。北大I式土器が出土する遺跡は15遺跡、北大III式土器が出土する遺跡は1遺跡となっている。分布は主に北上川上流域である盛岡市・滝沢市周辺に集中する（図1）。

II 岩手県の縄繩文土器出土状況

岩手県内の縄繩文土器は、後北C2-D式土器、北大I式土器、北大III式土器の出土が確認されており、後北C2-D式以前の後北C1式土器、縄文と沈線で構成される北大II式土器は現段階では出土事例がない。

縄繩文土器を段階的にみると、後北C2-D式前葉の出土事例は少ないが（岩泉町豊岡V遺跡H-4住居跡）、中葉から後葉（段階区分はP1鈴木表I-1参照）、その後の北大I式土器にかけての出土事例が多い（現段階で73遺跡、表参照）。

北東北では北大I式以降、北大式の深鉢と在地土師器が融合した「東北北部型土師器」が出現し（宇部2021）、北大II式以降の縄繩文土器の出土がみられなくなる。ただし岩手県滝沢市高柳遺跡竪穴住居跡（Dh63住・Ea60住・Di72住）では、北大III式土器が唯一確認されているが、一般的な存在傾向を示すものではないとの指摘がある（木村2011）。

表1 縄繩文土器出土状況

| 年代 | 縄繩文土器 | 在地土器 | 出土状況 | 遺跡名 |
|-------------------|-----------|-------------|------|---|
| 2世紀 | 後北C1式土器 | 湯舟沢式 | × | |
| 3世紀 | 後北C2-D式土器 | 前赤穴式 | △ | 豊岡V遺跡 |
| 3世紀 後半～ 4世紀 | | 赤穴式・ 塙釜式 | ○ | 大日向II遺跡、古館山遺跡、長興寺I遺跡、永福寺山遺跡、安倍館遺跡、湯舟沢遺跡、大石渡遺跡、大石渡V遺跡他 |
| | | 塙釜式 | ○ | 仮沢III遺跡、中長内遺跡他 |
| | | 南小泉式 引田式 | ○ | 大久保遺跡、宿田遺跡他 仁沢漸II遺跡他 |
| 5世紀 | 北大I式土器 | 住社式 | × | |
| 6世紀 | 北大II式土器 | 栗圓式 | △ | 高柳遺跡 |
| 7世紀 | 北大III式土器 | | | |

×無（出土土器事例無）、△少（出土土器事例1遺跡）、○多（出土土器事例10遺跡以上）

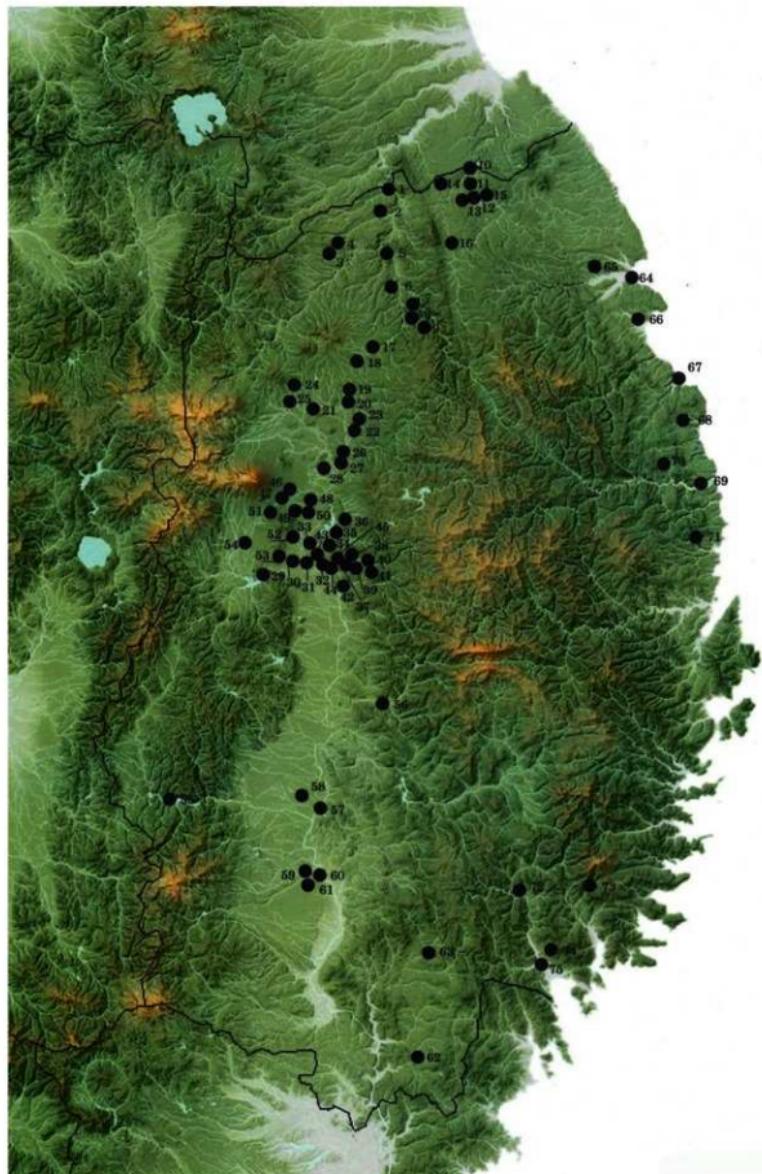
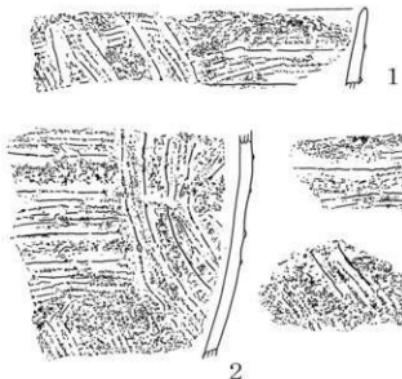


図1 岩手県統繩文土器出土遺跡分布図（遺跡番号は表4のとおり）

表2 岩手県統文土器(後北C2-D式・北大I式～III式)出土遺跡一覧(網掛け 遺構が確認された遺跡)

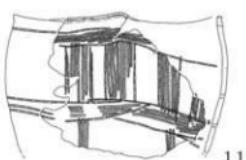
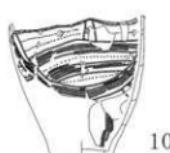
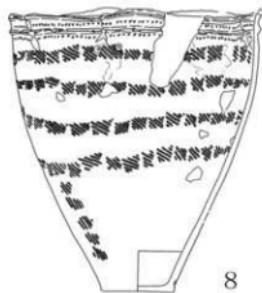
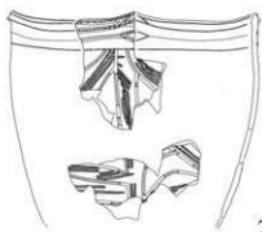
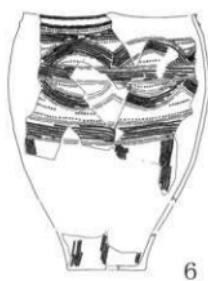
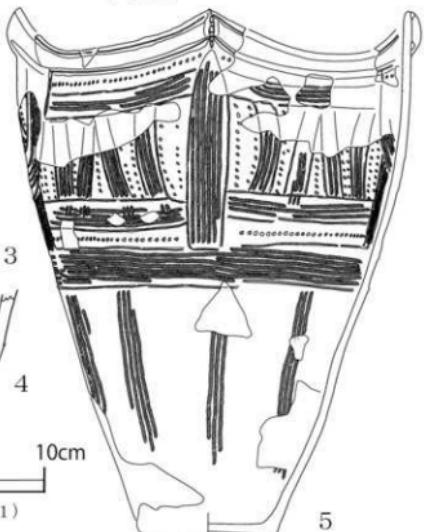
| 地名 | 遺跡名 | 遺構 | 朝鮮文 後北C2 北大I 北大II 北大III 穴式 埴輪式 小屋 圓筒 更張式 漆器品 骨董 石器(磨 石等) 馬糞石(チフ ブ・ランド ス) | 古墳 | 造物 | 漆器品 骨董 石器(磨 石等) 馬糞石(チフ ブ・ランド ス) | 参考 | 文獻 |
|------|---------------|-----------|--|----|----|---|----|---------------------|
| 二戸市 | 001 滝沢遺跡 | 遺構 | ○ | | | | | (高崎-武田1982) |
| | 002 長原遺跡 | 遺構外 | ○ | | | | | (財)岩手県1982) |
| | 003 西ノ保遺跡 | 遺構外 | ○ | | | | | (財)岩手県1988) |
| | 004 大久保遺跡 | 遺構外 | ○ | ○ | ○ | | | (財)岩手県1988) |
| 一戸町 | 005 美保保寺遺跡 | 遺構外 | ○ | ○ | | | | (財)岩手県1987) |
| | 006 東山下1号遺跡 | 遺構 | ○? | | | | | (一戸町1984) |
| | 007 大字2号遺跡 | 遺構 | ○ | | | | | (一戸町1985) |
| | 008 大字3号遺跡 | 遺構 | ○ | | | | | (一戸町1995) |
| | 009 大字口上遺跡 | 遺構 | ○ | ○? | | | | (一戸町1995) |
| | 010 園訪谷遺跡 | 遺構 | ○ | | | | | (高崎-武田1982) |
| 胆泽町 | 011 新田遺跡 | 遺構 | ○ | | | | | (高崎-武田1982) |
| | 012 佐野敷1号遺跡 | 遺構外 | ○ | | | | | (財)岩手県1982) |
| | 013 馬鹿野1号遺跡 | 遺構外 | ○? | ○ | | | | (財)岩手県1986) |
| | 014 犬之向1号遺跡 | 遺構外 | ○ | | | | | (財)岩手県1987) |
| | 015 大字向山1号遺跡 | 田川川地 | ○ | ○ | ○ | | | (財)岩手県1985-1998) |
| | 016 高寺寺山遺跡 | 土壤層 | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | (財)岩手県2002) |
| 岩手町 | 017 伊勢館1号上遺跡 | 遺構 | ○ | | | | | (高崎-武田1982) |
| | 018 小山沢1号遺跡 | 遺構 | ○ | | | | | (高崎-武田1982) |
| | 019 落次沢1号遺跡 | 遺構 | ○ | | | | | (高崎-武田1982) |
| | 020 大字遺跡 | 遺構 | ○ | | | | | (高崎-武田1992) |
| | 021 朝日山遺跡 | 遺構 | ○ | | | | | (高崎-武田1992) |
| | 022 月ノ山1号遺跡 | 遺構外 | ○ | ○ | | | | (財)岩手県1994) |
| 八幡平市 | 023 小湊水遺跡 | 遺構 | ○ | | | | | (岩手町2002) |
| | 024 富士道遺跡 | 遺構 | ○ | | | | | (高崎-武田1982) |
| | 025 2号内山遺跡 | 遺構外 | ○ | | | | | (財)岩手県1944) |
| | 026 平字2号遺跡 | 遺構外 | ○ | | | | | (財)岩手県1998) |
| | 027 武田遺跡 | 遺構 | ○ | | | | | (高崎-武田1982) |
| | 028 T字形柱形石碑遺跡 | 遺構 | ○ | | | | | (高崎-武田1982) |
| 盛岡市 | 029 五又遺跡 | 遺構外 | ○ | ○ | | | | (盛岡市1995) |
| | 030 信越遺跡 | 遺構外 | ○ | | | | | (盛岡市1988) |
| | 031 月森山(米子)遺跡 | 遺構 | ○ | | | | | (高崎-武田1982) |
| | 032 古代居留遺跡 | 遺構外 | ○ | ○ | | | | (盛岡市1987) |
| | 033 受取原遺跡 | 土壤層 | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | (盛岡市1990) |
| | 034 佐藤寺山遺跡 | 土壤層 | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | (盛岡市1990) |
| 盛岡市 | 035 黒牛遺跡 | 遺構 | ○ | | | | | (高崎-武田1982) |
| | 036 向日遺跡 | 遺構外 | ○ | | | | | (財)岩手県1994) |
| | 037 家原遺跡 | 遺構外 | ○ | ○ | | | | (盛岡市2007) |
| | 038 保原遺跡 | 遺構 | ○ | ○ | | | | (盛岡市1986) |
| | 039 前原南遺跡 | 遺構外 | ○ | ○ | | | | (盛岡市1986) |
| | 040 八木原1号遺跡 | 遺構外 | ○ | ○? | | | | (財)岩手県1982) |
| | 041 四日A遺跡 | 遺構 | ○ | | | | | (高崎-武田1982) |
| | 042 仁比方八丁遺跡 | 遺構 | ○ | | | | | (高崎-武田1982) |
| | 043 仁比道遺跡 | 跡跡(主導溝+1) | ○ | ○ | ○ | | ○ | 半井豊豊(財)岩手県2010) |
| | 044 大字道遺跡 | 遺構外 | ○ | ○ | | | | (盛岡市半井豊) |
| | 045 鹿越社遺跡 | 土壤層 | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | (盛岡市2002) |
| | 046 大字2号遺跡 | 土壤層 | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | (半井豊2000)、(盛岡市2006) |
| 盛岡市 | 047 大字3号遺跡 | 土壤層 | ○ | ○? | ○ | ○ | ○ | (盛岡村1985) |
| | 048 梅の沢1号遺跡 | 遺構外 | ○ | ○ | | | | (盛岡村1986) |
| | 049 梅の沢2号遺跡 | 遺構外 | ○ | ○ | | | | (盛岡村1986) |
| | 050 爪の跡遺跡 | 遺構外 | ○ | ○ | | | | (盛岡村1985) |
| | 051 佐野寺遺跡 | 土壤層 | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | (盛岡村2006) |
| | 052 高原遺跡 | 窓穴周縁部 | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | (盛岡村1987) |
| 零石町 | 053 仁比東1号遺跡 | 土壤層 | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | (財)岩手県1992) |
| | 054 半井西遺跡 | 遺構 | ○ | | | | | (高崎-武田1982) |
| | 055 砂の裏1号遺跡 | 遺構 | ○ | | | | | (高崎-武田1982) |
| | 056 大字3号遺跡 | 遺構外 | ○ | | | | | (大庭市2000) |
| | 057 仁比道遺跡 | 遺構外 | ○ | ○ | | | | (財)岩手県1993) |
| | 058 本郷遺跡 | 土壤層 | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | (上野2006) |
| 黒柳町 | 059 中入山遺跡 | 遺構外 | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | (財)岩手県1992) |
| | 060 石田遺跡 | 土坑墓群? | ○ | ○? | | | | (岩手県1981) |
| | 061 沼田遺跡 | 土壁跡群? | ○ | | ○ | ○ | ○ | (半井豊2014) |
| | 062 大字3号遺跡 | 遺構 | ○ | | | | | (高崎-武田1982) |
| | 063 大字8号遺跡 | 遺構外 | ○ | ○ | | | ○ | (大庭市2004) |
| | 064 仁比東2号遺跡 | 土壤層 | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | (財)岩手県1995) |
| 久慈市 | 065 仁比道遺跡 | 土壤層 | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | (久慈市1985) |
| | 066 仁比道2号遺跡 | 遺構外 | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | (財)岩手県1993) |
| | 067 長原山遺跡 | 遺構外 | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | (野田村1987) |
| | 068 大字名立遺跡 | 遺構外 | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | (岩代村1988) |
| | 069 大字道遺跡 | 遺構 | ○ | | | | | (高崎-武田1982) |
| | 070 多賀高穴 | 洞穴内 | ○ | | | | | (小田野村1987)、(下野2010) |
| 宮古町 | 071 初原平遺跡 | 遺構 | ○ | | | | | (高崎-武田1982) |
| | 072 小松沢穴 | 第2.洞口蓋土 | ○ | | | | | (岩手県立博物館2000) |
| | 073 上野生遺跡 | 遺物包埋帶 | ○ | | | | | (財)岩手県1997) |
| | 074 西ノ保1号遺跡 | 流れ込み | ○ | | | | | ((財)岩手県2017) |
| | 075 安原下2号遺跡 | 遺構外 | ○ | | | | | (岩手県立博物館2016) |

前葉

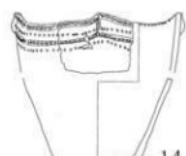
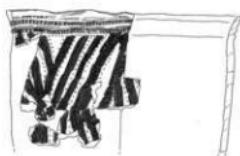


0 10cm
(1~4 縮尺2分の1)

中葉



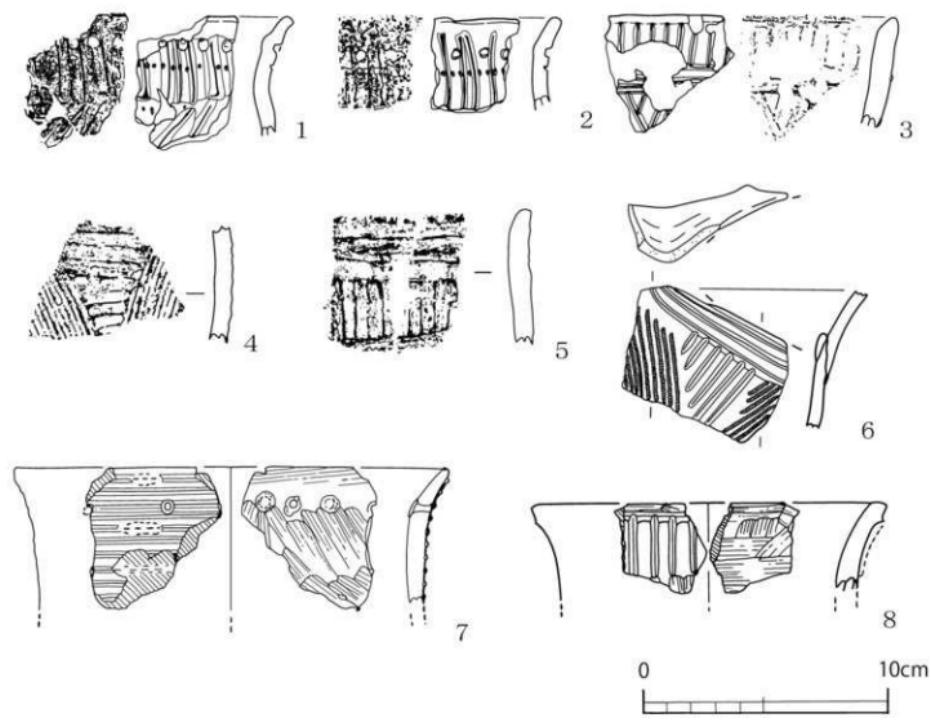
後葉



0 20cm
(5~14 縮尺6分の1)

図2 岩手県出土の後北C2-D式土器 70

北大 I 式土器



北大 III 式土器

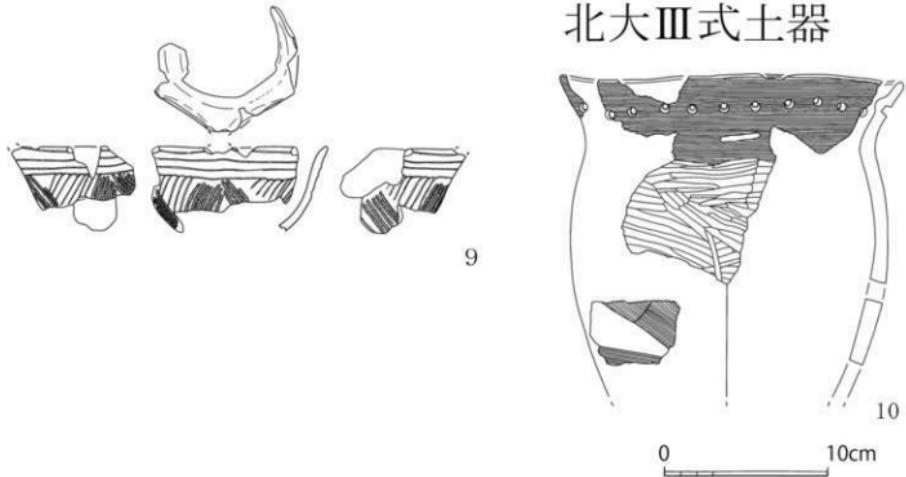
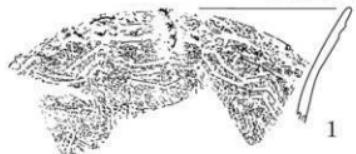


図3 岩手県出土の北大式土器(I・III式)

(9～10 縮尺 3分の1)

豊岡V遺跡H-4 住居跡

赤穴式 (1~4)



1



2

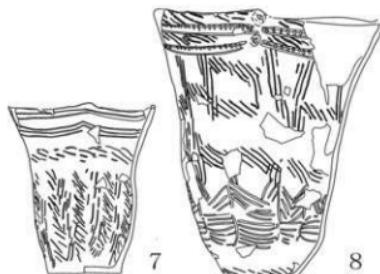
後北C2-D式 (5~6)



5

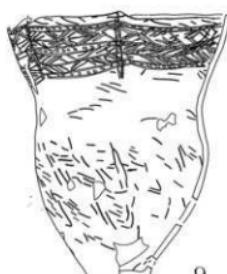
長興寺I遺跡第68土坑

赤穴式 (7~9)



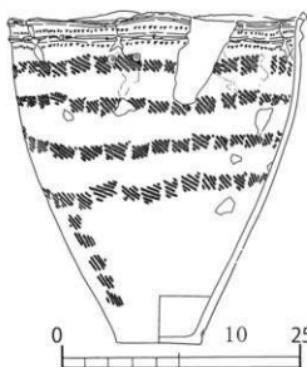
7

8



9

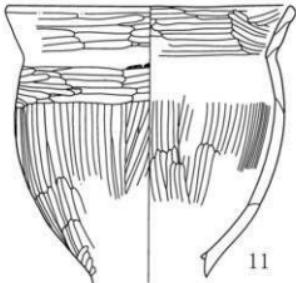
後北C2-D式 (10)



0

25cm

安倍館 RD030 塩釜式 (11)



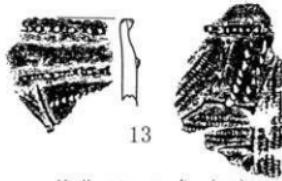
11

赤穴式 (12)



12

後北C2-D式 (13~14)

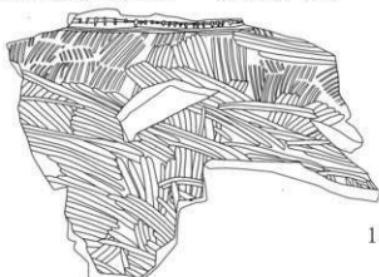


13

14

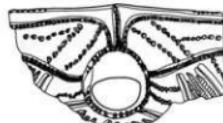
永福寺山遺跡土壙墓 7

塩釜式 (15)

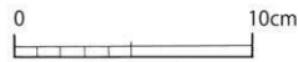


15

後北C2-D式 (16)



16



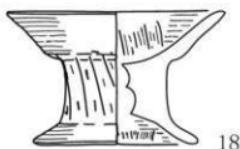
(縮尺2分の1)

図4 岩手県出土の縦縄文土器共伴関係 (1) ⁷²

沢田遺跡 1号土坑
南小泉式 (17 ~ 18)

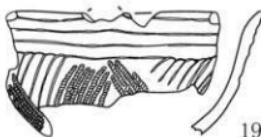


17



18

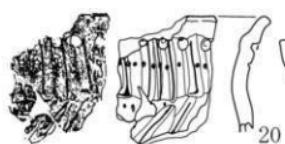
北大 I 式 (19)



19

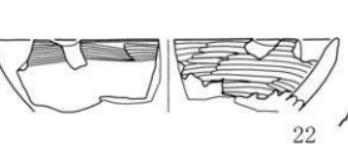
宿田遺跡

北大 I 式 (20 ~ 21)

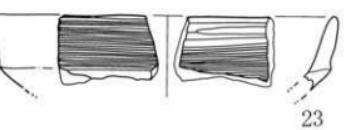


20

南小泉式 (22 ~ 23)

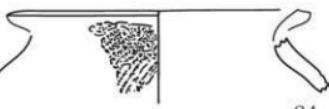


22



23

宇田型甕 (24)



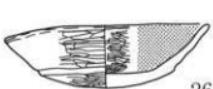
24

0 10cm
(縮尺 2分の1)

高柳遺跡 Dh63 壺穴住居跡他
栗圓式 (25 ~ 30)



25

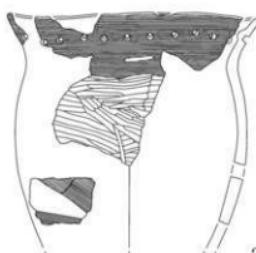


26



30

北大III式 (31)



31

0 20cm
(縮尺 4分の1)

図 5 岩手県出土の縄繩文土器共伴関係 (2)

III 統縄文土器の共伴関係

岩手県内で後北 C2-D 式土器と赤穴式土器の共伴事例は、岩泉町豊岡 V 遺跡 H-4 住居跡（後北 C2-D 式前葉段階）、岩手県九戸村長興寺 I 遺跡第 68 号土坑（後北 C2-D 式中葉段階）がある。

後北 C2-D 式土器、赤穴式土器、塙釜式の共伴事例は、盛岡市安倍館遺跡 R D 030 土坑で後北 C2-D 式中葉段階、塙釜式 1 式、盛岡市永福寺山遺跡土壤墓 1・2・3・5・7 で後北 C2-D 式中葉段階、塙釜式 1 式が出土している。ただし、後北 C2-D 式土器、塙釜式土器と比べ出土点数が少なく、赤穴式土器を混入と推定している（盛岡市 1997）。なお、木村高氏がすでに指摘しているとおり、赤穴式と塙釜式の共伴事例は皆無であり、赤穴式が土師器に移行した資料も確認できていない。3 世紀後半から 4 世紀紀前半？の期間に弥生土器の系譜を引く赤穴式土器、古墳時代前期の土師器である塙釜式、統縄文の後北 C2-D 式土器の三系統の土器が共存していた可能性も否定できない（木村 1999）。赤穴式土器の終末時期についてはまだ検討の余地がありそうである。5 世紀以降では、奥州市沢田遺跡 1 号土坑では北大 I 式土器と古墳時代中期の南小泉式土器、滝沢市高柳遺跡堅穴住居で北大 III 式土器と 7 世紀前葉の土師器である栗圓式土器が共伴している。なお、遺構外ではあるが、盛岡市宿田遺跡では、北大 I 式土器、南小泉式土器と東海系の土器「宇田型甕」が共伴しており、時期的（5 世紀前葉）にも整合する（井上・早野 2013）。

表 3 岩手県における統縄文土器共伴関係

| 遺跡名 | 遺構名 | 層位 | 統縄文 | 弥生 | 土師器 | 年代 |
|----------|---|--------------------|--------------|----------|---------------|--------------------|
| 豊岡 V 遺跡 | H-4 住居跡 | 住居内 | 後北 C2-D 式期前葉 | 赤穴式 | | 3 世紀前半 |
| 長興寺 I 遺跡 | 第 68 号土坑 | 土坑内 | 後北 C2-D 式期中葉 | 赤穴式 | | 3 世紀後半 |
| 安倍館遺跡 | R D 030 土坑 | 土坑内 | 後北 C2-D 式期中葉 | 赤穴式 | 塙釜式臺 (1 式) | 3 世紀後半 ~ 4 世紀前半 |
| 永福寺山遺跡 | 土壤墓 1 | 土壤内 | 後北 C2-D 式期中葉 | 赤穴式 臺 | 塙釜式 (1 式) | 3 世紀後半 ~ 4 世紀前半 |
| | 土壤墓 2・3 | 土壤内 | 後北 C2-D 式期中葉 | 赤穴式 | 塙釜式 (1 式) | |
| | 土壤墓 4 | 土壤内 | 後北 C2-D 式期中葉 | | 塙釜式 (1 式) | |
| | 土壤墓 5 | 土壤内 | 後北 C2-D 式期中葉 | 赤穴式 | 塙釜式 (1 式) | |
| | 土壤墓 6 | 土壤内 | 後北 C2-D 式期中葉 | | 塙釜式 (1 式) | |
| | 土壤墓 7 | 土壤内 | 後北 C2-D 式期中葉 | 赤穴式 | 塙釜式 (1 式) | |
| 沢田遺跡 | 1 号土坑 | 土坑内 | 北大 I 式 | | 南小泉式 | 5 世紀前葉 |
| 高柳遺跡 | D h 63 堅穴住居 E a 60 堅穴住居 D i 72 堅穴住居 | 住居内 3 層～ 4 層 | 北大 III 式 | | 栗圓式 | 7 世紀前葉 |

※塙釜式編年（青山 2010）参照

※永福寺山遺跡土壤墓出土の赤穴式についてはトレンチの混入と推定している（盛岡市 1997）。

図 2 岩手県内出土の後北 C2-D 式

- 1～4：岩泉町豊岡 V 遺跡、5：軽米町大日向 II 遺跡、
- 6：野田村古館山遺跡、7：滝沢市湯舟沢 III 遺跡、
- 8：九戸村長興寺 I 遺跡、9：滝沢市大石渡遺跡、
- 10～11：滝沢市大石渡 V 遺跡、12～13：滝沢市仏沢 III 遺跡、14：久慈市中長内遺跡

図 3 岩手県内出土の北大式土器 (I 式・III式)

- 1～3：盛岡市宿田遺跡、4～5：奥州市石田遺跡、
- 6：奥州市中平入遺跡、7～8：二戸市大久保遺跡、
- 9：奥州市沢田遺跡、10：滝沢市高柳遺跡

IV 続縄文期の土壙墓

1 立地

標高の高い丘陵頂部もしくは緩斜面上に立地する（表4）。

表4 後北C2-D式期の土壙墓が確認された遺跡一覧

| 年代 | 時期 | 市町村名 | 遺跡名 | 土壙墓数 | 立地 | 標高(m) |
|-----------|--------------------|------|---------|------|--------|----------|
| 3世紀後半～4世紀 | 後北C2-D式期・赤穴式・塩釜式併行 | 九戸村 | 長興寺I遺跡 | 1 | 丘陵頂部斜面 | 363 |
| | | 滝沢市 | 仏沢III遺跡 | 6 | 丘陵緩斜面 | 180～240 |
| | | | 大石渡遺跡 | 3 | 丘陵緩斜面 | 225 |
| | | 盛岡市 | 永福寺山遺跡 | 7 | 丘陵頂部斜面 | 150～200? |
| | | | 安倍館遺跡 | 7 | 段丘緩斜面 | 145 |

2 土壙墓

3世紀後半から4世紀にかけての土壙墓は、北海道の事例と同様に袋状ピットを持つタイプ（長興寺I遺跡、永福寺山遺跡）と付属施設を持たないタイプ（大石渡遺跡、仏沢III遺跡、安倍館遺跡）に分かれる（図9）。前者のタイプには、袋状ピットと土壙底面に土器等を埋納するが、後者のタイプには土壙上面に散布もしくは埋置しており、埋葬儀礼も異なる点が指摘される。5世紀以降になると、零石町仁沢瀬II遺跡土壙墓、盛岡市薬師社脇造跡土壙墓のように続縄文的要素の袋状ピットは残存するものの、合口の土師器を埋葬するなど副葬品に続縄文関連の遺物が認められなくなる（仁沢瀬II遺跡は土壙墓外より北大I式土器出土）。ただし、一部には黒曜石製石器を散布する伝統も残っており、7世紀代の北上市岩崎台地遺跡群の古墳まで残存するようである。

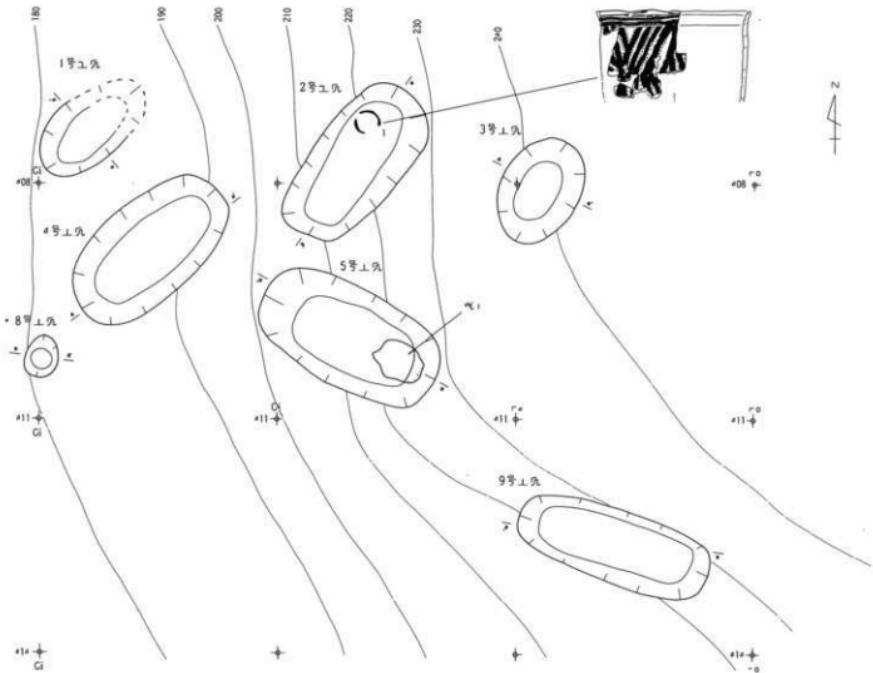
表5 土壙墓出土遺物一覧

| 遺跡名 | 遺構名 | 出土遺物 | | | | | | | | | | | |
|-------|--------|---------|----|----|----|---|---|----|---|----|----|-----|---|
| | | 土器の出土状況 | | | 土器 | | | 石器 | | 管玉 | 勾玉 | 鉄製品 | |
| | | 袋状ピット | 上層 | 上面 | 後 | 赤 | 塩 | 黒 | 方 | | | 鍔 | 刀 |
| 長興寺I | 第68号土坑 | ○ | ○ | | ○ | ○ | | | | ○ | | ○ | |
| 仏沢III | 第2号土坑 | | | ○ | ○ | | | | | | | | |
| 大石渡 | 土壙No15 | | ○ | | | | | | ○ | | | | |
| | 土壙No16 | | ○ | ○ | | | | ○ | | | | | |
| | 土壙No17 | | | | | | | ○ | | | | | |
| | 土壙周辺 | | | | | | | | | ○ | | | |
| 永福寺山 | 土壙墓1 | | ○? | ○? | ○ | ○ | ○ | | | | ○ | | |
| | 土壙墓2 | | ○? | ○? | ○ | ○ | ○ | | | | | | |
| | 土壙墓3 | | ○? | ○? | ○ | ○ | ○ | | | | | ○ | |
| | 土壙墓4 | | ○? | ○? | ○ | | ○ | | | | | | |
| | 土壙墓5 | | ○? | ○? | ○ | ○ | ○ | | | | | | |
| | 土壙墓6 | | ○? | ○? | ○ | | ○ | | | | | | |
| | 土壙墓7 | | ○? | ○? | ○ | ○ | ○ | | | | | | |
| | 土壙周辺 | | | | | | | | | ○ | ○ | | |

後北C2-D式、赤-赤穴式、塩-塩釜式、黒-黒曜石、方-方割石

※永福寺山遺跡土壙墓出土の赤穴式についてはトレンチの混入と推定している（盛岡市1997）。

仏沢III遺跡



大石渡遺跡

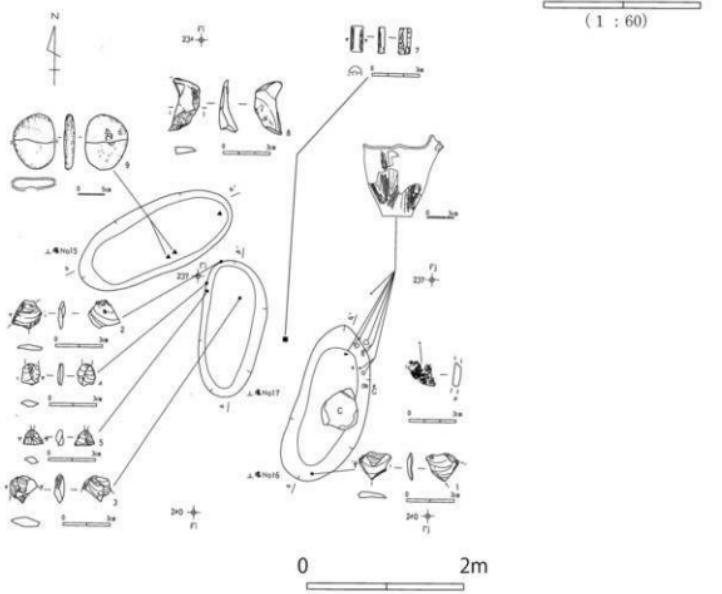
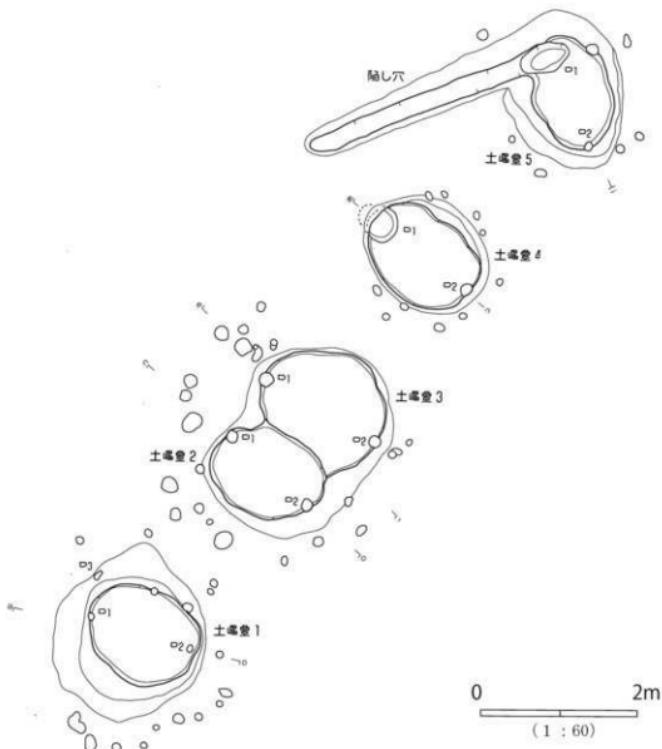


図6 続縄文の土塚墓配置 (1)



長興寺 I 遺跡第 68 土坑

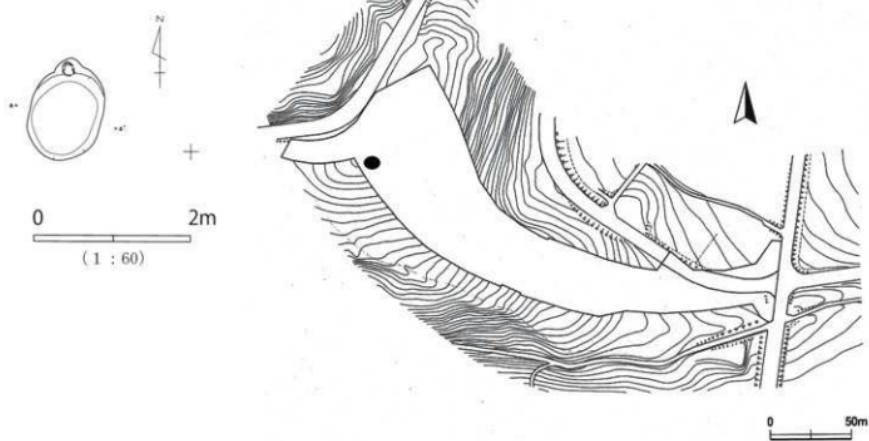
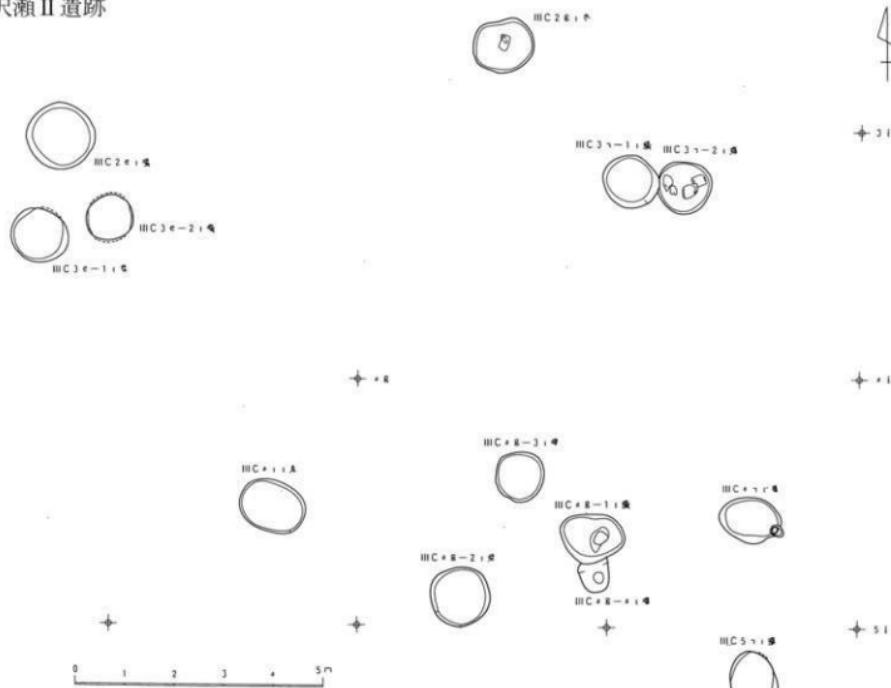


図 7 続縄文の土壙墓配置 (2)

仁沢瀬II遺跡



薬師社脇遺跡

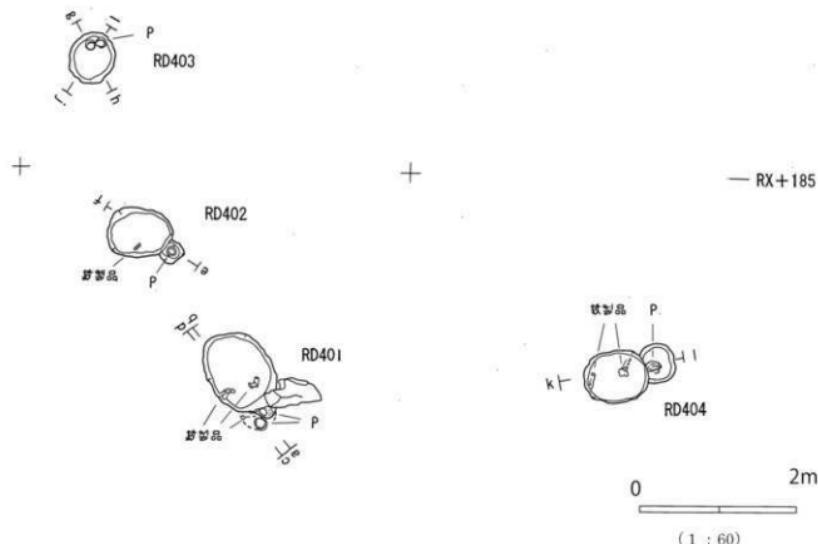
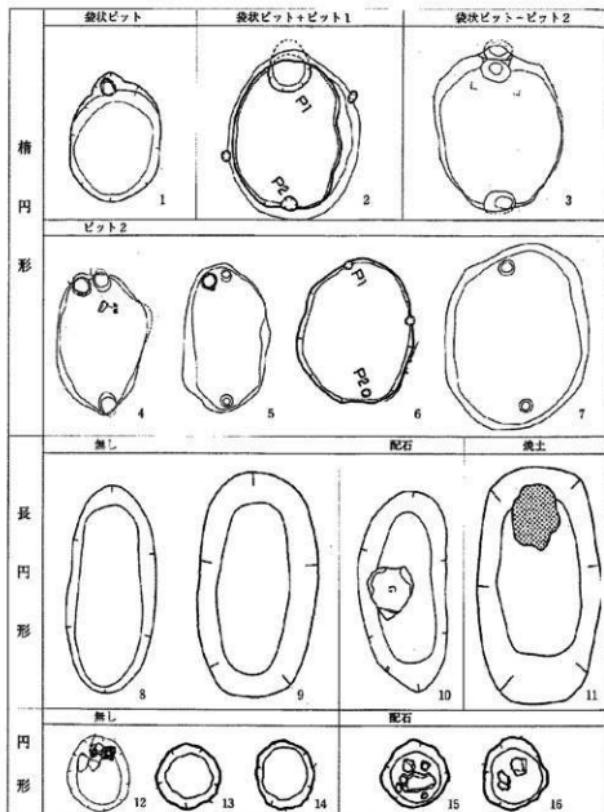


図8 古墳時代の土壙墓配置



S = 1 /50

1 長興寺 I、2・6 永福寺山、3～5・7 寒川Ⅲ、8・10 大石渡、9・10 仏沢Ⅲ、12 真堤沢（3）、13～16 安倍館

図9 後北 C2-D式期の土壙墓

引用文献（報告書等については表6を参照）

青山博樹 2010 「古墳時代前期の土器編年－仙台平野とその周辺－」『北社』辻秀人先生還暦記念論集刊行会

井上雅孝・早野浩二 2013 「岩手県岩手郡遠沢村大釜館遺跡出土の字田型甕について」『波波大学 先史学・考古学研究』第24号

宇部則保 2021 「東北北部型土師器について」『研究紀要』第10号八戸市埋蔵文化財センター是川調査会

木村高 1999 「東北地方北部における弥生系土器と古式土師器の併行関係」『研究紀要』4 青森県埋蔵文化財調査センター

木村高・鈴木信 2011 「古墳時代並行期の北方文化」『講座日本の考古学7 古墳時代（上）』青木書店

表6 岩手県統繩文出土遺跡文献リスト

報告書

| 編集機関 | 発行年 | 書名 | シリーズ名 |
|--------------------------|------|--|---------------------------|
| 岩手県立博物館 | 2000 | 気仙郡住田町小松沢穴兔掘調査報告書 | 岩手県立博物館調査研究報告書第16冊 |
| 岩手県教育委員会 | 1981 | 東北縦貫自動車開通記念文化財調査報告書X (石田遺跡) | 岩手県文化財調査報告書第61集 |
| 岩泉町教育委員会 | 2006 | 垂沢V遺跡-平成16年度兔掘調査報告書- | 岩泉町文化財調査報告第43集 |
| -戸町教育委員会 | 1994 | 一戸町の遺跡(IV) 平成5年度町内遺跡詳細分布調査報告書 | 一戸町文化財調査報告書第30集 |
| -戸町教育委員会 | 1995 | 一戸町の遺跡(Ⅴ) 平成6年度町内遺跡詳細分布調査報告書 | 一戸町文化財調査報告書第37集 |
| 岩手町教育委員会 | 2002 | 町内遺跡詳細分布調査報告書V | 岩手町埋蔵文化財調査報告書第15集 |
| 大迫町教育委員会 | 2000 | 大迫町Ⅱ遺跡兔掘調査報告書 | 大迫町埋蔵文化財調査報告第22集 |
| 北上市教育委員会 | 1996 | 北上遺跡群(1995年度) 本宿・別宿 | 北上市埋蔵文化財調査報告第23集 |
| 久慈市教育委員会 | 1988 | 中島内遺跡兔掘調査報告書 | 久慈市埋蔵文化財調査報告書第8集 |
| 海沢村教育文化センター | 2000 | 弘前V遺跡-平成2年度調査報告書- | 海沢村埋蔵文化財センター調査報告書第3集 |
| 海沢村教育委員会 | 1993 | 大石道遺跡 | 海沢村文化財調査報告書第24集 |
| 海沢村教育委員会 | 1995 | 津波沢遺跡 | 海沢村文化財調査報告書第2集 |
| 海沢村教育委員会 | 1987 | 高郷遺跡 | 海沢村文化財調査報告書第7集 |
| 海沢村教育委員会 | 1999 | 東の郷地蔵園普請事業兔掘調査報告書 - 室小路1-7-11-15-16遺跡- | 海沢村文化財調査報告書第31集 |
| 大東町教育委員会 | 2004 | 大東地帯遺跡兔掘調査報告書 | 大東町文化財調査報告書29集 |
| (財) 岩手県埋蔵文化財センター | 1982 | 二戸V(イシヤマ)遺跡兔掘調査報告書 二戸市長瀬V遺跡 | 岩手県埋蔵文化センター文化財調査報告書第36集 |
| (財) 岩手県埋蔵文化財センター | 1983 | 从原敷1-1号遺跡兔掘調査報告書 | 岩手県埋蔵文化センター文化財調査報告書第61集 |
| (財) 岩手県埋蔵文化財センター | 1984 | 上ノ内Ⅱ・Ⅳ-V遺跡兔掘調査報告書 | 岩手県埋蔵文化センター文化財調査報告書第71集 |
| (財) 岩手県文化振興団体埋蔵文化財センター | 1986 | 鳴鳴塚VII遺跡兔掘調査報告書 | 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第99集 |
| (財) 岩手県文化振興団体埋蔵文化財センター | 1987 | 御所保1-1・II-1・III-V遺跡兔掘調査報告書 | 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第116集 |
| (財) 岩手県文化振興団体埋蔵文化財センター | 1988 | 大久夜遺跡-西久夜遺跡兔掘調査報告書 | 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第121集 |
| (財) 岩手県文化振興団体埋蔵文化財センター | 1992 | 越1-1・山田遺跡兔掘調査報告書 | 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第175集 |
| (財) 岩手県文化振興団体埋蔵文化財センター | 1992 | 上八木田・IV-V遺跡兔掘調査報告書 | 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第177集 |
| (財) 岩手県文化振興団体埋蔵文化財センター | 1993 | 川沢溝遺跡兔掘調査報告書 | 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第185集 |
| (財) 岩手県文化振興団体埋蔵文化財センター | 1993 | 御所保遺跡兔掘調査報告書 | 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第187集 |
| (財) 岩手県文化振興団体埋蔵文化財センター | 1994 | 向城遺跡兔掘調査報告書 | 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第206集 |
| (財) 岩手県文化振興団体埋蔵文化財センター | 1995 | 大久I・II号遺跡兔掘調査報告書 | 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第225集 |
| (財) 岩手県文化振興団体埋蔵文化財センター | 1997 | 上原生遺跡兔掘調査報告書 | 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第253集 |
| (財) 岩手県文化振興団体埋蔵文化財センター | 1998 | 大久II・日向II号遺跡兔掘調査報告書 | 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第273集 |
| (財) 岩手県文化振興団体埋蔵文化財センター | 1999 | 平田II号遺跡兔掘調査報告書 | 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第304集 |
| (財) 岩手県文化振興団体埋蔵文化財センター | 2000 | 中央大入遺跡-板谷塙古墳兔掘調査報告書 | 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第380集 |
| (財) 岩手県文化振興団体埋蔵文化財センター | 2002 | 長良寺1号遺跡兔掘調査報告書 | 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第388集 |
| (財) 岩手県文化振興団体埋蔵文化財センター | 2009 | 平岡遺跡兔掘調査報告書 | 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第546集 |
| (公財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター | 2014 | 沢田遺跡兔掘調査報告書 | 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第626集 |
| (公財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター | 2017 | 西和野1号遺跡兔掘調査報告書 | 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第669集 |
| 豪代村教育委員会 | 1990 | 太田郡野柳跡 平成9年度緊急兔掘調査報告書 | 豪代村埋蔵文化財調査報告書第1集 |
| 盛岡市教育委員会 | 1986 | 盛岡市埋蔵文化財調査年報-昭和59年度- | |
| 盛岡市教育委員会 | 1987 | 盛岡市埋蔵文化財調査年報-昭和60年度- | |
| 盛岡市教育委員会 | 1989 | 上ノ内遺跡 桥去經遺跡-昭和60年度兔掘調査概報- | |
| 盛岡市教育委員会 | 1995 | 繁榮遺跡-昭和5-6年度兔掘調査概報- | |
| 盛岡市教育委員会 | 1997 | 水沢寺山遺跡-昭和40-41年兔掘調査報告書- | |
| 盛岡市教育委員会 | 1999 | 安積郡遺跡-蔚川遺跡の調査- | |
| 盛岡市教育委員会 | 2002 | 盛岡市内遺跡群-平成13年度兔掘調査概報- | |
| 盛岡市教育委員会 | 2008 | 井川-平野遺跡-深堀遺跡-浅野地区古墳群事務連絡会調査報告書市役所版 | |
| 野田村教育委員会 | 1987 | 古賀山一帯と昭和5年三月場遺跡兔掘調査報告書(遺物編)- | 野田村文化財調査報告書 |
| 陸前高田市教育委員会 | 2016 | 愛宕下2号遺跡兔掘調査報告書 | 陸前高田市文化財調査報告第30集 |
| 論文 | | | |
| 執筆者 | 発行年 | 論文名 | 掲載誌 |
| 井上雅幸 | 1996 | 海沢村大石渡V遺跡 | 第16回岩手考古学会研究大会発表資料 |
| 井上雅幸 | 2002 | 岩手県における縄繩文化 | 第29回岩手考古学会研究大会発表要旨 |
| 井上雅幸・早野浩二 | 2013 | 岩手県岩手郡海沢村大石渡遺跡出土の芋田型墓について | 筑波大学 先史学・考古学研究第24号 |
| 小田野哲喜 | 1987 | 岩手の弥生・土器編年試論 | 岩手県立博物館調査研究報告第5号 |
| 日下和寿 | 2010 | 小田島コレクションの洞窟遺跡資料について | 岩手考古学第21号 |
| 森藤邦雄 | 1993 | 岩手県にみられる後北武土器と在地形成土器について | 岩手考古学第5号 |
| 黒崎裕治・武田良夫 | 1981 | 岩手県にみける後北武式 | 北奥古代化第12号 |
| 花井正善 | 2002 | 黒澤社址遺跡-古墳時代の土器墓について | 岩手考古学第28回研究大会発表要旨 |
| 吉田義典・武田良夫 | 1970 | 江戸畠式土器の分布 | 奥羽史談第59号 |

土器と墓制 から見た 北東北の 縄縄文文化

令和3年度 埋蔵文化財講座
「土器と墓制から見た北東北の縄縄文文化」資料

発行 令和4年（2022）3月19日

編集 滝沢市埋蔵文化財センター

〒020-0617

岩手県滝沢市湯舟沢327-13

電話（019）694-9001

印刷 株式会社富士屋印刷所

〒020-0841

盛岡市羽場13-30-10

電話（019）637-6391

講師

島田祐
悦

木
村高

鈴木
信

小保
内裕之

